

# 宮城県N I E委員会実践報告書

〈第27号〉

====目 次====

## I あいさつ

N I Eへの期待	宮城県N I E委員会	会長 星 豪	……………1
N I Eの普及と発展を願って	宮城県N I E推進委員会	委員長 佐藤 一浩	……………2

## II 寄稿

『新聞ワークシートポスト』を開ける楽しい日々	宮城県N I E推進委員会	副委員長 森屋 勝治	……………3
------------------------	---------------	------------	--------

## III 実践報告

### 1 実践指定校・奨励校実践報告

(1) 新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成	七ヶ浜町立松ヶ浜小学校	……………4
(2) 新聞に親しみ、活用しようとする児童の育成	仙台市立田子小学校	……………10
(3) 相手意識を持って自分の考えを表現する～新聞から学ぶ～	蔵王町立宮中学校	……………16
(4) 英語科と総合的な学習の時間での新聞活用	仙台市立仙台青陵中等教育学校	……………24
(5) 新聞記事データベースを利用した防災教育	宮城県多賀城高等学校	……………32
(6) 生きる言葉の力を高めるN I E	塩竈市立第一小学校	……………36
(7) 新聞に親しみ、「読む」・「考える」・「発表する」・「活用する」力の育成	登米市立上沼小学校	……………38
(8) 考える力・表す力を高めるN I E	仙台市立中野栄小学校	……………40
(9) 未来を切り開いていく力を育むN I E	仙台市立七北田小学校	……………42
(10) 授業におけるN I Eの活用	利府町立利府西中学校	……………44
(11) 宮城学院中学校におけるN I E初年度の実践報告	宮城学院中学校	……………46
(12) 高等学校におけるL H R、S H Rでの新聞の活用	東北学院高等学校	……………48

### 2 部会活動実践報告

(1) 小学校部会報告	仙台市立七北田小学校	教諭 今藤 正彦	……………50
(2) 中学校部会報告	仙台市立八木山中学校	教諭 石井 宜	……………51
(3) 高等学校部会報告	宮城県水産高等学校	教諭 平居 高志	……………52

### 3 大学からの報告

大学におけるN I E	東北福祉大学	特任准教授 堀江 謙一	……………53
-------------	--------	-------------	---------

### 4 その他の実践報告

p4cによるN I E授業	仙台市立高森中学校	木下 晴子	……………54
---------------	-----------	-------	---------

#### IV 研修会報告

##### 1 宮城県N I E研究大会

- (1) 大会の概要 宮城県N I E委員会コーディネーター 齋藤 昭雄 ……59
- (2) 3年道徳：学習指導案 仙台市立田子小学校 教諭 安倍 豊 ……60
- (3) 5年国語：学習指導案 仙台市立田子小学校 教諭 鈴木 優太 ……64
- (4) 公開授業の様子 ……69
- (5) 全体会の記録 ……70
- (6) 講演「新聞が育てることばの力」 宮城教育大学 教授 児玉 忠氏 ……71

##### 2 宮城県N I E地区研修会

研修会の概要 ～たのしく学ぶN I E～

宮城県N I E委員会コーディネーター 齋藤 昭雄 ……75

##### 3 東北・北海道ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議

宮城県N I E委員会事務局長 砂金 慎 ……76

#### V みんなの広場

宮城県N I E研究大会に参加して

宮城教育大学 4年 三浦 晴信 ……77

新聞から広がる学び

宮城教育大学 4年 佐々木菜摘 ……77

#### VI 研究組織

- 1 宮城県N I E委員会会則 ……78
- 2 宮城県N I E推進委員会会則 ……79
- 3 宮城県N I E委員会及び宮城県N I E推進委員会の構成 ……80

#### VII 宮城県N I Eの歩み ……82

#### VIII 編集後記 ……88

## I あいさつ



### N I Eへの期待

宮城県N I E委員会

会 長 星 豪

(大崎市立古川中学校長)

本県のN I E活動は本年度で27年目を迎えました。これまで、教育現場と地元新聞社・全国紙・通信社等が一体となり協力して普及、実践、研究に努められ、研修会や研究大会などを通じて県内全域への「新聞に親しませる」「授業に新聞を活用する」などの取組みの浸透を図ってきており大きな成果を上げております。本年度も活動の集大成としてN I E実践報告書第27号が関係の皆様のご協力で発刊されましたことに深く感謝を申し上げます。

さて、平成27年度の活動を振り返りますと実践指定校11校、奨励校1校での研究実践、塩竈市立第一小学校での地区研修会や仙台市立田子小学校での県N I E研究大会が開催され充実した活動を展開することができました。さらには、7月末に第20回N I E全国大会秋田大会が開催され全国からの教員や新聞関係者ら約1,000人が参加し、本県からも多数が参観しました。「みやぎN I Eだより」には全国大会に参加された先生方からの感想が紹介されています。小中学生の学力が全国トップレベルの秋田県での開催とあって参観者の関心も高く、公開授業や実践発表からN I Eの多様な実践が児童・生徒の主体性を引き出すことや深い思考を生み出すなどの教育効果を実感し、今後のN I E実践への意欲を高められました。また、12月の仙台市立田子小学校での県研究大会では、3年生の道徳、5年生の国語の授業公開がありました。国語では、たくさん言葉と出会える新聞の素晴らしさ、道徳では、新聞の効果的な活用を図るなど、心に残る授業が展開されました。

新学習指導要領では、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な「思考力、判断力、

表現力」の育成が求められており、新聞の活用が明確に位置づけられております。次年度から採用される中学校の教科書においても、新聞を題材にした学習が従来に比べ増加しております。また、次期指導要領の改定に於いては、「アクティブ・ラーニング」が注目されています。N I Eは正に課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」の実現に大きく期待される分野であります。身近な情報の宝庫ともいえる新聞を授業に取り入れることは、授業内容を豊かにし、特に言語活動の充実や広く社会への興味関心を促し、情報を選択・処理する能力を高めるとともに、キャリア教育等の推進にも貢献するものと期待するところであります。

過日、近くの公立高校を訪問した折、校長先生自らが受験対策として新聞の社説やコラムなどを紹介したコーナーを設置していて目を惹きました。新聞で文章の構成力や、語彙力を高め、文章力を向上させることをねらいとした仕掛けに感心させられました。また、昨年、選挙権年齢を18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が成立し、今年の夏の参院選では高校生の有権者が誕生します。これをきっかけに若者と政治との距離が縮まるか、注目されているところです。主権者教育の推進とともに教育に新聞を活用する機会は多くなり、N I Eへの期待はますます高まるものと考えます。

結びに、N I Eのさらなる発展を祈念しますとともに、これまでの活動に対する関係各位の皆様からのご協力・ご支援、並びにご指導に心より感謝を申し上げます。



## N I Eの普及と発展を願って

宮城県N I E推進委員会

委員長 佐藤 一 浩

(仙台市立根白石中学校長)

今年度の宮城県N I E研究大会(大会主題「N I Eは伝え合う力」)は12月2日に仙台市立田子小学校において、講師を務めていただきました宮城教育大学教授児玉忠様、また仙台市教育委員会教育指導課長坂本憲昭様をはじめ教育委員会や大学関係者、高校や小中学校の先生方など、県内各地から多数の方々にご参加いただき開催されました。

提案いただいた授業は、「3年生の道徳『同じ仲間だから』」と「5年生の国語『6年生に送る字を推薦しよう』」でした。大変お忙しい中、校長先生を中心に学校全体でN I Eの効果的な活用についての研究に取り組んでいただき、また興味をそそる授業を提供していただきましたことに、心より御礼申し上げます。

さて、教科や学級活動の授業づくりにおいては、「ねらい」と「手立て」の違いを明確にし、それらを取り違えないように留意して授業展開を組み立てていくことが大切です。

算数・数学の授業で、手の込んだ教具を準備したのだが使用することだけで満足してしまったり、学級活動でエンカウンターなどの手法を取り入れたが、それを実践することだけで終わってしまったりと、考えたり、まとめたり、振り返ったりする活動がないまま終わってしまう授業があります。これは、教具や手法が授業のねらいを達成するための一つの手立てであるということをお忘れしてしまっていることから起こることです。

N I Eの推進においても、新聞を活用することは授業のねらいではなく、ねらいを達成するための一つの手段であることを忘れていけませ

ん。新聞を効果的に活用することを意識して授業展開を工夫することが大切です。今日の授業では、この点においても十分に工夫された素晴らしい授業だったと思います。

また、後半の宮城教育大学児玉忠教授の「新聞が育てることばの力」と題しての講演では、N I Eの目標の一つである「読解力の育成」について、国語科の読解力とP I S A型読解力の説明を交えながら、他教科でも授業に生かすことのできる興味深いお話をしていただき、有意義な時間を過ごすことができました。準備に携わってくださいました関係者の皆様に感謝申し上げます。

この大会には、小・中・高・大と校種の違う関係者の方々に多数ご参加いただきました。11月末に「学びの連携フォーラム」における「千葉大の天笠教授」のご講演で、義務教育9年間を意識したカリキュラムを作ることが大切であるというお話を拝聴しました。小学校でまいた種を中学校で花を開かせる。小学校での取組の評価結果は中学校で出ることもあるということでした。まさに、N I Eにおいてもそれが言えるのではないのでしょうか。小学校で活用の基礎を学んだならば、それをベースにして中学校でも、一歩進んだ活用の仕方に発展させていく取組が、授業力を高めることにつながると考えます。

最後になりますが、N I Eの更なる普及・発展を祈念すると共に、これまでご指導、ご支援をいただきました事務局並びに関係各位の皆様には厚く御礼を申し上げあいさついたします。

## II 寄稿



### 『新聞ワークシートポスト』を開ける楽しい日々

宮城県N I E推進委員会

副委員長 森屋 勝治

(宮連小教研国語研究部会長)

(仙台市立七北田小学校長)

『ことばの力』というキーワードがある。私の所属する宮城県小学校国語研究部会でも、研究主題に「確かな『ことばの力』を育む魅力ある国語教室の創造～実生活に生きて働く言語活動の充実を通して～」を掲げている。(この主題は、県内の中・高も同一である。)『ことばの力』を育む観点から【新聞と小学校国語科教材のこと】【本校でのN I E実践指定校としての取組】を述べようと思う。

はじめに、小学校国語科の教科書教材に見る新聞の関わりとして東京書籍4年上に『みんなが新聞を作ろう』がある。指導内容は、①分かりやすい記事を書く ②読む人の興味を引くような見出しを付ける ③伝えたいことに合わせて、記事の分量や置き場所を考え、割り付けをする、などである。さらに、5年生になると『新聞記事を読み比べよう』がある。ここでは、書き手の意図を考えながら新聞を読むことが指導内容になっている。

具体的に見ると・「いつ」「どこで」「だれが」「どうした」を落とさず書くこと・計画した分量にあった文字数で書くこと・読む人の興味を引く見出しを考え、割り付けすること。さらに新聞を書くときにも、どんな記事をどうやって伝えるかという意図を持って書こうとするなどの事柄である。

これは、私たちが普段読んでいる新聞そのものの基本構文であり考え方である。専門の記者が書いた新聞記事は、教材として格好のモデル文となり得る。例えば3年のころから文章から離れて、思い込みによる誤読傾向が目立ってくる。この解決の一つとして、新聞活用が有効な手だてとなるのではないか。教育に新聞を活用する価値は、工夫次第で大きく広げられるだろう。新聞が育てる『ことばの力』の実践に期待したい。

次に今年度N I E実践指定校としての本校の取組の一部を紹介する。

26年度、渡辺裕子氏が提唱する「ことばの貯金箱」を校内職員研修で取り上げた。次の日には「全校で取り組みましょう」となる。それほど先生方の心に強く響いた内容だった。国語科の校内研究とリンクさせて「ことばの力」を育てる一つの実践として、校内研究部会が運営の中心となる。早速、貯金箱(ケース)を準備して全校が実践する。次の年の実践指定校の申し込みは必然であった。

「ことばの貯金箱」では、新聞の中から気に入ったことばや絵・写真を切り取り、それを貯金箱にためておき、後で1枚の紙に貼り付けていく。1年生でも容易に取り組みする。新聞のことばを切り取るのは、その子のセンスであり、その子なりの考え方が見えてくる。ことばに向き合っている子どもの顔が新鮮であり、教師は、その子の新たな発見をする。子どもも教師も取り組んでいて楽しいところが一番の魅力である。特別支援学級の教師も子どもたちの取組を高く評価する。

もう一つは、新聞記事を使ったワークシートの活用である。N I Eコーナーの傍らに、新聞社から出されたワークシート(A4版1枚)を数種類置いている。子どもたちは、そこから自由を持って行き、学校や家庭で解答して、校長室前に置かれた「新聞(N I E)ワークシートポスト」に投函する。校長はそれに丸を付けてサインをして担任に返す。子どもたちの読解の様子がわかり家庭での親とのやり取りまで見えてくる。自ら取り組む姿がそこにある。新聞記事は読解のプロセスが明確である。新聞は『ことばの力』を育む宝箱であり、同時に実生活に生きて働く言語活動の充実に寄与する身近なツールである。

## Ⅲ 実践報告

### 1 実践指定校・奨励校実践報告

#### (1) 七ヶ浜町立松ヶ浜小学校（平成26・27年度実践指定校）

## 新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成

### 1 はじめに

インターネットの普及と反比例するように若年層を中心に新聞離れが進んでいる。本校においても例外ではなく、「新聞を見ない、読まない。」「家でとっていない。」などの理由で新聞に触れることの少ない児童が多くなっている。

新聞には、新しい情報が入手できるという重要な役割がある。さらに活字に目を通すことによって文字を身近に感じたり、文章を読み取ることによって読解力を身に付けたりするという働きも持っている。

そこで、本校では、「新聞に興味を持ち 進んで親しむ児童の育成」をテーマとして設定し、平成26年度からNIEの実践に取り組んできた。本年度も、「新聞に興味を持たせ、より身近に感じさせること」を念頭に実践を進めてきた。

### 2 実践の概要

#### (1) 環境づくり

##### 【NIEひろば】

校舎2階の中央に位置する特別教室とその廊下に、「NIEひろば」を設定し、いつでも新聞を見ることができ、読むことができる環境をつくってきた。日々、届けられる新聞（河北新報・朝日新聞・日本経済新聞・産経新聞・毎日新聞・読売新聞）を整理し、廊下には「今日の新聞」、教室には「昨日の新聞」を並べ、児童が日常的に興味を持って見ること、読むことができる環境をつくった。

##### 【新聞記事あてクイズ】



26年度は、随時、教師作成の記事と写真を組み合わせる「新聞記事あてクイズ」などを実施し、児童の



新聞への興味・関心を高めた。

27年度は、随時、広報委員会作成の記事と写真を組み合わせる「新聞記事あてクイズ」などを実施し、児童の新聞への興味・関心を高めた。



#### (2) 教員研修

河北新報社教育プロジェクト事務局長の砂金 慎氏、宮城県NIE委員会コーディネーターの齋藤昭雄氏をお招きし、新聞活用オリエンテーションや研究の取り組み方についての研修会を行った。

#### (3) 朝の会での新聞の活用

26年度は、教師が選んだ記事を朝の会で紹介する場を設けた。その記事を選んだ理由や感想、6社の新聞の第1面の記事の見出しなどを紹介し、児童の興味・関心を高めた。

27年度は、タブレット端末を活用し、河北新報デジタル紙面を教室の大型ディスプレイに投影し、児童の興味・関心を高めた。

紹介したい記事などを随時、拡大縮小させながら投影でき、児童の視点を集中させることができた。





#### (4)授業での新聞の活用

◎平成 26 年度

##### 【1、2年 創意「すてきなしゃしんさがし」】

新聞を使う活動に児童から喜びの声があがった。プリントに自分の気に入った写真を切り取っては、その写真を選んだ理由や感想を書かせた。

気に入った写真を探す活動では、新聞をめくりながら、「おもしろそうな写真だね。」「どれにしようかな。」などの声が聞かれた。写真を決めてからは、その理由や感想を考えながら自分の思いを書いていた。

グループや全体で発表し合い、興味がある写真やインパクトのある写真の発表に驚きや歓声があがった。この活動を通して、新聞は大人の見るというイメージを持つ児童にも新聞を身近に感じさせることができた。



##### 【3年 総合「すてきな写真さがし」】

新聞を読んだり、新聞に触れたりする機会の少ない児童が多かったことから、少しでも新聞に興味を持たせようと、総合的な学習の時間に「すてきな写真さがし」を行った。新聞の中の写真から、自分が興味を持ったものを1枚選び、選んだ理由やその写真を見て感じたことをまとめさせた。児童は、好きな写真を探す活動に楽しみながら取り組んだ。

本学習後、自分で「新聞ノート」を作成し、家庭で購読している新聞の中から気に入った写真を切り取りノートにはるという活動に発展していった。

##### 【4年 国語「みんなで新聞をつくろう」】

「みんなで新聞をつくろう」では、身の回りの出来事を新聞にする学習活動を通して、新聞に慣れ親しんだ。単元のまとめの段階では、新聞を活用し、いろいろな新聞社の記事を見たり読んだりしなら、題字や1面記事、自分が興味を持った新聞記事、気に入った写真、国名などを探し出していた。



この活動を通して、児童は、新聞には非常に豊富な情報が含まれていることに気づいた。児童は、新聞に

興味を持って、記事を探す活動に積極的に取り組んでいた。また、新聞の構造などに気づくことができた児童もいた。

##### 【5年 創意「ことばの貯金箱」】

児童に、「優しくあたたかい気持ちになることばを意識させる」というねらいで取り組んだ。児童は、「記事の見出しや写真などから、幸せな気持ちになることばや写真を探す」をテーマとして学習に取り組んだ。児童は自分なりの「幸せ」の視点を持ち、記事や写真をどんどん切り取っていた。ことばの貯金箱シートでは、記事の配置にも一人一人のこだわりや思いが表れていた。グループで同じことばを見つけていたことに喜んだり、友達の切り抜きに「これ、いいね。」と言いつつたりして、作品を通して児童同士が心を通わせている場面も多く見られた。

ことばの貯金箱の実践では、自己表現活動としての有効性を感じた。



##### 【5年 社会「工業生産と工業地域」】

本単元のまとめの段階で、主に日本経済新聞を活用し、「工業生産」をキーワードとした「工業生産スクラップブックづくり」に取り組んだ。児童の多くは前単元で学習した「自動車をつくる工業」の関連記事や写真、また「時計」や「カメラ」、「家庭電気製品」などの身近な工業製品関連の記事や写真を見つけ、自分の「工業製品スクラップブックづくり」に楽しそうに取り組んでいた。その中に書かれていた感想には、「新聞にはいろいろな記事があって驚いた。」「スクラップブックを初めてつくったけれど、資料集めには新聞が便利だった。」など、新聞に対する新しい気づきが書かれていた。



##### 【5年 国語「物語のおもしろさを考えて読む」】

発展学習として、新聞に掲載されている「図書館の広告欄」を活用し、印象に残った本の題名や購入したくなった本の題名などをノートにたくさん書き出す活動を行った。その本の題名を選んだ理由や気づいたことなどをまとめさせながら、「題名の付け方



や題名に込められた意味」について考えさせることができた。

## ◎平成 27 年度

### 【1年 生活「新聞紙で遊ぼう・つくろう」】

文字を習い始めた1年生の児童にとって、日常的に新聞紙は「読み物」というより「遊び道具」としての価値が高い。新聞紙を使った楽しい遊びを経験させることにより、遊びの中での新聞紙の有用性を体感させたいと考えた。

「新聞紙で遊ぼう」では、4つのゲームを取り入れた。二人組で1枚の新聞紙に乗り、先生と代表じゃんけんをして、負けたら新聞紙をたたみ、勝ったら逆に広げていく「新聞陣地ゲーム」、制限時間内で途中で切れないように新聞を手で少しずつ破きながら長くのばしていく「新聞ちぎりのばしゲーム」、使った新聞紙を丸めてボールを作り相手コートにできるだけ多く投げ込む「新聞ボール投げゲーム」、使った新聞紙をチームのごみ袋にできるだけ多く入れる「新聞片付けゲーム」を行った。児童はどのゲームにも歓声を上げながら楽しく取り組むことができた。

「新聞紙でつくろう」では、振ると「バン」となる紙鉄砲、そして、昔ながらの「かぶと」を作った。手先の器用さを発揮して上手に作る児童もいれば、端をうまく合わせるのに苦労する児童もいたが、周りの友達や教師の手助けもあり、みんな無事作り上げることができた。



### 【1年 生活「お気に入りの写真を探そう」】

これまで、楽しい遊びや工作の材料だった新聞紙だが、本当は、みんなに新しい出来事を写真や絵、文字で知らせる役割を持って毎日配られるものだと話を話した。新聞にはどんな写真や絵が使われているのか見ながら、印象的なものを「お気に入りの写真」として切り取ってカードに貼り、その写真を選んだ理由や感想を書かせた。

児童は、次々と新聞をめくり、「この写真、きれい。」「おもしろいよ、この絵。」などと先生や友達と話しながら集中して絵や写真を選んでいった。選び終わると、それぞれ工夫してカードに貼り、選んだ理由や感想など、自分の思いを書いていた。

発表の場面では、自分の選んだ写真と同じ写真がでると、「わたしも同じだ。」と喜び、大きな写真やインパクトのある絵に歓声があがった。

この活動を通して、新聞は、見るものという役割があることを感じさせることができた



### 【1年 国語「カタカナことばをさがそう」】

国語で、カタカナが、外国からきたものや国、土地、人の名前、そして音や鳴き声を表すとき使われることを学習した。みんなに新しい出来事を知らせる役割を持つ新聞の中に、カタカナ言葉がどれだけ使われているか調べる活動に取り組んだ。

4、5人のグループに1日分の新聞を渡し、児童は、手分けしてカタカナ言葉を探してカードに書き出していった。

次から次へと上手にカタカナを見つけて書いていく児童もいれば、見出しに大きく書いてあるカタカナに気付かず、鉛筆がなかなか動かない児童もいた。しかし、周りの友達が教えたり、教師が助言を与えたりする中で気が付き、最後にはどの児童もカタカナ言葉をカードに書くことができた。グループによっては、合わせて50個以上見つけたところもあり、みんなの注目を浴びた。

児童は「最初は見つけられなかったけれど、本番になったらいっぱい見つけられて楽しかった。」「こんなにいっぱいあって、びっくりしてびっくりがえりそうになった。」「おうちでもやりたいなと思った。」などの感想を持ち、新聞のカタカナ言葉の数の多さへの気付きや、もっと見てみたいという意欲喚起につながった。



### 【1年 図工「えがおつうしんにっこりニュース」】

誰かに話したくなるよううれしかったこと、楽しかったこと、頑張ったこと、したことや見たことなどを思い浮かべ絵に表す学習である。

小学生新聞の記事の絵や写真、見出しを拡大投影機でテレビ画面に映しながら、どんな出来事が載っているのか話し合った後、自分のニュースを絵で表し、題名（「見出し」）と説明する文章（「記事」）をつけることを伝えた。



最近のことに限定せず、テーマは自由にしたので、児童は、これまでの出来事を振り返り一番楽しかったことや、頑張ったことなどを思い思いに絵で表した。題名や文章も、教師に、字の書き方などを聞きながら一生懸命書いていた。

絵は、色使いや表情に児童の思いがあふれ、説明する文章も、ある児童はたくさんの文字数で書き上げ、ある児童は自分の気持ちを生き生きと表現したものになっていた。



### 【2年 国語「みんなにも教えたい おもしろい記事を見つけよう!」】

家で新聞を取っているという児童は全体の2/3程度、実際に手に取り毎日読んでいる児童はいなかった。そうした児童の実態を踏まえ、漢字にルビもふってあり、写真もカラーで見やすい「朝日小学生新聞」を活用することにした。また、全員が違う日付の新聞を見ることで、選んだ記事が重複しないようにした。

大きなカラーの写真が児童の興味をひき、みんな目を輝かせながら新聞を見ていた。しかし、写真には関心を持つものの、いざ内容を読み取ろうとすると、情報量の多さに理解が追い付かない児童も多く、記事選びに戸惑う児童もいた。

記事の内容を理解するには、2年生には難しい面もあったが、分かったところ、おもしろいと思ったところに線を引かせて読ませることで、要点を押さえ、視覚的に情報をまとめることができた。

選んだ記事はグループで交換読みし、感想を交流し合った。班の代表はクラス全体に発表をした。実物投影機を活用することで記事を全員で共有することができた。



児童の感想からは、お気に入りの記事を見つけるのが難しかったと感じる児童もいたが、見出しの有効性に気づく児童、様々な情報が書いてある新聞の面白さに気づく児童など、楽しく活動する児童が多くいた。家での新聞切り抜きを実践し、教室に掲示する児



童も出てくるなど、この活動をきっかけに多くの児童が新聞に興味を持てたようであった。

### 【2年 国語「4コマまんがに挑戦!」】

普段新聞を読むことのない児童に、新聞に4コマまんがが載っているということに気づかせ、それを使った授業をすることで、新聞に関心を持ってもらうということをめあてに活動を行った。

まず、数社の新聞記事の中から各自4コマ漫画を探し、面白い4コマを紹介し合う活動を行った。新聞の4コマの内容は難しかったり、社会風刺的なものがあったりと、子どもたちにとって難しいものが多いことから、よく分からないという感想もあったが、4コマまんがが載っていることに初めて気づき、「おもしろかったから家でも新聞を読みたい」と新聞に興味を持てた児童もたくさんいた。実際に、家の新聞から4コマまんがを切り抜いてきた児童や、NIE教室の前の新聞の4コマを楽しそうに読んでいる児童の様子が見られ、新聞への関心の高まりを実感することができた。



次に、前回子どもたちが選んだ4コマの中から、4つを選び、せりふ部分を消したものを渡し、そこに入るせりふを想像して書く活動を行った。これは、国語の「絵を見てお話をしよう」で、絵から想像して吹き出し部分を書くという活動と関連づけたものである。すでに国語でやっていたので、スムーズに書ける子が多く、楽しんで活動に取り組んでいた。書いた後には交換読みを行い、自分と友達のせりふの違いを比較して、面白そうに読んでいた。実際の4コマのせりふと見比べると、「なるほど。」と歓声が起こった。子どもたちの感想は、「むずかしかった。」というものもあったが、「想像して書くのが楽しかった。」「またやりたい。」などの感想が多くあった。最後に、キャラクターも自分で書いて、4コマまんがを作る活動に結びつけることができた。新聞を利用して、とても充実した活動を行うことができた。



### 【3年 社会「店ではたらく人」】

この単元のまとめの段階で、見学に行つて分かったことや考えたことを新聞という形でまとめる学習を行った。

初めて新聞を書く児童にとって、どのように書けばよいのか悩むことが非常に多かったが、新聞の書

き方について、実際の新聞を用意して具体的に指導を行った。

「今日の新聞の見出しはこんなことが書いてあったよ。」と児童が教師に話すようになり、新聞に興味を持ち始めていた。



### 【3年 国語「新聞でさがしてみよう」】

新聞にはどこにどんなことが書かれているのか、どんな写真があるのかを取り上げ、ワークシートを用いて新聞に書いてあることを書き抜いたり、興味のある記事を探し出したりする学習を行った。また、第1面に取り上げられていることを自分の言葉でまとめる取組も行った。

授業中、興味のある記事を探していると「映画のことが書いてある！」「小判って何？」「将棋の盤面もあるよ。」と新聞に児童の予想とは違うことが書いてあることに驚きや感嘆の声が聞かれた。

学習後、自主学习ノートに新聞から切り抜いた写真を貼ってきたり、「家にあった新聞にクロスワードがあって今やってる！」などと話したりする、自分から進んで新聞に触れる児童が増え始めた。



### 【4年 社会「火事からくらしを守る」】

くらしの安全を考えさせる場面では、交通事故・事件や火事の新聞記事を実際に児童に見せ、自分たちが安全に暮らしていくために働いている人たちについて関心を持たせた。さらに1つの新聞の中に事故・事件や火事の記事がいくつあるかを探すことにより、その多さに気づくことができた。ある日の新聞では、世界中で起こっていた10件以上の事件が載っていた。事件を探す活動で、児童には他の記事についても興味を持ち、新聞には、事故や事件よりもおもしろそうな記事や楽しそうな記事が多くあることにも気づくことができた。新聞を読んだり、触ったりする機会が少ない児童にとって、新聞をより身近かに感じさせることができた。

学習のまとめとして、新聞作りに取組ませた。児童の印象に残った体験や消防士の仕事についてまとめていた。題字や割り付けなど新聞構成に必要な事項について理解させるために、もう一度身近な河北新報を見せ、イメージを持たせることができた。



### 【4年 国語「みんなで新聞をつくろう」】

分かりやすい記事を書いて新聞を作ることを学習のめあてとして取組ませた。

グループ4名で1つの壁新聞を作ったが、取材や記事作りの難しさを感じたり、割り付け段階では、実際の新聞の例を参考にしながら取り組んだり、新聞に対する見方が変わっていくのを感じた。

できあがった新聞をお互いに読み合う活動では、感想を伝え合うことができたが、作成期間が長かったこともあり、記事が古くなってしまい、児童からも「実際の新聞は、昨日あったことをすぐに新聞にできるなんてすごいな。」というつぶやきが聞かれた。この活動を通して、児童は新聞作りの難しさを感じ、身近な新聞に対する新たな興味・関心を持つことができた。



### 【5年 国語「新聞記事を読み比べよう」】

「見出し」「リード」「本文」「写真・キャプション」などの新聞の構成を、実際に新聞を使いながら確認した。「見出し」を見ればどんな内容が書かれているか分かり、もしその記事に興味が出たら「リード」を読んでおおまかな内容を理解すること、さらに詳しく知りたいときは「本文」を読んで詳細を理解することを学習した。

また、「写真」の役割についても学習した。「写真」のなかでも「アップ」にするものや「ロング」にするもので書き手の意図が違うことを学習した。

「キャプション」という言葉を聞いたことがある児童は一人もいなかったが、写真や図などにそえられた短い文ということを知り、「キャプション」があった方がより写真の意味が分かるという感想を話していた。



### 【5年 社会「くらしを支える食料生産」】

新聞に出てくる国名を読み取りながら、日本と関係の深い国々を確認した。

はじめに、単純に新聞に出てくる国名だけをチェックしていった。アメリカ合衆国という国名が頻出し、その後にオーストラリアなどの国名が出てきた。このことだけでも日本と何かしらの関係が深いということを感じ取っていた。

その後に、食料生産、特にT P Pに関する項目で国名をあげさせた。農産物の輸出入相手国ではブラックタイガーなどの海老がタイから輸入されていることやバナナが台湾やフィリピンから輸入されていることが分かった。

また、T P P（環太平洋



戦略的経済連携協定) という難しい用語を説明するときも新聞を活用した。このテーマに関してもどの国名が多く載っているか調べると「アメリカ」という単語が頻出し、アメリカが日本やT P Pで大きな役割を果たしていることが分かった。

### 【6年 国語「熟語の構成を考えよう」】

四字以上の熟語の意味を考え、その構成についての理解を深める学習の中で、新聞から熟語を探し、その熟語の構成を考える活動を取り入れた。

記事や広告の中から、文字数の多い熟語を探したり、日常生活に関わりのある熟語を探したりする姿が見られた。

ペアやグループで見つけた熟語の構成を考えさせることで、熟語の構成の巧みさやおもしろさに気づくことができた。

新聞を活用したことで、語彙の充実を図り、学習した熟語を日常の言語活動の中で生かしていこうとする態度も育てることができた。



### 【6年 国語「新聞の投書を読み比べよう」】

朝日新聞の「声」から7つの投書、河北新報の6/13から4日分の「声の交差点」のコピーを資料として配布した。投書を読み比べ、自分の考えが読み手に伝わるように、構成を工夫し、理由を明確にして投書を書く活動を行った。一通り全部の投書の「見出し」、「題名」を確認させ、興味を持ったり、詳しく読みたくなったりした投書に印をつけさせた。その後、選んだ投書をじっくり読み、賛成や反対、または共感した投書を切りぬきワークシートに貼らせた。また、選んだ理由をワークシートにまとめさせた。最後に、読み取ったことをもとにして、選んだ投書に対する自分の意見を書く活動を行った。書き上げたそれぞれの投書を互いに読み合い、学習を振り返った。



### 3 終わりに

N I E活動に向けて、校内組織を再構築し、全学年の児童が日常的に楽しく取り組んでいくことのできるような体制づくりを行ってきた。

2年間、N I E活動を実践する機会を頂き、児童は、以前より新聞に興味を持つようになっただけでなく、それに伴って、世の中の出来事にも興味・関心を抱くようになった。新聞記事などの情報に触れたときに、「もっと知りたい。」「なぜだろう。」という知的好奇心を高めていくことが課題であり、各教科の学習全般において意識して取り組んで行く必要がある。今後も、教科の学習とN I E活動との関連を探りつつ、相互で知的好奇心が高まるような取組を考えていきたい。そして、

昨年のN I E徳島大会で掲げられた「よき紙民を目指す」に少しでも近づくことができたらと思う。



末筆になりますが、このような機会を与えて頂き、また実践にお力添えを頂いた宮城県N I E事務局の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

(担当 教諭 藤澤雪彦)

## 新聞に親しみ、活用しようとする児童の育成

### 1 はじめに

田子小学校では「新聞に親しみ、活用しようとする児童の育成」をNIE実践の目標に設定した。

- ① 「読む力」
- ② 「考える力」
- ③ 「表現する力」

の3つの力を育てることをねらいとしてNIE実践に取り組んできた。

本校で新聞を購読している家庭は3～4割程度である。新聞に触れる機会が必ずしも多いとは言えない児童の実態が見て取れた。

1年目の26年度は、まず、児童を新聞に慣れ親しませることを主眼に置き、3年生以上の児童を対象にNIEの実践を行った。

2年目の27年度も引き続き、新聞を手にとる中で新聞の良さを味わい、新聞がより身近なものになるようにとNIEの実践を行ってきた。

### 2 これまでの取組

#### (1) 新聞を身近にする環境づくり

教室に新聞を置き、いつでも読めるようにした。常に新聞が手に取れる環境があることで、業前の読書タイムや休み時間に読んでいる児童も見られた。



#### (2) 朝の会・帰りの会での記事紹介

朝の会や帰りの会の中で、教師や日直、ニュース係の児童が、その日の新聞の中から気になった記事や、みんなに読んでほしい記事を紹介した。紹介したい新聞記事の要点と自分の感想を書き、紹介後廊下に掲示し、学級以外の児童にも紹介した。



#### (3) 朝の会でのペアトーク

朝の会で、ペアトークの時間を毎日設けている学級も見られた。担任が新聞記事を紹介し、そのことについて自分が考えていることをペアで聴き合ったり、意見を交流し合ったりするなど、新聞に関わる時間を増やすように意識して取り組んできた。



#### (4) 家庭学習との連携

新聞記事から考えたことをまとめるなど、家庭での自主学習でも取り組めるように促した。取り組んできた児童のノートを教室の『価値ノートギャラリー』に掲示し、積極的に紹介していった。



↑ ↓ 『価値ノートギャラリー』に掲示したノート



また、ノートをお便りに掲載したり、実物投影機でテレビ画面に映し出したりして共有し合い、それについてどう思うかなど、ペアやグループ、学級全体で話し合いを持つことも行ってきた。



#### (5) 新聞記事のスクラップ

児童一人一人が新聞を読んで、みんなに紹介したい記事を切り抜きまとめる活動を行った。まとめる時はオリジナルの見出しを付け、新聞記事を読んだ感想や自分の考えを書く。できあがったスクラップは児童同士で交換し、スクラップを読んだ感想を述べ合ったり、書き合ったりして交流した。幅広いテーマや記事について関心を持つことにつながった。



↓ 掲示板に掲示したことで授業後も交流が行われた





## (6) 新聞貼りつけ日記

新聞の切り抜きを資料にしたミニ日記を書くことを行った。考察文の書き方として以下3点を示した。

- ① 感じたことをズバリと一言で書く。
- ② 感じたことの元になっている文を引用する。
- ③ 引用の後に理由づけの文を書く。

この3つの“こつ”を使って、新聞から情報を切り抜き、その感想を書く活動を継続して行った。



## (7) 新聞読み取りワークの作成

『新聞読み取りワーク』を作成し、新聞記事を文章読解トレーニングの教材として活用する試みを行った。

NIEコーディネーター齋藤昭雄先生が作成された「NIEワークシート100」のデータを活用させていただいた。

朝自習の時間に取り組めるぐらいの内容であり、5～10分ほどで手軽に取り組むことができる。これを授業の中で活用することも大いに効果を上げた。例えば、新聞記事を読んで考えたことを書く作文指導の教材としての活用や道徳の資料として活用することができた。

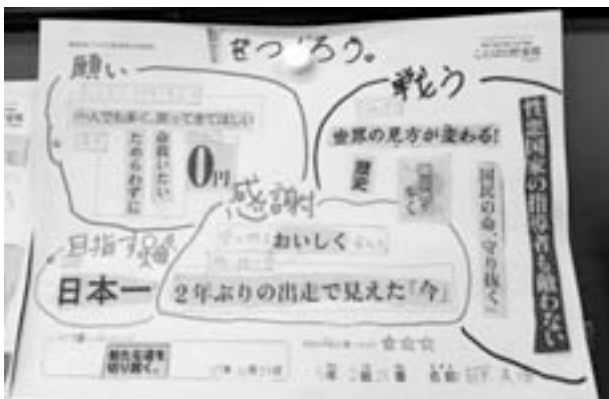
児童の家庭での自主学習にもつながる教材である。今後、ワークを自作する際にも大いに参考になるものであると感じた。





## (8) ことばの貯金箱

『ことばの貯金箱』(考案：渡辺裕子氏)に取り組んだ。新聞記事から、素敵だと思った言葉を自由に切り抜いてカードに貼り、自分の思いを自由に表現させた。そして、作品に込めた願いや思いを発表し合い、交流を行った。



↑ 5年児童が作成した『ことばの貯金箱』作品



←↑「ねえ見て見て!」「これはね!」「どうしてこの言葉なの?」…と、作品づくりに取り組む中で自然と対話が生まれるのが印象的であった。

↓ 知的に盛り上げられる子供たちを育てていきたい



←↓ 作品に込めた願いや思いをプレゼンテーション



### (9) 国語の授業

国語では、5年生が『新聞記事を読み比べよう』の学習を行った。河北新報、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞など、各社の同じ日の一面記事の読み比べなどを行った。実際に新聞を手に取りながら同じ出来事の扱い方(見出し、写真、記事…)を比較し、書き手の意図について話し合う学習を行った。



↑ ↓ 参観された先生方にスピーチを聴いてもらった



また、『6年生に贈る言葉を推薦しよう』の学習では、新聞から切り抜き集めた『ことばの貯金箱』の中から6年生に贈る自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉を選び、「エピソード」を交えたスピーチを行う学習に取り組んだ。新聞を活用し、自分では生み出しきれないような素敵な言葉と出会ったことで、異年齢交流活動を一層充実させることができた。



↑ ↓ 新聞から選んだ言葉を6年生にスピーチ



#### (10) こんな記事があったよ！新聞記事紹介

気になることやみんなに知らせたいことを新聞記事から見つけ、紹介する活動を行った。紹介カードを作成し、朝の会のスピーチコーナーで発表した。

いつ、どこで、だれが、何をした。ことを意識してワークシートを作成した。ワークシートの作成及び発表を2回、3回と繰り返すうちに、記事選びや伝えたいことを的確にとらえることができるようになってきた。



#### (11) 「道徳の時間」における新聞記事の活用

「道徳の時間」に新聞記事を用いることで、道徳的価値について考えるきっかけとなったり、道徳的価値について考えを深めたりした。

具体的には、道徳の時間の導入及び終末において、新聞記事（報道写真）を取り上げたことで、道徳的価値についての考えをより一層深めることができた。



#### (12) 「かほくワークシート」にチャレンジ

毎週火曜日の河北新報の記事「かほくワークシート」にクラス全員で取組んだ。新聞記事を読んで設問に答えたり、自分の考えを書いたりした。

#### (13) 環境整備

新聞に興味を持たせるために新聞の良さのPR文と記事を廊下や教室に掲示するなど、常に多くの児童の目に触れるように場を設定した。新聞委員会が中心となって、新聞記事を切り抜き、記事の紹介を行った。



### 3 成果と課題

#### <成果>

- ◎常に新聞が読める環境を作ったことで、自発的に新聞を読む児童が出てきた。
- ◎新聞を手にとることをきっかけに、社会で起きている出来事に興味を持つようになった児童が増えた。また、自分自身の経験や内面に迫る深い考察をする児童も見られた。
- ◎「ことばの貯金箱」「新聞貼りつけ日記」等で、新聞記事を切り貼りし、感想を書いたり紹介したりする活動を行う中で、自分の思いを思い思いに表現しようとする様子が見てとれた。
- ◎児童が受け身にならない主体的な学習を展開する材料として新聞を活用する可能性を感じることができた。NIE実践の目標に設定した「新聞に親しみ、活用しようとする児童の育成」につながったと考える。

#### <課題>

▲新聞記事を教材として扱う場合、学年の実態に合わせた内容をよく吟味する必要がある。手軽に教材として活用できる支援があると、NIE実践に一層取り組みやすく、より充実したものにしていくのではないだろうかと考える。

(担当 教諭 鈴木優太)

### (3) 蔵王町立宮中学校（平成26・27年度実践指定校）

## 相手意識を持って自分の考えを表現する

### ～新聞から学ぶ～

#### 1. はじめに

平成26年、夏休みの終盤に我々教職員に対してのNIE研修が行われた。ここから、教育活動のアクセントとしてのNIE活動が始まった。「生徒も教員も気楽に実践していく」ことをテーマに掲げ、指導方針や活動内容を考え、試行錯誤しながら進めた。

相手意識や目的意識を明確にし、自分の考えを豊かに表現していくことは社会生活で重要なことである。今日、言語活動の充実が教育現場の改善点として位置付けられており、言語活動の基礎・基本を支える研究は今後ますます発展していくと思われる。このように、NIE活動は生徒たちの表現力を高める有効な方法であると捉え、2年間にわたり全学年で実践した。

#### 2. 実践の概要

次のように校内目標を設定した。1年目は、準備段階として「生徒たちの興味・関心を引き出すこと」とし、新聞を活用する楽しさを重視しながら活動に取り組ませた。2年目は、「相手意識を持って自分の考えを表現すること」とし、1年目を土台に、同じ内容でより一層踏み込んだ指導を行った。また、新たな活動として年間個人新聞づくりを取り入れ、ねらいに迫った。

以下、月ごとの実践内容である。

##### <1年目>

月	内 容
9	・NIEガイダンス ・NIEコーナーの設置（各学年廊下） ・個人新聞づくり
10	・NIEコーナーの設置（生徒玄関前） ・第1回NIEアンケート調査 ・「朝のスピーチ」ガイダンス
11	・第1回「ことばの貯金箱」 ・第1回「朝のスピーチ」開始（～12月）
12	・新聞記事を使った道徳授業
1	・第2回「朝のスピーチ」開始（～2月） ・「先生の気になるニュース」開始（～3月） ・「記事を集めて世界を知ろう」の実践

2	・「1枚の写真から文章を書く」の実践 ・第2回「ことばの貯金箱」 ・第2回NIEアンケート調査
3	・新聞記事を使った道徳授業 ・NIE活動の感想を書く

##### <2年目>

月	内 容
4	・NIEコーナーの環境整備 ・朝のスピーチ（学担による見本のみ）
5	・朝のスピーチ①開始
6	※毎朝一人ずつ。感想発表2,3人。
7	・年間個人新聞用記事作成その1
9	・年間個人新聞用記事作成その2
10	・朝のスピーチ②開始
11	※毎朝一人ずつ。感想発表2,3人。
12	・年間個人新聞用記事作成その3 ・ことばの貯金箱
1	・年間個人新聞まとめ ・アンケート調査
2	・年間個人新聞の掲示と受賞 ・新聞記事活用の学活授業
3	・振り返り活動

#### 3. 実践内容の紹介

##### (1) NIEコーナー



<3-1教室前のNIEコーナー>

前項右下の写真は、3年生用のN I Eコーナーを写したものである。3年生では、1面にある記事が切り抜かれている新聞がよく目に付いた。一方、2年生のN I Eコーナーを通りすぎると、スポーツ欄を上にして新聞が広げられている様子がよく見られた。



#### <玄関ホールのN I Eコーナー>

上の写真は、共有スペースとしてのN I Eコーナーを写したものである。部活動を終えた生徒たちが下校際に新聞を読んでいる様子である。

毎日、新聞に触れる・見る・読むことによって新聞に慣れ親しんでもらおうと開始した。最初の3ヶ月は部数を確保し、各学年の廊下と生徒玄関前の計4箇所を設置し、どこでも目につくようにした。帰り際や教室移動の際に足を止めて読むなど、空いた時間を有効に使う生徒も多く見られた。

生徒玄関前には、朝のスピーチを掲示し、N I Eコーナーと合わせて利用できるようにした。視覚的な工夫も考えながらN I Eコーナーの充実を図った。

最終的にN I Eコーナーは各学年の廊下に常設され、次に書く「朝のスピーチ」で主に活用することとなった。

N I Eコーナーの椅子に座って休み時間を過ごす生徒もおり、何気なく新聞に目を通す生徒も少なくなかったように思う。

## (2) 朝のスピーチ



#### <スピーチ①>

上の写真は、10月6日河北新報の記事である。「大村さんは、動物の体内の寄生虫を駆除する薬品の開発に成功し、このことから人間の寄生虫感染症に効く薬剤、イベルメクチンを開発しました。…(略)。大村さんに感心するところは、何か役立つことはないかと絶えず考えていることです。自分も何か考えてみようと思いました。」

この原稿は上手に要約されており、まとめ方にも感心させられた。



#### <スピーチ②>

上の写真は、10月11日河北新報の記事である。「…(略)。私たちは、社会の授業で文化について学びました。日本には古くからの文化として、箸や着物、お辞儀などがあります。今までは日本のアニメや漫画にしか興味がなかった方にも日本の奥深さを知ってもらえると思います。…(略)」

以上の抜き出し部分は、記事の中には見当たらない



い。自分の経験や考えを盛り込んだ優れた文章であると思う。



＜玄関ホールに掲示された朝のスピーチ＞

スピーチを終えた生徒は担任の先生からコメントをもらい、朝のうちに玄関ホールへ掲示する。これは、NIEの意識づけと時間の有効活用、環境整備をねらいとした。

最も力を入れたのが、朝の会で行う「朝のスピーチ」である。1年目は、興味のある記事や読みやすい記事についてできるだけ5W1Hを使って要約しながら感想や意見を発表するものだった。先生にコメントを書き込んでもらった後、玄関前のNIEコーナーに掲示させ、意識付けと環境整備を行った。それを毎日継続させることで慣れ親しみを感じさせた。2年目になると、先生が記事のリクエストをしたり感想発表があったりと、より広く、深く物事を考える場となっていった。朝の会の充実は学級づくりにも貢献した。

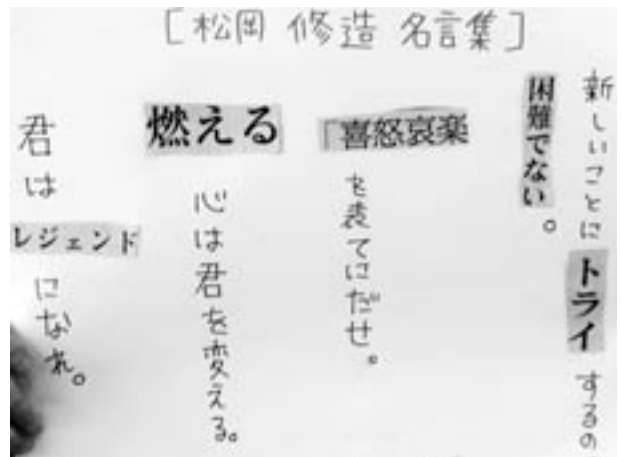
生徒の中には、用語の意味や記事の背景を調べ、余白にびっしりと書く者もいた。生徒たちのスピーチは、理解が難しいであろうロシア情勢から話題によく出る楽天の記事まで多様であり、興味津々に取り組む様子があった。また、スピーチをする生徒だけではなく、その感想を発表する生徒にも表現力の向上が見られた。他の情報と関連させた意見や諺を利用した表現の工夫など、成果を感じる場面が日を追うごとに増えていった。わずかな時間だからこそ無理なく毎日行うことができたと思う。

(3) ことばの貯金箱



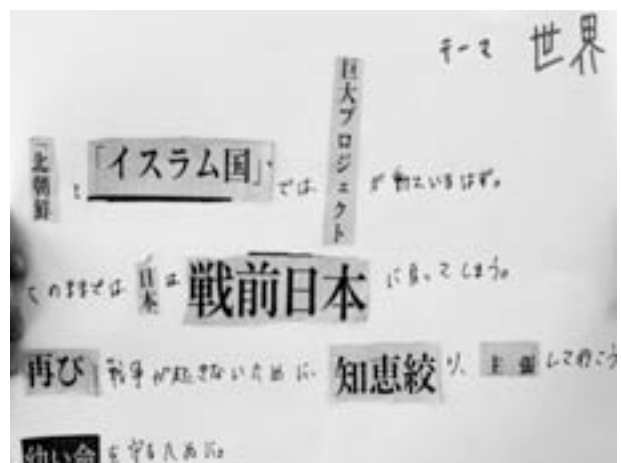
＜見出し等を切り取る様子＞

新聞を広げ、キーワードを切り抜こうとしている様子である。その新聞記事を読み返す生徒も多かった。切り取ったワードを見ていくと、大体は個性が表れているように思う。交換しても面白いものができるようである。



＜作品例①＞

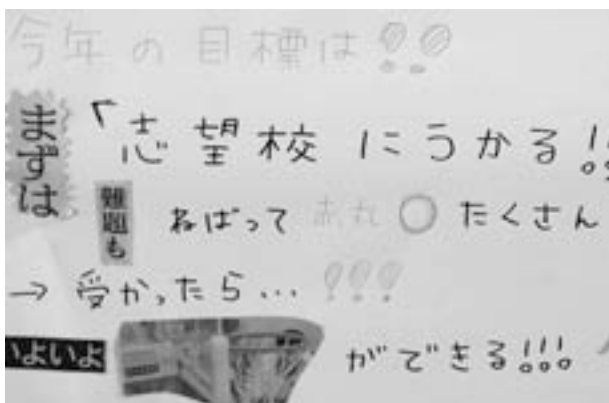
上の作品①は、まず、「トライ」「困難でない」「喜怒哀楽」「燃える」「レジェンド」の5つのキーワードを切り取り、松岡修造氏を連想させたことから出来たものである。



＜作品例②＞



作品②は、「世界」という壮大なテーマで意見を述べている。「戦前日本」や「知恵を絞る」といった言葉は、新聞の力を借りることで表現できたようだ。



<作品例③>

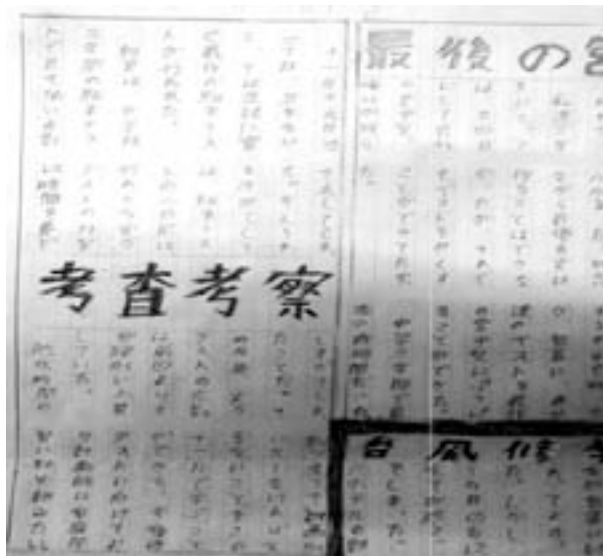
作品③は、一部抜粋したものである。「受かったらはいよいよバスケットができる」の文中にあるバスケットが図で強調されており、面白みがある。その豊かな発想に、級友も感心する様子があった。

新聞から切り取った言葉をキーワードに、1つの作品を完成させていく。指導者としては最初、単純な活動だからこそ発問が難しいと感じたが、生徒たちの反応は非常に良かった。ただ切り取った言葉をつなぎ合わせるどころからスタートした生徒もいたが、回数を重ね、他者の発想に影響を受けながら表現力を高めることができた。作品は多様で、身近な部活動をテーマにしたもの、世界情勢について憂うもの、3つの異なる文から構成されたもの、前向きな言葉をつなげて生きることをメッセージ化したものなど生徒たちの感性には驚かされた。

2年目は切り取った記事から共通項を見出し、文章化させるなど、発想を変えさせて表現力を養った。いつもと違う作風なものもあり、工夫した効果はあった。また、「朝のスピーチ」で養った知識を活用する生徒もいた。

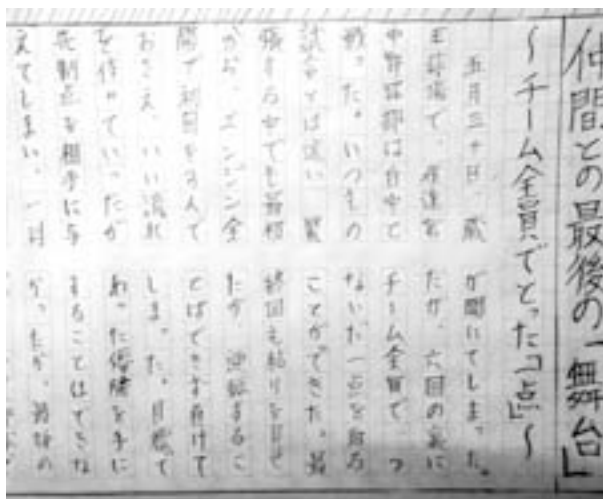
何気なく新聞に目を通し、過去のニュースについて話す場面も見られた。

(4) 年間個人新聞



<新聞①>

上の新聞①では、第2学期の期末考査についての記事がよく書けている。「考査考察」という見出しは、他者に読んでみたいと思わせることができた。また、この記事を読んでみると、「結果は、中学校3年間の期末テストで最も低い点数を出してしまった。考えられる原因としては、実力テストの対策に時間を費やし過ぎてしまったことだ。実力テストの点数は、前回よりも飛躍的に上昇していた。」とあり、内容を的確に反映した見出しでもある。さらに、見出しが中央部にあることも良かった。



<新聞②>

上の新聞②では、よく考えられた見出しが良かった。「仲間との最後の舞台」から中総体の記事であることがわかり、サブの見出しでどんな展開であったのかが垣間見えるた。また、冒頭での5W1Hや起承転結を使った文章が非常に読みやすかった。



### <新聞③>

新聞③を作成した生徒にとって、修学旅行が一番の出来事であったことは一目瞭然である。この生徒の他にも多くの生徒が囲み記事をつくり、読んでほしいという思いを表していた。例え文章にまとまりがなく楽しい思いが伝わりづらかったとしても、書き手の気持ちが伝えられる方法である。

年間個人新聞の作成にあたっては、NIEの集大成として行った。まずは、既製の新聞を見本として、新聞のレイアウトを作成した。次に、中総体や陸上大会、文化祭など、行事が終わる頃を目安に定期的に記事を埋め、少しずつ増やしていった。最後に、新聞づくりのまとめとして美しく仕上げた。

作成した個人新聞は掲示し、各学年1名ずつ〇〇先生賞を与える予定だ。先生方は、空いた時間を使ってできるだけ多くの生徒の新聞を見るように努めてほしい。また、先生方からのコメントを記入して新聞を返却できれば、より一層達成感が持てると思う。

## 4. 生徒の反省や感想

### (1) 朝のスピーチ

〇みんなそれぞれ選んだ記事について発表しました。たくさんの記事を読んだり自分の感想を人前で発表したりするのは抵抗がありましたが、難しさはなく学びやすかったです。

- 〇人の話をよく聞くようになった。
  - 〇朝のスピーチの感想をすぐに自分なりにまとめることができるようになりました。
  - 〇新聞についての関心が高まりました。感想を発表する力がつきました。
  - 〇新聞を見ることが増えました。
  - 〇今まで新聞を読んでいなかったのに、発想力の向上に繋がりました。
  - 〇面接で予想していなかった質問をされても早く頭で考え、的確に答えることができました。
  - 〇感想発表で、すぐに言える文章力もついたり、人前で発表することにも慣れました。
  - 〇ニュースで見たことをまとめることができた。
  - 〇最近のニュースをよく知ることができた。その場で考え、話す力がついたと思います。
  - 〇知らなかったことも知っていたこともより深く知れたと思う。話を聞くことに集中するようになりました。
  - 〇知らないニュースもあり、おかげでいろいろなことを知れました。また、作文を早く書けるようになりました。
  - 〇スピーチがなければ読まないような記事を読むことで、政治や経済の分野にも興味を持つようになりました。
- ### (2) ことばの貯金箱
- 〇いろんな文字を切り取ったりなど視野が広がりました。
  - 〇発想力や文章力が身に付きました。
  - 〇発想力が豊かになりました。
  - 〇切り取るだけでなく、その記事も読むようになりとても楽しく活動できました。

○関係性の見えない言葉から文章を構成する力がつ  
いた。

○いろいろな言葉を使って新しい文章を作るのも発  
想力の向上に繋がると思いました。

○5W1Hで作ることにより、テストの作文問題に  
も生かすことができました。

○難しかったが、切り貼りして文章や新聞を作る経  
験はあまりないのでいい経験になった。

○自分らしいものができました。

○一人一人の個性が表れていて、とてもおもしろか  
ったです。

○個人の発想やさまざまな目標、テーマがあり、楽し  
い作業でした。共に新聞を読むことも良かったで  
す。

○一つの単語でいろいろな言葉が出来たので面白か  
ったです。

### (3) 年間個人新聞

○この1年間のさまざま行事を年間個人新聞で振り  
返ることができたので良かったと思います。

○文章力が身に付きました。

○分かりやすく文章をまとめる技術を学びました。

○自分のことを言葉だけではなく、文字で伝えられ  
るようになりました。

○レイアウトなど新聞の記事を書く作業が難しく、  
大変でした。

○あまり色がなく白黒になってしまったが、自分の  
経験を綴ることの難しさを知ることができまし  
た。

○新聞で工夫したことが別の活動でも生かされまし  
た。

○年間を通して新聞記事を書く度に、各行事につい

ての思い出を振り返ることができ、楽しく書けま  
した。

○3年間の思い出がよみがえった。

○構成や文面を工夫することができた。

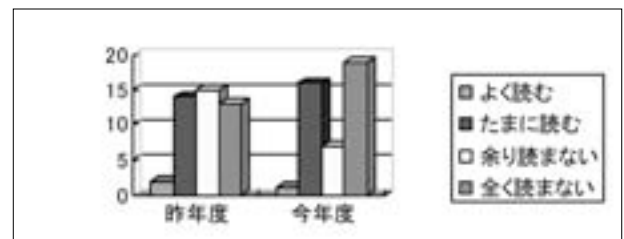
○1年間の思い出を上手にまとめられて良かったです。

## 5. アンケート調査結果

N I E活動の1年目と2年目を比較し、生徒にど  
のような変化が見られたのかを調査した。対象は、現  
3年生である。また、1年目のアンケート調査では学  
年間の違いや変化を見たが、そのときの結果も踏ま  
えながら考察していく。

設問1 あなたは家庭で新聞等を読みますか。

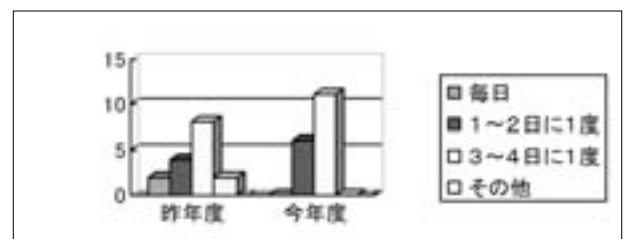
- ①よく読む ②たまに読む ③あまり読まない  
④まったく読まない



家庭で新聞を読んでいる生徒は約40%であり、昨  
年度と変わらない。「全く読まない」生徒が増えたが、  
前回の調査からも学年が上がると新聞から遠ざかる  
傾向にあることは分かっていた。反省点はあるが、N  
I Eを推進したことで新聞を読む割合を維持できたと  
考える。

設問2 (設問1で読むと回答した人に)1週間にど  
のくらい読みますか。

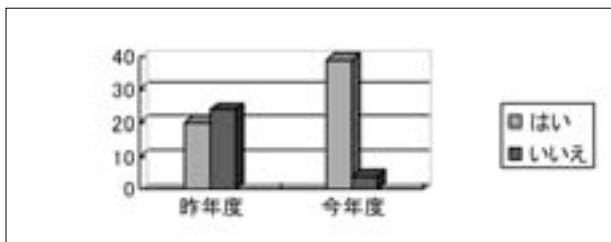
- ①毎日読む ②1~2日に一度程度読む  
③3~4日に一度程度読む ④その他



新聞を読んでいる生徒については、1週間に2回  
程度が最も多く、次いで1週間に3回程度となっ  
ている。昨年度と比較すると頻度が増えた生徒も減  
った生徒もいるが相対的には変わらない。

**設問3** あなたは、N I Eを知っていますか。

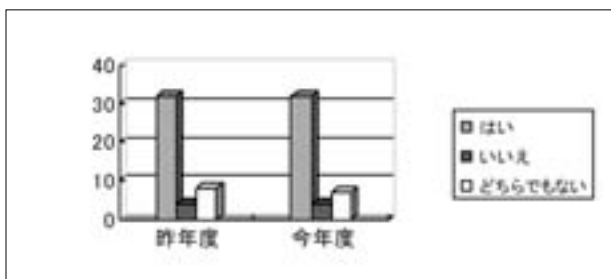
- ①はい ②いいえ



昨年度は「N I E」を知らない生徒の方が多かったが、今年度はほぼ全員が「知っている」と回答した。朝の会を中心としたN I E活動、校内掲示、先生方の協力など2年間の継続が実ったと感じる。

**設問4** あなたは、新聞を読むことが学習に役に立つと思いますか。

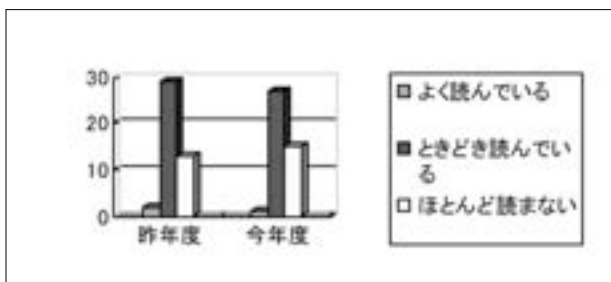
- ①はい ②いいえ ③どちらでもない



学習に役立つと思う割合は昨年度と変わらず高い。

**設問5** 宮中学校ではN I Eの活動の一環として、学校で新聞を自由に読めるようにしています。あなたは学校で新聞を読んでいますか。

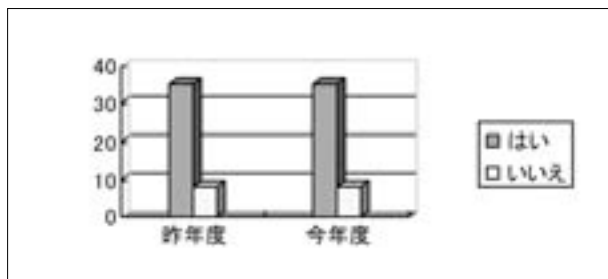
- ①よく読んでいる ②ときどき読んでいる ③ほとんど読まない



昨年度と変わらず「ときどき読む」生徒が多い。学年が上がると新聞から遠ざかる傾向にあるが、「ときどき読む」ことを維持できた。しかし、新聞を読むための「N I Eコーナー」をさらに工夫する必要があった。図書室との連携はさらに効果を上げられると感じる。

**設問6** 新聞を読むことで「なるほど」と思ったりしたことはありますか。

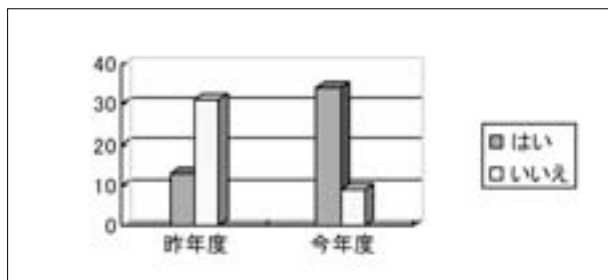
- ①はい ②いいえ



ほとんどの生徒が新聞を読んで「なるほど」と学習できている。それを教科外で2年間継続できたことは大きな成果である。

**設問7** あなたは新聞を読んで、自分の考えや感想を作文に表したりしたことはありますか。

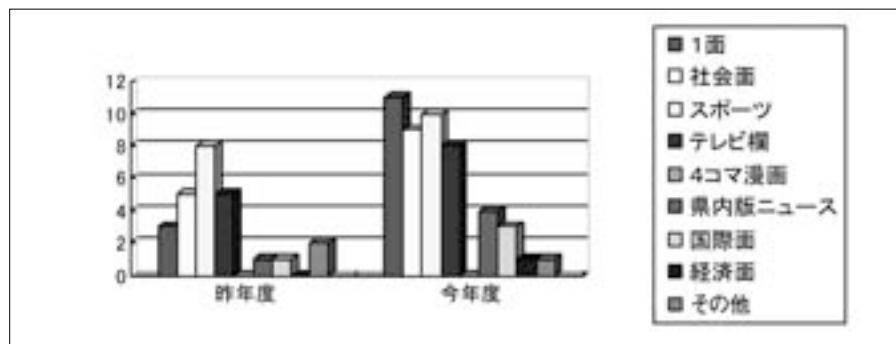
- ①はい ②いいえ



昨年度は、新聞を読んで意見を表す経験や実感はほとんどの生徒が持っていなかった。N I E活動を軌道にのせ、大きく改善できた。

**設問 8** (設問 1 で読むと回答した人に) どんな記事をよく読みますか。(3 つまで)

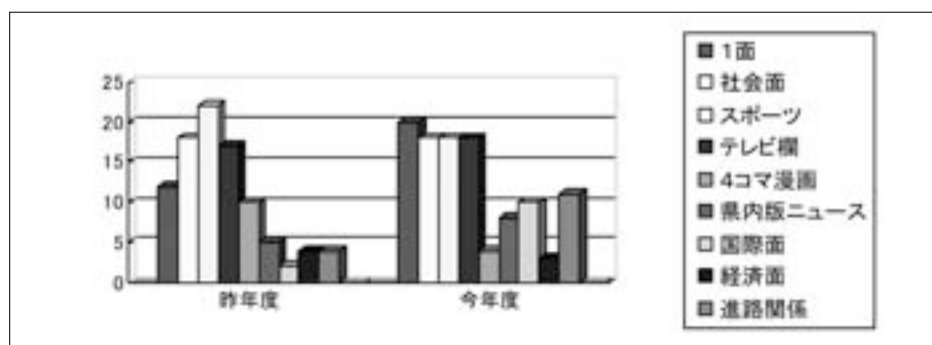
- ① 1 面 (新聞の表紙記事) ② 社会面 (事故・事件など) ③ スポーツ記事 ④ テレビ欄 ⑤ 四コマ漫画  
⑥ 県内版ニュース ⑦ 国際面 ⑧ 経済面 ⑨ その他



一つの記事と限定するのではなく、バランス良く新聞を読むようになった。特に、1面を読む生徒が少なかったが約4倍にも増え、1面が最も読まれる記事になった。

**設問 9** 現在、あなたが興味・関心があるのはどんな新聞記事ですか。(3 つまで)

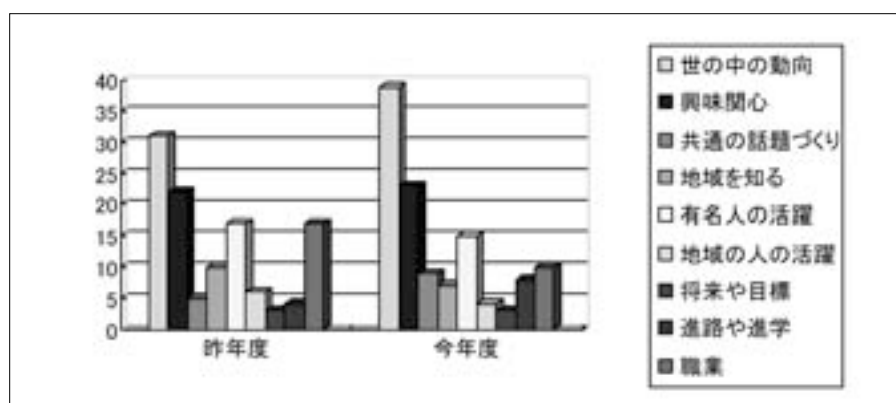
- ① 1 面 (新聞の表紙記事) ② 社会面 (事故・事件など) ③ スポーツ記事 ④ テレビ欄 ⑤ 四コマ漫画  
⑥ 県内版ニュース ⑦ 国際面 ⑧ 経済面 ⑨ 進路・進学関係



分散の広がり見られ、いろんな分野に興味・関心が向くようになった。特に、国際面、進路関係の伸び率が高い。「朝のスピーチ」が充実していた実感もある。

**設問 10** 新聞を読むことで役に立つことはどんなことだと思いますか。(3 つまで)

- ① 1 面 (新聞の表紙記事) ② 社会面 (事故・事件など) ③ スポーツ記事 ④ テレビ欄 ⑤ 四コマ漫画  
⑥ 県内版ニュース ⑦ 国際面 ⑧ 経済面 ⑨ 進路・進学関係



大きな変化は見られないが、「世の中の動向を知る」割合がさらに高まった。さまざまな面で新聞が役立つという価値観には至らなかった。「共通の話題づくり」が増えたことは一つの成果として感じる。

(担当 教諭 村樫雅恵)

## 英語科と総合的な学習の時間での新聞活用

### I はじめに

本校は、平成 26・27 年度の 2 年間、N I E 研究協力校・実践指定校として認定を受けた。英語の授業実践を中心に、総合的な学習の時間では、小論文指導と関連付けて 4 学年で活用した。

### II 本校の現状について

認定を受ける以前から、教科・科目ではもちろん、道徳や学級活動・ホームルーム活動でも積極的に新聞を利用している。また、図書館では日刊紙 4 紙 (河北新報・朝日新聞・毎日新聞・読売新聞) と週刊英和新聞 (Asahi Weekly・週刊 ST) を掲示し、生徒はいつでも新聞が読める環境にある。



写真上左：新聞・雑誌のコーナー 右：新聞掛け  
写真下左：綴じられた 6 紙 右：バックナンバー

### III 2 年間の受け入れ体制について

#### 1 購読した新聞

英語科が実践の主体ということで、6 紙のうち 1 紙が日刊英字新聞 (The Japan News) と 2 つの週刊英和新聞 (Mainichi Weekly・Asahi Weekly) を購読した。週刊英和新聞は、日刊紙と比べて安く購読できるが (月額千円程度)、その分期間を延長したり、部

数を多く取ることはできない。

#### 2 購読期間

2 年間とも 9 月から 12 月の 4 か月間新聞を購読した。毎朝ポストに配達される新聞を、事務室にお願いし、英語科のメールボックスに入れてもらった。購読を開始する時には、ファックスや電話で販売店に連絡しなければならない。また、年末年始の閉庁日の取り扱いにも注意が必要である。

#### 3 保管場所

##### ①職員室

図書館で新聞を自由に読める環境なので、新聞を閲覧する場所を特別に設置する必要はなかった。また、6 紙中 3 紙が英語の新聞ということもあり、カゴに入れて担当者の机の上に置き、英語科のスタッフが自由に読めるようにした。



##### ②教室

6 年生 (高校 3 年生) の教室に、日本経済新聞と産経新聞を置き、生徒が自由に読めるようにした。卒業後の進路を考える上では、時々刻々と変わる世の中の動きを捉えるには格好の情報源となっていたようである。





#### 4 職員室での連絡方法

英語科内では主に回覧板で連絡をした。また、職員室には、校内外の研修会や各種大会を周知する掲示板があるので、そこに「かほくNIE工房」の案内や「みやぎNIEだより」を掲示した。また、送られてきた資料は、その下に自由に見られるように並べてある。英語科のスタッフ以外にも、NIEの活動を啓発する必要性は常に感じている。



#### 5 実践の参考になるサイトの紹介

実践を行う上で、教科内での話し合いやアイデアの共有は大事であるが、インターネットで先進的な事例を見聞し、すぐに使えるワークシートなどを活用することも有効である。以下に実践に役立つサイトを紹介したい。

##### ①河北新報：「かほくワークシート」

「かほくワークシート」は河北新報の記事を使った学習用のワークシートで、毎週朝刊の「かほピョンNIEのページ」に連載されている。PDFデータはA4判に印刷できるので、そのまま授業で活用することができる。



##### ②日本新聞協会：「教育に新聞を」

NIEとは何かという説明が丁寧にされている。また、「実践指定校実践例」では、校種別、教科・科目別に実践例が掲載されている。そこには、ねらいやポイント、実践内容まで細かく書かれてあり、まずはそれを真似ることから取組を始めることができる。



##### ③新聞社のNIEのページ

各新聞社では、授業に活用できる記事やワークシートを掲載している。是非とも一読していただき、アイデアを膨らませてもらいたい。例えば、朝日新聞の「教育プロジェクト」、読売新聞の「教育ネットワーク」等々ある。また、情報満載のメールの配信サービスを行っている新聞社もある。



#### IV 新聞を教材として活用するメリット

メリットがはっきりすればこそ、新聞を教材として活用していく機会が増えてくる。ここでは、教材作成のポイントや、新聞を活用することで生徒の学習に対するモチベーションが上がり、アクティブに活動できる可能性を考えてみたい。

##### 1 教材の定義

教材とは、授業を成立させるためのメディア（媒体・手段）であり、ねらいや目標を達成させるために選ばれた素材である。また、ねらいや目標と生徒のレディネスとを結びつけるために、先生が計画的に用いる素材である。

##### 2 教師が教材作成をする3つのポイント

- ①生徒のことを最もよく知っている教師が、生徒の興味・関心や、心の準備にぴったりあったものを作ることができる。
- ②教科書やワークブックと違い、必要なときにすぐに作ることができる。
- ③生徒の実態に応じた指導を、よりスムーズに、より实际的に、そして楽しく行うことができる。

##### 3 教師が教材作成を躊躇する4つのポイント

- ①時間とお金がかかり、自己負担する場合がある。
- ②ねらいに合った教材を作るのは簡単ではない。
- ③材料・道具・場所等が簡単に満たされない。
- ④作るにはそれなりの技術、能力が必要である。

##### 4 新聞を教材として活用する2つのメリット

###### ①新鮮さ＝新しい情報

新聞には常に最新の記事が掲載され、生徒にもなじみ深いものが多い。普遍的なテーマを教科書で学ぶことも重要であるが、時事問題や生徒が関心を持つ話題を提供することで、生徒のモチベーションは必然的に高まる。

###### ②手軽さ＝入手しやすい・加工しやすい

紙の新聞は、どこでも開くことができ、一覧性に優れ、教師のセレンディピティを磨く訓練にもなる。一方、インターネットを使えばキーワードで検索できるので、ピンポイントで使いたい記事を入手できる。また、加工もしやすいので、授業形態に合わせて変化させることができる。

##### 5 英語教育の抜本的強化のイメージ

文部科学省が昨年8月にまとめた「英語教育の抜

本的強化のイメージ」では、英語力を伸ばす目標例に「短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができるようにする（中学校）」や「ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表したりすることができるようにする（高校）」を挙げている。よって、今後は、新聞を授業に活用する機会はますます増えてくると予想される。



#### V 英語科での取組について

##### 1 授業での取組

2年目の今年は、各学年の英語の先生に実践を行っていただき、報告書を書いていただくようお願いした。ここでは、実践活動例を2つ紹介する。

###### ①英字新聞記事の見出しを使う（3年生）

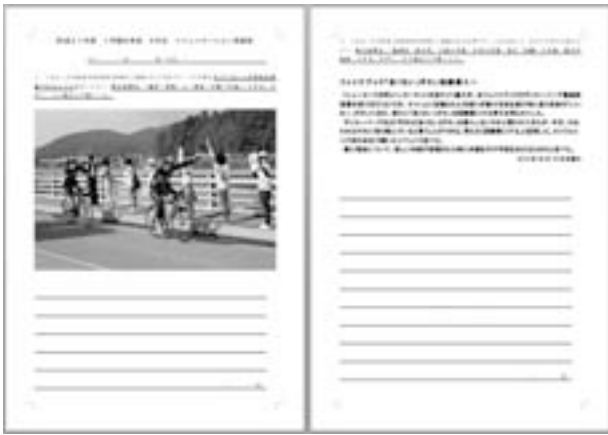
新聞の記事で一番先に目に飛び込んでくる見出しを使うことで、英字新聞に親しみ、見出しを味わうことができる。（資料1）

###### ②英語の社説を使う（6年生）

読売新聞の社説を英訳したものが The Japan News に掲載されているので、日本語と英語の両方を使うことにより、英語と国語、そして社会の学習を複合的に行うことができる。（資料2）

##### 2 定期考査での活用

授業で記事を取り上げたということもあり、定期考査でも英作文の素材として新聞記事を活用した。ここでは、河北新報 ONLINE NEWS に掲載された写真と記事を使った。設問は以下の通りで、写真では、そこに写っている情景を説明させ、記事では自分の意見を書かせる形式を採用した。



問1：この写真を見ていない人が情景を想像できるように説明しなさい。

問2：この記事を読んで、あなたの考えを書きなさい。

### 3 「いっしょに読もう! 新聞コンクール」への応募

普段から、本文や段落の要点をまとめ、自分の感想を自由に言わせる(書かせる)活動をしているので、その流れが活かせるコンクールへ応募した。日本語と英語の違いはあるが、やることは全く同じなので、生徒は苦勞することなく取り組めた。自分で読みたい記事を選ぶことで、書こうという気分も高まり、理解が深まる。さらに、外部の人間に評価してもらうことは、生徒にとって励みとなる。入賞はできなかったが、参加することに意義がある活動である。

### 4 帯学習に適した活動例の蓄積

大掛かりな実践も必要であるが、帯学習に使える小さな活動例も作成中であり、今後も継続して作成していくつもりである。すべてを掲載するわけにはいかないなので、現在完成している活動の項目を以下に掲載する。

- ①新聞ざっと読み(ニュースペーパーハント)
- ②年号、月日、曜日
- ③天気、降水確率、最低気温・最高気温
- ④カタカナ語
- ⑤写真記事(スタンドアローン)
- ⑥ランキング

## Ⅵ 総合的な学習の時間での取り組み

今年度で3年連続となる「出前授業」は、小論文指導の一環として位置付けている。これは、NIE研究協力校・実践指定校になる前から実施していたが、指定を受けたことで、河北新報社教育プロジェクトから講師を派遣していただくことがスムーズになった。最近、大学入試で小論文を課すところが増えており、その原典として新聞記事を使用しているところが多い。そういう理由から、言葉を扱うプロから新聞に関する講話をいただき、新聞を使った活動に参加することで、生徒は新聞を読む楽しさと大切さ理解し、継続して読んでもらいたいと考えている。

### 1 出前授業へ向けて

事前の意識づけとして、「かほくワークシート」を活用した。本校では、朝の会の前に朝読書を実施しているが、その1コマを活用してワークシートに取り組んでもらった。

### 2 出前授業

1月26日に、河北新報社教育プロジェクト事務局長の砂金慎氏に、4年生対象にご講演をお願いした。生徒は、現場を経験した専門家からの話に興味津々で、新聞の読み方を学び、同時に新聞を読む重要性を再認識していた。

## Ⅶ まとめと今後の課題

学校全体で組織的に取り組む意義は大きいですが、本校のように英語科が主体となって専門的に実践を深めていくことも、今後新聞活用を推進・普及していく上でも必要となってくる。ただし、取り組まれるスタッフの熱意はもちろん、教材論に則った教材作成がマストであるということを改めて感じている。最後に、文部科学省では、今後英語の授業で求められるのは、(英字)新聞に書かれてある内容を理解し、それを要約、発表していく力と位置付けた。時代の要請に応える有効な手段として、NIEが再び脚光を浴びる日が近づいているという予感がしている。

## 活動名：英字新聞記事の見出しを付けてみよう！

### 1. ねらい

新聞の記事で一番先に目に飛び込んでくる見出し。英字新聞に触れ、見出しを付けることから、新聞から知識を得たり、的確な見出しを探る喜びを味わわせる。

### 2. 実施学年：3年生

### 3. 実施教科・科目：英語

### 4. 活動時間：45分

### 5. 新聞名：MAINICHI WEEKLY The Japan News Asahi Weekly

### 6. 活用のポイント

①生徒にとって身近な新聞記事を扱う。

②見出しに取り上げられている英単語が、既出のものを取り上げる。

### 7. 実際の活動の流れ

①新聞の見出しの特徴について挙げさせる。(自由に挙手)

(例)・わかりやすい ・目立つ ・カラフル ・短い など



②英字新聞の記事を読み、見出しを付ける。(生活班)

ア 班で記事を読み、見出しを付ける。(7分)

イ ホワイトボードを使用し、発表。

ウ 本当の記事の見出しを発表。

エ ALTにも独創的な見出しを選んでもらい、コメントをもらう。



③まとめ (生徒の感想発表・教師からの講評)

### 8. 留意点

新聞記事は3つ用意するが、時間を見て調整する。

### チャレンジ1 (短い記事を取り上げ、習ったばかりの慣用句を入れさせる。)

**SPORTS**

### Asada does well enough to lift title

The fastest skater

BEIJING — Mao Asada was a bit <1> chiller in her free skate than she was the previous day in the short program. Still, she did well enough to win the women's title on Nov. 7 at the Cup of China in Beijing.

Asada, returning to major competition after taking a year-long <2> hiatus, combined with teenage compatriot Elise Horgan to give Japan a 1-2 finish in the third event of the ISU Grand Prix series.

Asada compiled a total of 197.48 points to <3> edge Horgan, who was second with 195.76. Russian Elena Radionova, who was sixth after the short program, finished third at 184.26, edging competitor Anna Pogorilaya.



Asada performed her free skate.

<1> chiller は shaly の比較級です。shaly は「体が震える、不安定な」という意味です。スポーツでは選手やチームの不調を直す場合に使われ、例えれば野球で shaky start といえば、先発投手の立ち上がりがよくないことを表します。

<2> hiatus は「中断、休止」で、「ハイニイナス」と発音します。ここでは休養を指し、after taking a year-long hiatus で「1年間の休養後」という意味になります。休養は rest が一般的ですが、本業をしばらく休むという文脈の場合、leave も使われます。Mao Asada announced a leave of absence last May and she won the first prize at the comeback game.

(高校英検選手は昨年1月に休養宣言し、復帰戦) 解で優勝しました) となります。

<3> edge は「半勝する、僅差で勝る」です。例題選手は172点の僅差で本郷選手から逃げ切り、日本勢で3位と2位を占めました (Japan was given a 1-2 finish).

チャレンジ2 (韻を踏んでいる見出しのおもしろさに気付く。)



チャレンジ3 (言葉の意味を2通りから迫る見出しのおもしろさに気付く。)



おまけ (野球選手：中田翔から Nakata's show とかけている記事を紹介する。)



教科	外国語（英語・英語表現Ⅱ）	授業者	
日時・校時	12月22日（火） 2校時	指導学年・学級	6-12 場所 6-1
学習題材名	英字新聞（The Japan News - editorial）		
本時のねらい	①新聞記事社説（editorial）を読み、内容を理解し的確な日本語で英文和訳・和文英訳ができる。→入試対策 ②自分なりの考えを周りと意見交換できる。		
提案事項 ①思考の練り合い ②表現力が身に付いたかを測る尺度（規準）	①個人での思考→グループでの意見交換へ（日本語訳や英文の回し読み） ②解答を参照し自己チェックにより表現力の確認を行う。		

### 指導過程

	学習活動	学習形態	指導上の留意点
導入 (5分)	本時の目的確認 1 英文和訳・英文和訳の力を養う 2 自分の考えを英語で表現する	一斉	
展開 (25分)	1 editorial ① silent reading ② Mission 1 Vocabulary ③ Mission 2 Translation ④ <u>exchange sheet in groups</u> ⑤ check model English ④ Express own opinion	個人→ グループ	○的確な日本語で和訳を行うこと。 →入試対策 ○既習の文法や構文を用いて英文を完成させる。 ○英文を書かせても、key words だけのメモでも構わない。
終結 (10分)	Presentation	グループ	自分の意見を手短かにまとめて発表させる、

### ワークシート

#### < 1 枚目 >

#### Supreme Court's ruling is one thing; debate on systemic change is another

① The use of the same surname by married couples, which has firmly taken root in Japanese society, is reasonable. The Supreme Court's ruling, which concluded so, is appropriate.

The top court's Grand Bench handed down a ruling that the Civil Code provision stipulating that a married couple should use the same surname, banning their use of separate surnames, is constitutional.

The plaintiffs, including a couple in a so-called de facto marriage, claimed that the provision stipulating the use of the same surname for a married couple runs counter to the Constitution, which guarantees the dignity of individuals and equality between men and women.

The top court attached great importance to the point that the Civil Code leaves it up to the married couple to discuss the choice between using the husband's surname or the wife's one. The court acknowledged, "There is no formal inequality between men and women." The ruling also pointed out that a married couple uses the same surname to show that they are of the same family. We understand both points.

The court also judged that the already wide use of maiden names in society means "the disadvantage to be suffered by women can be mitigated to a certain extent."

The latest ruling can be interpreted in various ways. At the Grand Bench, five of the 15 justices concluded that the Civil Code provision is unconstitutional.



Included in the five justices are the court's three women. The five justices criticized the mandatory use of the same surname by a married couple, saying, "In many cases, it is only a wife who has the function of individual identification harmed." This is an opinion made in light of the real state of affairs, that 96 percent of married couples have chosen their husbands' surnames.

We understand the feelings of women who have worked using their maiden names and do not want to change their surnames.

②On the other hand, it is a fact that many people have accepted the use of the same surname for a married couple. According to various public opinion polls, the ayes and nays on the use of separate surnames for married couples are almost equally divided.

To be noted is that the top court's ruling on the constitutionality of the law does not necessarily have the same focus as a discussion of the pros and cons of a systemic change.

It is desirable that a review of legislation that is closely linked to people's daily life is to be discussed in line with the public attitude.

③By expanding the scope in which the use of maiden names is permitted in society, comfortable job environments for women should be created first. (458words)

## < 2 枚目 >

### 夫婦同姓合憲 司法判断と制度の是非は別だ

①日本社会に定着している夫婦同姓は合理的だ。そう結論づけた最高裁の判断は妥当である。

夫婦同姓を定め、別姓を認めていない民法の規定について、最高裁大法廷は合憲だとする判決を言い渡した。

事実婚の夫婦らが、同姓規定は個人の尊厳や男女平等を保障した憲法に反すると訴えていた。

大法廷が重視したのは、夫婦がどちらの姓を称するかについて、民法が夫婦間の協議に委ねている点だ。「男女間の形式的不平等は存在しない」と認定した。

夫婦が同じ姓を名乗るのは、同一の家族であることを示す意味合いがあるとも指摘した。いずれも、うなずける見解である。

社会での旧姓使用の広がりにより、「女性の不利益は一定程度緩和され得る」とも判断した。

今回の判決には、様々な受け止め方があろう。大法廷でも 15 人の裁判官のうち、5 人が民法の規定を違憲だと判断した。

この中には 3 人の女性裁判官が含まれる。「多くの場合、妻のみが個人識別機能を損ねられている」と夫婦同姓を批判した。夫婦の 96% が夫の姓を選んでいる現状を踏まえた意見だ。

旧姓を使い、仕事を続けてきた女性らが姓を変えたくないという心情は理解できる。

②一方で、多くの国民が夫婦同姓を受け入れている現実もある。各種の世論調査では、別姓への賛否が、ほぼ拮抗している。

留意すべきは、最高裁の合憲判断と制度変更の是非とは、必ずしも論点が一致しないことである。生活に密着する法制の見直しは、国民の意識と歩調を合わせて検討されることが望ましい。

③まずは社会の中で旧姓使用を認める範囲をより広げ、女性が働きやすい環境を整えるべきだ。

## < 3 枚目 >

### MISSION 1 : Vocabulary

夫婦別姓・判決・民法・合憲・事実婚・個人の尊厳・男女平等・旧姓・違憲・個人識別機能・賛否

### MISSION 2 : Translation

①

②

③

### MISSION 3 : Your Opinion

(担当 教諭 大槻欣史)

## 新聞記事データベースを利用した防災教育

～考察力・読み取り力・表現力を養う～

### 1 はじめに

本校は仙台市の北東部に隣接する多賀城市に設立され、今年度創立 40 周年を迎えた。平成 23 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」で、学校の位置する多賀城市は多くの尊い命を失うとともに甚大な被害を被った。この出来事を機に、本校は平成 28 年 4 月、全国で 2 例目の防災系学科である「災害科学科」を開設し、防災教育の先駆的役割を担うことになり、多様な教育環境の整備として、昨年度から N I E 協力校として取り組むことになった。

### 2 昨年度の取組

※詳細は昨年度の「実践報告書」参照

- (1) 生徒の新聞に対する環境・意識調査。
- (2) 将来的に新聞を使った防災教育に向けての方策を探り、その素地を整えるため、教材としての新聞記事の活用。
- (3) 災害科学科新設に向けた教材作成。

### 3 今年度の取組・実践

#### (1) 実践 1

「総合的学習の時間」でのディベートの実践においての新聞の利用

#### ◎ねらい

- ①客観的・批判的・多角的な態度を養う。
- ②論理思考を養い表現できる能力を育てる。
- ③情報収集/整理/処理能力を育成する。

#### ◎テーマ

「原発再稼働」



#### ◎生徒の学習活動

肯定派・否定派とも、資料収集に紙媒体に加えて、スマートフォン・タブレット端末・P C (本校情報処理室) 等を利用させた。

併せて P C を使用して、「河北新報」及び「朝日新聞」の記事データベース利用を促した。



図書室での資料収集



スマートフォンの利用



新聞データベースの検索

#### ◎考察

インターネットを利用して情報収集を行う際に、企業等の web ページに直接アクセスする生徒が多くみられた。また、さまざまな団体からのメッセージを未整理のまま主張の論拠とする傾向が見られた。

一方、新聞記事を論拠として主張した生徒は、事実を客観的にとらえ、説得力について前者より若干勝っていた。

なお、再稼働肯定に関する新聞記事は非常に少なく、その点で否定派に有利に働いたのではないかと考え、新聞の役割や影響について、あらためて気づかされたようであった。

このことから、ねらいの③に掲げた事項について、今一度振り返ってみるの必要を感じた。

## (2) 実践2

### 「デジタル地図帳」で「マイ・ハザードマップ」をつくる

#### ◎ねらい

「災害科学科」が開設されることを踏まえて、タブレット端末を使った「デジタル地図帳」(写真右)の活用法、ICTと地域資源を活用した新しい防災教育、地理教育教材の在り方や、被災地からの効果的な情報発信の方法について考える。※「震災記憶地図」



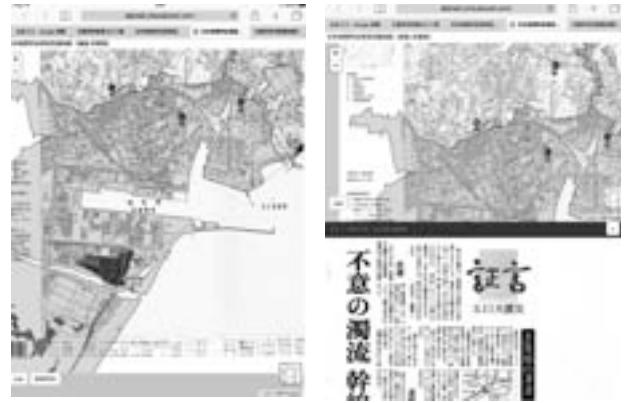
#### ◎生徒の学習活動



- ①「デジタル地図帳」ソフトの1つである、「震災記憶地図」(ATR Creative社 iPhone/iPad用)を利用して「マイ・ハザードマップ」を作る。
- ②作成した地図にタグを設定し、当該地点に関連した、「写真・新聞記事の埋め込み」を行う。
- ③作成した地図の活用について考える。

#### ※「震災記憶地図」

位置情報を持たない地図画像をパソコンで取り込み、位置情報や写真を埋め込み、タブレット端末上で閲覧できるように加工できるソフト。「ちずぶらり」の商標で、ATR Creative社が自治体や図書館向けに有償開発しているが、「震災記憶地図」は東日本大震災の復興支援事業として無償公開、および震災被災地に限って一般ユーザーによる地図の搭載や情報付与と公開を開放している。



タブレット端末に取り込んだ地図(写真左上)に設定されたタグをタップすると、関連する写真や新聞記事が標示される(写真右上)。

他県の生徒との交流活動の中で、作成したマップを利用し現地被災状況等について説明を行う。(写真右下：修学旅行で多賀城市を訪れた新潟県の高校生がタブレット端末を手にして説明を聞く)



#### ◎考察

処理するデータ量が多く、PCの処理能力や回線の容量不足などによる制約によってアクシデントも多かったが、生徒は学校周辺の地図を利用し、地図に埋め込む情報を新聞から探し出すことで新たな発見をすることができた。

また、試行錯誤をくり返すことで、工夫する楽しさを身に付けることができた。

## (3) 実践3

### 「災害科学科」の開設に伴う教科書の作成

#### ◎目的

開設される「災害科学科」の専門科目に関しては検定済教科書が発行されていない(文科省発行教科書を含む)ため、学校独自で教科書を編集・作成する必要性に迫られた。

#### ◎ねらい

新聞記事を教材として提示することにより、学習内容を身近な問題として捉えることができるのではないかと考えた。

◎例：「くらしと安全A」の教科書として現在編集集中のもの。(次ページ)

○災害科学科1/2年次に学校設定科目として設定(計4単位)

○随所に新聞記事を挿入。

## 2 津波

関連

家庭基礎…なし  
保 健…なし

### 学習のねらい

- ① 津波の性質と到達時間・地形的特徴を理解し避難方法を理解しよう。
- ② 都市型津波の特徴とその被害を理解しよう。

### 1 津波



図1 プレートのはね上がり現象(内閣府IPより)

【1】津波とは 津波とは、「津」すなわち「港」の波ということで海岸を急に襲う大波を意味します。海溝型地震は、海底のプレートの「はね上がり(隆起)」**図1**や「沈み込み(沈降)」により海面が大きく持ちあがり、陸地に波が押し寄せます。

【2】津波の際の避難 津波からの避難は、より遠くにより高く逃げるのが基本です。また津波は第二波、第三波とやって来ます。**図2**東日本大震災でも、第一波のあと潮位が数メートル下がり、その後第二波が来ています。この引き波のときに自宅に戻り犠牲になった人も多数おり、「警報解除までは引き返さない」というのが鉄則です。

さらに津波は、地震の規模と発生場所によって、その高さや到達時間が変わります。東日本大震災では本震の約30～40分後に岩手県宮古市や宮城県石巻市鮎川へ到達し、1時間後に福島県相馬市に達しています。高さはリアス式海岸が続く三陸沿岸は10m～20m以上の高さを記録しましたが、これまで高い津波は来ないとされてきた仙台湾から福島県沿岸部も10m前後の高い波が押し寄せました。高台に逃げた人はほとんど無事でしたが、建物の2階や3階に垂直避難をした人は、津波の浸水高により生死が分かれました。2階建ての小学校の屋上に避難して、全校生徒が助かった山元町中浜小学校。一方で南三陸町防災対策庁舎では、鉄筋3階建ての屋上に避難しても津波にのまれました**図3**。それぞれの土地の地理的特徴などを日頃から十分に理解しておくことが重要です。

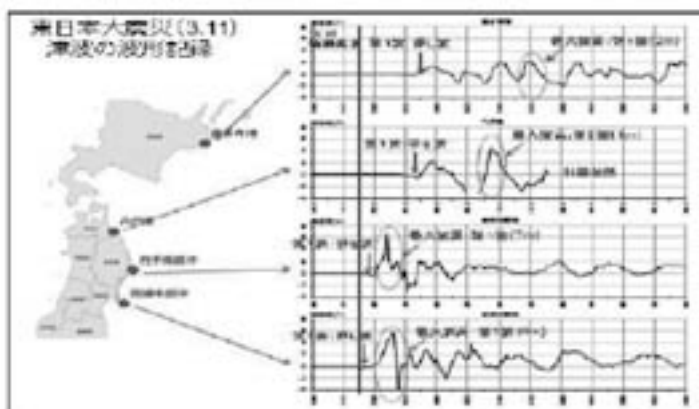


図2 各地の津波波高記録(岩手大学調べ)



図3 南三陸防災庁舎に関する記事(河北新報)

【1】都市型津波の実際 多賀城市では、東日本大震災で唯一この①「都市型津波」に襲われました。市内には、仙台港方向からの津波と、貞山運河を遡上した津波、砂押川の堤防を破り市街地に流入した津波の3つが襲いました。とくに、市内明月地区では仙台港方向からの津波に加えて、それとは反対方向の砂押川を遡上し堤防を越えた津波の2つが襲いました。津波は県道仙台・塩釜線（通称：産業道路）や国道45号を木路代わりとして内陸部へ進み、海が全く見えないこの地域を車で通過中の人は、まったく無警戒のまま津波の被害に遭いたくさんの犠牲者が出ました（図4）。

①「都市型津波」津波が臨海部の港湾や工業地帯、高密度な市街地を広域的に襲い、甚大な被害を与える津波。

「都市型津波」の特徴はこのように、工場やマンション、ビルなどの頑丈な建物があるため、津波は進路を変え、また流れる範囲が狭められることとなります。多賀城市の各所でも、次々に津波が襲来する中、それに押されるようにして高さが増し、流速を速める「縮流」という現象が起こったとされています。また、小さな川が合流して大河になるように、細い道を抜けた津波が交差点などで一つになる「合流」も起きました。上陸してしまえば津波の勢いが弱ってくると考えがちですが、逆に高さや速度を増す場合もあるのです。さらに、海とは逆の方向から襲ってくる場合もあり十分な注意が必要になります。

**調べよう** 津波警報時の車で避難にはどのような課題と問題点があるか。



### 都市的・環境被害を拡大

海が近くても工場・住宅で視界遮られる

**住民**

3・11大震災

河北新報 2011.5.11

### 避難の車 沿岸渋滞

多賀城市では中心部や幹線道路が車で渋滞。だが「車の気配がなくなった」と、避難者から聞いた。避難者は、津波が来る前に車を止めた。津波が来たときに、車を止めたまま避難した。津波が来たときに、車を止めたまま避難した。津波が来たときに、車を止めたまま避難した。

河北新報 2012.12.6



## 生きる言葉の力を高める N I E

### 1 はじめに

本校では「生きる言葉の力を高める N I E」をテーマとして設定し、平成 27 年度から N I E の実践に取り組むこととなった。

児童に話を聞いてみると、新聞をとっていても見たり読んだりする機会が少ない児童が多くなっている。そこで、1 年目である本年度は、まず新聞に興味をもたせること、実際に触れさせることに重点をおき、高学年の児童を対象に実践を行った。

### 2 実践の概要

#### (1) 環境整備

高学年の児童がよく通る校舎 3 階廊下に、新聞コーナーを設置した。日付ごとにファイルボックスにストックしていき、自由に読めるようにした。休み時間に立ち止まって眺めたり、近くに置いたテーブルや床に新聞を広げて読んだりする姿が見られた。朝の読書タイム等に学級で活用することもあった。

また、職員室前の掲示板に本校児童が載った河北新報の記事を紹介する N I E コーナーを設けた。



〔N I E 掲示板〕



〔新聞コーナー〕

#### (2) N I E タイム [5・6年]

月曜日と木曜日の朝の活動時間を利用し、新聞記事を題材にした問題に取り組ませた。記事を読んで 1～3 問程度の設問に答えるもの。新聞記事の文章から大事なことを読み取る力を育てたいと考え、高学年担任が児童の実態に合わせて問題を作成した。



〔問題プリント〕

#### (3) 新聞記事の切り抜き

自主学习ノートに自分が気になった新聞記事の切り抜きを貼り、文章にサイドラインを引いたり、一言感想を書かせたりした。新聞を取っていない家庭の児童用に、教室に新聞ボックスを設置して古い新聞をストックし、自由に切り抜いて持って行ってよいこととした。最初は貼るだけだった児童も、慣れてくると記事に対しての感想が書けるようになった。工夫している児童のノートを掲示して、参考となるようにした。



〔5年児童の自主勉強ノート〕

〔授業の様子：隣の子に説明〕

#### (4)授業での活用

##### 【5年国語「資料を生かして考えたことを書こう」】

1学期に「新聞記事を読み比べよう」という単元で、記事の中の写真の役割や効果について学習したことを生かして、2学期は一人一人自由に新聞を読ませ、気になる記事を選ばせた。そこから読み取った情報を活用して文章を書き、紹介するポスターにまとめさせた。児童は、改めて記事の中で使われている写真の効果や情報量の多さ、見出しの大切さに気付くことができた。

##### 【6年社会「新聞広告で近代の日本を調べよう」】

明治・大正・第二次世界大戦中・戦後それぞれの時代の新聞広告から、気付いたことをまとめさせ、時代毎の特徴を発表し共有させた。児童は初めて見る新聞広告に興味を持ち、自分の見ている広告がいつの時代のものかを表す手がかりを真剣に探していた。新聞の持つその時代を反映する媒体として新聞広告を活用し、教科書で学んできた歴史を振り返りながら、近代日本の特徴を捉えさせることができた。

#### (5)教員研修

4月に宮城県NIE委員会事務局から砂金慎氏、齋藤昭雄氏を講師にお迎えして、研究の取り組み方についての研修会を行った。また、8月に本校を会場に行われた宮城県NIE地区研修会に多くの職員が参加し、NIE活動についての理解を深めることができた。

#### 3 次年度に向けて

- ・校内でNIEの実践を行う組織作りやカリキュラムへの位置付けなど、1年目の実践を踏まえて教職員間の共通理解を図っていく。
- ・児童が主体的に新聞を眺めたり読んだりできるよう、環境づくりを工夫していく。

(担当 教諭 阿部 恵)



## (7) 登米市立上沼小学校 (平成 27・28 年度実践指定校)

# 新聞に親しみ、「読む」・「考える」・「発表する」・ 「活用する」力の育成

### 1 はじめに

本校は今年度から2か年(平成27・28年度)にわたりNIE実践指定校となった。

本校の児童の実態として、「自分の考えを主張することがあまりできない。」「テレビ、ビデオ、ゲームの時間が全国や宮城県平均を上回り、読書を全くしない児童の割合も全国や宮城県平均を上回り、活字離れが進んでいる。」「地域上、グローバルな視点での職業に接する機会が相対的に少ない。」ことが挙げられる。

今回、NIE実践指定校となることで、学びの活動に新聞を活用し教職員の指導力の充実を図りながら、本校児童の課題を克服し、確かな学力向上に結び付けられると考えた。また、志教育・キャリア教育の一環としても、新聞を通して社会の出来事や世界に視野を向けることやマスメディアへの関心を高めることは、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めていくことにつながると考えた。

### 2 実践の概要

NIEに取り組むにあたって事前に行った児童の実態調査からは、新聞を読むことに対して半数以上が「どちらかと言えば嫌い」「嫌い」と答えていること、また、新聞を読む頻度についても「読まない」と答えた児童が約半数いることが分かった。

また、本校職員の本ほとんどがNIEには初めて取り組むという点からも、今年度は次の2つの視点でNIEに取り組もうと考えた。

○新聞を身近なものに感じ、新聞をはじめとした活字に親しむよう児童の意欲を高める。

○新聞を活用した様々な実践を積み重ねる。

2つの視点にもとづいた今年度の実践は以下の通りである。

#### (1) 職員研修

本校では、NIEに初めて取り組む職員がほとんどであった。そこで、河北新報社に協力を頂きNIEについてのオリエンテーションを実施した。オリエ

ンテーションでは、新聞のつくり、記事の書き方と見出しの役割など「新聞の読み方」について教えていただいたり「5W1H探し」を実際に新聞を手にとって体験したりと、職員全員でNIEについての理解を深めることができた。

【NIE研修会 5月28日】



#### (2) 「NIEコーナー」の設置

児童の新聞への親しみを深め、興味関心を高めるために、1階図書コーナーの壁面を利用し「NIEコーナー」を設置した。



【NIEコーナー】

掲示板は、NIE担当職員が次のような記事を掲示し、児童の新聞へ興味関心を高めるようにした。

- ①季節や地域に関する記事
- ②児童の興味関心を高める特集
  - ・戦後70年特集
  - ・血液型特集
  - ・速く走るコツ特集 など
- ③「新聞タイム」で活用した児童のワークの提示  
(例)新聞タイムで作成した6年生児童の「お

すすめの記事とその紹介文」を掲示し、全校児童を対象に、どの記事がよかったのかを投票させた。

④本校または、本校児童を取り上げた記事



【戦後70年特集】



【6年生が選んだ「みんなに読んでもらいたい記事」】

N I Eコーナーには、休み時間や放課後に自然と児童が集まり、記事に向かう様子が見られるようになってきた。新聞への興味関心は、少しずつではあるが確実に高まってきているといえる。

また、③「新聞タイム」で活用した児童のワークの提示の実践は、N I Eコーナーを通して異学年の「児童の意見交換の場」につながる可能性を見ることができた。

### (3) 新聞タイムの実践

4～6年生を対象に、毎週金曜日の15:00～15:15を「新聞タイム」とし、新聞を活用した実践を積み上げた。

主な実践は以下の通りである。

- ・ みんなに読んでもらいたい記事
- ・ お気に入りの写真の紹介
- ・ 「かほくワークシート」の活用 など



【かほくワークシートの活用】



【お気に入りの記事の紹介】

### (4) 小学生新聞の購読

新聞の購読と共に、子ども新聞を2紙購読することにした。児童も理解しやすい内容で読みやすいこともあり休み時間や放課後に気軽に子ども新聞を手にとって読む姿がよく見られるようになってきた。



### (5) 授業における新聞の活用

本校は今年度より国語科を研究教科とし、『確かに読み取り、伝え合う児童の育成を目指して～国語科における「読むこと」の指導の工夫を通して』を研究主題に2か年計画で取り組んでいる。

N I Eについても、「N I E活用の工夫」として研究の視点に取り入れている。

#### ○6年 国語 単元名「町の幸福論」

##### ・ 単元について

本単元は、図や表などを用いて自分の考えを説明する方法を教科書「町の幸福論」から学び、そのことにもとづいて、自分で図表や資料を活用して自分たちの住む町の未来について発表することをねらいとしている。

##### ・ 「N I E活用の工夫」

街づくりのために地域の住民などが取り組んでいる様子を、新聞から見つけさせ掲示して読み合わせる。

##### ・ 活用してみて

どの新聞にも県内版があり、さまざまな地域での街づくりの様子について具体的に知ることができた。

### 3 次年度への課題

- N I Eを取り入れた学校カリキュラムの作成
- 無理のないN I E実践の体制作り
- インプット、アウトプットの場の充実

(担当 教諭 佐藤秀明)

## 考える力・表す力を高める N I E

### I はじめに

本校では、言語活動を通して「思考力・表現力」を高めたいと考え、研究を進めている。学習指導要領には「全教育活動を通して、言語活動の充実を目指すこと」が示されている。そこで、平成 27 年度から、N I E 実践指定校として新聞を活用する言語環境を整え全校で取り組むことにした。

### II 児童・保護者・教職員の実態調査

実践にあたって、新聞についてのアンケートを下記の通り実施した。

- (1) 期間 平成 27 年 4 月 9 日～17 日
- (2) 対象 本校児童 544 名  
本校児童保護者 517 名  
本校教職員 27 名
- (3) 方法 質問紙 (4 件法で分類)
- (4) 内容

- ① ニュースを知る方法
- ② 新聞に書いてあることは正しいか
- ③ 児童は新聞を読むほうか (児童・保護者のみ)
- ④ 新聞は役に立つと思うか (目的外使用を除く)
- ⑤ N I E に期待すること (保護者・教職員のみ)
- ⑥ 新聞を使ってやってみたいこと (児童のみ)
- ⑦ 新聞購読状況 (保護者のみ)
- ⑧ N I E についての経験 (教職員のみ)

### (5) 考察

- ① 新聞からニュースを知る割合は、教職員が約 7 割、保護者が約 5 割、児童は約 3 割であった。
- ② 情報を受け取る場合、メディア・リテラシー (情報を評価・識別する能力) が必要とされている。新聞に書いてあることは正しいと思う割合より、少し正しいと思う割合がやや多かった。
- ③ 児童は新聞を読んでいると約 6 割が回答したが、保護者は約 8 割が否定的であった。(図 1)
- ④ 新聞が役に立つことに、教職員は 100%、保護者は 89.1%、児童は 82.1% と肯定的だった。
- ⑤ N I E で児童に期待することは、社会への関心が 8 割以上と高く、保護者は「考える力」、教職員は「言葉を覚える」が高かった。
- ⑥ 新聞を使ってスクラップブックや写真図鑑を作

<アンケートの 1 項目>

- ・あなたは新聞を読むほうだと思いますか (児童)
  - ・お子さんはご家庭で新聞を読むほうだと思いますか (保護者)
- (単位: %)

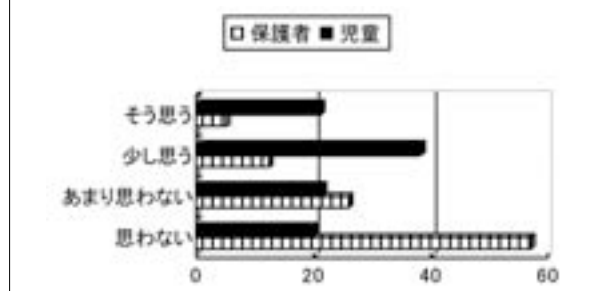


図1 「児童は新聞を読むほうか」のグラフ

りたいなど子どもらしい意見が書かれていた。

⑦新聞は、約半数の家庭で購読されていた。

⑧N I E については半数以上の教職員が未経験、あまり知らないことから研修の必要性が伺えた。

### III 実践の概要

#### (1) 環境づくり

##### 【N I E コーナー・ことばの貯金箱コーナー】

校舎 2 階中央階段の踊り場に、「N I E コーナー」と「ことばの貯金箱コーナー」を設定し、新聞を活用した作品や新聞に掲載された作品を紹介した。



#### (2) 教員研修

##### 【オリエンテーション】

4 月 2 日、N I E プロジェクト事務局の方 2 名を講師に研修会を開催した。「N I E とは」「新聞をいかに活用するか」など基本的なことを具体的に学ぶことができた。

##### 【現職教育：ワークショップ】

4 月 28 日、現職教育ワークショップを開催した。ことばの貯金箱を実践されている渡辺裕子先生を講師にお招きし、楽しく学ぶことができた。



### (3) N I EタイムとN I E週間

朝の活動の一部で、新聞を活用したスピーチを行うことで内容が深まったり質問が多く出たりした。また、12月には授業参観に合わせてN I E週間を設け、「ことばの貯金箱カード」を廊下に掲示したり「ことばのギフトカード」を地域の方や家族、七北田小学校の5年生に届けたりした。

### (4) 授業での新聞の活用

#### 【1年：学級活動「ニュースボックス」、「ことばの貯金箱」「ことばのギフトカード」】

新聞から写真や絵、文字を切り取って箱に貼り付けたり、ことばの貯金箱カードを作成したりした。また、昔あそびでお世話になった地域の方にギフトカードでお礼を伝えた。



#### 【2年：学級活動「N I Eシート」】

「スポーツ」や「食べ物」などテーマを決めて、新聞から写真やことばを切り抜いて考えたことを加えて発表した。



#### 【3年：学級活動「2学期の目標をつくろう」】

「人任せから卒業したい」という新聞の投書から、「〇〇からそつぎょうしたい」と自分の目標を考えた。



#### 【4年：国語「新聞をつくろう」】

6月29日、N I E事務局の方に「見出しの作り方や取材の仕方」などを教えていただき、グループで新聞づくりの計画を立てた。新聞づくりの基礎を学んだことで、取材への意欲が高まった。



#### 【5年：学級活動「ことばの貯金箱」、国語「新聞の読み比べをしよう」、社会「社会を変える情報」】

5月8日、渡辺裕子先生による「ことばの貯金箱」のご指導で、新聞に関心を持つ児童が増えた。応募した作品が掲載された児童もいた。6月には「新聞記事の読み比べ」、10月には「社会を変える情報」の授業で、新聞を活用する授業を行った。



#### 【6年：学級活動：「修学旅行新聞」、国語「投書を読み比べよう」】

5月18日、修学旅行前に河北新報社の方から「新聞記者の七つ道具や取材方法」などを教えていただいた。6月の修学旅行では、熱心にメモを取る姿が見られた。また、国語の時間に書いた投書を実際に投稿し、掲載された児童もいた。



#### 【わかくさ：社会「くらしと情報産業」、生活単元「言葉の貯金箱」】

「仙台うみの杜水族館」について、複数の新聞記事を比べたり、気に入った新聞記事を貼ってコメントを書いたりして、新聞に親しむことができた。

### IV 成果と次年度への課題

本校では、N I Eによって言葉への興味関心を高め、全校で新聞を活用した教育に取り組むようになったことが成果と考える。2015年N I E全国大会秋田大会のテーマは、「『問い』を育てるN I E～思考を深め、発信する子どもたち～」であった。次年度は、全学年の児童が日常的に楽しくN I E活動に取り組み、考えたことを発信していくことができるようにしていきたい。

(担当：菅原友子、根岸健太、佐藤佑紀)



## 未来を切り開いていく力を育むN I E

### 1 はじめに

本校では、言語活動の充実を図るとともに、社会への関心や情報活用能力を高め、児童自ら未来を切り開いていく力を育てていくことをねらいとして、全学年でN I Eの実践に取り組んでいる。

今年度は、校内研修でN I Eの実践例や「ことばの貯金箱」について学び、学年ごとに児童の実態に応じて、新聞活用学習、新聞機能学習、新聞制作学習等に取り組んだ。

### 2 実践の概要

#### (1) 新聞に親しむ環境整備

校内に新聞閲覧コーナーを設け、児童が自由に新聞を読めるようにした。新聞の整理は、広報委員会が担当した。また、古新聞コーナーを設置し、新聞を購読していない児童が自由に持ち出して使えるようにした。

また、N I E 掲示板を設け、新聞記事や新聞ワークシートなどを掲示した。七北田の地域や本校卒業生の羽生結弦選手に関する過去の新聞記事は、新聞記事データベースから検索して掲示した。



【新聞閲覧コーナー】



【古新聞コーナー】



【N I E 掲示板】

#### (2) 全校で取り組む「ことばの貯金箱」

本校では、新聞に親しみながら言語活動の充実を図る取組として、昨年度の2学期から「ことばの貯金箱」に全校で取り組んで



【和気あいあい校内研修】

いる。白鷗大学非常勤講師の渡辺裕子先生から校内研修で学んだことが本取組のきっかけとなり、今年度も校内研修を実施した。

実践にあたって、児童全員に専用のシールを貼った貯金箱を持たせた。また、国語の年間指導計画に位置付けて時数を確保し、新聞の切り抜きは朝のスキルタイムでも行っている。新聞に興味や関心を持つ児童が、確実に増えてきている。



【1年生の貯金箱】



【辞書で調べる6年生】

#### (3) 新聞記者による防災学習

本校では、毎年秋の土曜日に、七北田中学校や地域住民と共に防災訓練と防災学習を実施している。今年度は、5、6年生を対象にして、河北新報社デジタル推進室記者の大泉大介さんを講師として迎え、防

災学習を行った。

大泉さんから、東日本大震災の体験談や「震災アーカイブ」の取組について、新聞記事や写真等も資料としながら、具



【N I E防災学習】

体的で分かりやすい説明があった。新聞記者の説得力ある話を熱心に聞き、児童は自然災害や日常生活の在り方に再度目を向け、主体的に防災や減災について考えることができた。

#### (4) 新聞を丸ごと活用した国語の学習

新聞には、世の中の様々な新しい情報が日々掲載され、生きた教材として私たちの知の欲求を満たし、生活に役立っている。5年国語「新聞記事を読み比べよう」の単元では、こうした身近なメディアである新聞を取り上げ、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方や写真の役割などを理解し、二つの新聞記事を読み比べて書き手の意図を読み取ることをねらいとしている。



【新聞に目を通す5年生】

本時では、授業当日の新聞を児童に1部ずつ配付した。新聞探検や新聞の切り抜き活動を通して、新聞には報道記事のほか、社説やコラム、解説、投書など、いろいろな種類の文章が掲載されていることを確かめた。また、記事の書き方(5W1H)や新聞の構成(逆三角形型)、版の違いなどを理解した。

本実践を通して、児童は新聞についての理解を深め、国語の学習のねらいにせまることができた。

本実践を通して、児童は新聞についての理解を深め、国語の学習のねらいにせまることができた。

#### (5) 新聞印刷工場の見学

3年生は、社会「はたらく人とわたしたちのくらし」の学習の一環として、新聞印刷工場を見学した。

新聞社の仕事の概要について映像で学習した後、ガラス越しに夕刊印刷の様子を見たり、パネルなどの展示物を見たりした。児童は、ロール紙の大き



【印刷工場を見学する3年生】

さや高速で動く輪転機に目を奪われていた。最後に、印刷したばかりの夕刊を一人一部ずつ受け取ると、インクのおいを感じながら早速新聞に目を通していった。

#### (6) 新聞ワークシートを校長室ポストへ

N I E掲示板に新聞ワークシートを掲示していたところ、校長から「印刷して児童に取り組みさせてはどうか」という提案があった。



【新聞ワークシート】

早速、児童が持ち帰れるようにコピーを置き、記入したワークシートを入れるN I Eポストを校長室前に準備した。ワークシートは、定期的に新しいものを準備し、校長自ら採点し担任を通して返却している。



【N I Eポスト】

楽しそうに取り組む児童に触発され、自主的に取り組む児童が次第に増えてき

た。多い日には、20枚以上入っていたこともある。

難しい問題は友達同士で教え合ったり、家に持ち帰って親子で解いたりする姿も見られ、保護者のN I Eへの関心も高まっている。

### 3 次年度に向けて

次年度も、「ことばの貯金箱」や新聞ワークシートの取組を継続し、全校の児童が新聞を気軽に手に取り、新聞に無理なく親しめる環境を充実させていきたい。

また、新聞記事を様々な教科・領域の学習に有効活用することで、児童の問題意識を高め、自分で主体的に考え、友達と話し合ったり、発表し合ったりするような協働的な学習(アクティブ・ラーニング)につなげていきたいと考える。

(担当 教諭 今藤 正彦)

## 授業における N I E の活用

### I はじめに

大きく変化する地球環境のなか、我々は健康寿命の伸びを視野に入れながらも、国外では不安定な中東情勢、東アジア情勢等混沌とした世の中に生活している。

変革の中に生きる中学生に新聞を通して世の中の動きをしっかりと捉えさせ、自分の問題として社会を考えさせたい。1年目は新聞になじませ、2年目は新聞を活用する実践を行う。

### II 実践計画

#### 1 新聞の活用場面

- ・ N I E コーナーの設置
- ・ 新聞になじませる活動
- ・ 授業での新聞の活用  
社会科、国語科等での活用

#### 2 新聞購読

2015年10月から2016年2月までの4ヶ月間、6紙(読売、朝日、毎日、日経、産経、河北)を購読している。

### III 実践内容

#### 1 N I E コーナーの設置

新聞6紙は3階図書室にコーナーを設置し、自由に閲覧できるようにしており、毎日100人を超える生徒が利用する図書室で、生徒は昼休み等の休憩時間に新聞に親しんでいる。過去の新聞を取り出して記事を探す積極的な生徒もいる。新聞の番組欄や4コマ漫画、スポーツ面だけでなく、コラムや書評、投書を楽しみにして毎日読んでいる生徒も多い。

また、折り込み広告に興味を示す生徒もいる。



#### 2 新聞になじませる活動

図書館のコーナーだけでは、新聞を読む生徒が限られてくる。新聞を多くの生徒に親し



ませるために、1年生から3年までの12学級に毎日6紙ずつ新聞をおいた。図書館に置いてあった新聞かけを”今日は1年1組、次の日は1年2組”という具合に、教室の一面におき、一日中いつでも閲覧できるようにした。次の段階では、全学級で朝の会で新聞を活用した活動を考えている。

#### 3 授業での新聞の活用

##### (1) 新聞スクラップの実施 (社会科)

###### ア 目的

新聞になじませ、生徒に社会的事象を認識させ、主体的に判断する力を養わせる。

###### イ 目的設定の理由

新聞を身近に感じさせ、新聞の読み込みと話し合い活動ができる新聞スクラップづくりが最適であると考えた。

###### ウ 実践

- ・ 対象：2学年3学級 社会科地理的分野で
- ・ スクラップの大きさ：模造紙半分
- ・ スクラップの対象：12月1日～1月10日の6紙新聞記事

###### ・ スクラップへの記載事項：

記事3本、スクラップに適切な題名、作成者の氏名、使用した記事の新聞名と日付、記事それぞれに班としての意見や感想

- ・ 発表の形式：学級での発表と展示発表

###### ・ 授業計画：

1時間目 個人ごと三大ニュース選定

教室で6つの生活班ごと、それぞれに同じ日



付の6紙の新聞を配った。その中から自分が気に入ったニュースを理由付で選ばせ、学習プリントに記入させた。新聞を学校で初めて読んだ生徒もいるのでジャンルを絞らず、新聞に載っているものなら何でもいいという形で行った。その後、スクラップをつくるために気に入ったジャンルをアンケートに記入させた。

#### 2時間目 班ごとの三大ニュース選定

前時のアンケートを元に4人までの班をつくり、新しい班で三大ニュースを決めさせた。その記事を切り抜きスクラップを作成させた。

#### 3時間目 スクラップ作成

スクラップ作成の完成をめざして活動させた。

#### 4時間目 スクラップの活動まとめ

前半で各班ごとに完成したスクラップの趣旨



説明と感想発表を行い、後半に本学習のまとめをさせた。

### (2) コラムの読み取り (国語科)

ア 目的：

新聞記事のコラムを読んで、その内容を文章で表現させ、他の生徒に対し発表する力を付ける。

イ 対象：中学1年生4学級

ウ 実践：

新聞のコラムを印刷して生徒に配り、読みとった筆者の主張を書き出し、感想を記入するという活動をおこなった。その後、学級で書き出したプリントを読んで共有した。

### (3) 新聞記事を使った授業 (社会科)

ア 目的：新聞記事から社会の動きに触れ、興味関心を高める。

イ 対象：中学3年生4学級

ウ 実践

社会科公民的分野の学習でブラック企業や軽減税率等の新聞記事を OHP シートで映し



出し全員に読ませ、そこから授業を展開していった。それに対する感想を書かせ、発表させる活動も行った。

## IV 成果と課題

### (1) 成果

- ・活字と触れることで、生徒は目を輝かせ活動していた。
- ・生徒は情報を主体的に収集できた。
- ・新聞記事で比較しながらの検討ができた。
- ・スクラップの学習では、実践前後のアンケート結果より、新聞を身近に感じた生徒が増えたことがわかった。この活動を行うことで、「新聞をよく読んだら面白かった。家にある新聞を読んでおけば良かった。食わず嫌いだった。」等の感想があげられた。また、本校には社会事象に興味・関心が高い生徒が多く、「テレビやネットで耳にした事件を新聞で読むことで自分の力で情報を得ることができ、それについて考えることができた。今後新聞を読んで社会の動きを知りたい」という生徒も多かった。新聞になじませ、社会現象に目を向けさせる良いきっかけとなっていた。
- ・新聞を購読していない家庭も多く、手にする社会面の記事から自分の健康に思いをめぐらせるなど、新聞に触れることで実生活にも役立っていた。

### (2) 課題

- ・今後、新聞記事を使って思考させ言語表現させる授業の計画をたてる予定である。そのためには、十分な時間の確保が必要となる。
- ・各教科の年間指導計画に、短時間で有効な N I E 活動を位置づけられるような方法を模索したい。

(担当 教諭 菅原 恵)

## 宮城学院中学校における N I E 初年度の実践報告

### 1 はじめに

本校は、2015・2016 年度の宮城県 N I E 実践指定校となり、初年度の実践を行った。

本校では、これまでも図書館には新聞 4 紙(うち 1 紙は英字新聞)を常備し、休み時間や放課後などいつでも生徒が自由に新聞を閲覧できる環境を整えてきた。また年 13 回、「朝新聞」の取組を行ってきた。

朝新聞の取組とは、良い文章に触れ、語彙を増やすことを目的とするものである。生徒は教員が準備した新聞のコラムを筆写し、さらに辞書を用いて意味の分からない語句を調べ、そのコラムに相応しいタイトルをつけるという活動に取り組むものである。

さらに教科担当者によって、国語や社会、家庭科の授業において新聞を活用した取組などを行ってきた。

N I E 実践指定校の初年度である 2015 年度は、生徒にとって学校生活の中心となる教室に日常的に新聞があるという環境をつくり、これまで以上に新聞に親しむ機会をつくること、社会への興味関心をさらに高めること、を目標に掲げた。

そこで 9 月から 12 月までの 4 ヶ月間、6 社(河北新報、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞、日本経済新聞)の新聞を各クラスに 1 紙ずつ配付した。以下、初年度の実践について報告したい。

### 2 実践報告

#### (1) 各クラスへの新聞配付

各クラスに毎日 1 紙ずつ新聞を配付した。当然ながら全国紙や地方紙の違い、各新聞にはそれぞれの特色がある。そのためなるべく偏りがないように 1 週間ごとに配付する新聞を変えた。新聞は各教室の黒板の脇にある机の上に新聞用のボックスを用意し、その中に入れて生徒が休み時間に手にとって見やすいような環境づくりを心がけた。

また新聞はその日の新聞だけでなく、約 1 週間程度ボックスに入れておき何かと忙しい生徒も少し遡って新聞を読んだり、複数の生徒が同時に新聞に親しんだりすることができるように配慮した。

さらに 1 週間経った新聞も各クラスで保管をお願いした。後述するように各教科で新聞を活用した授業を展開する際に役立ててもらうことを想定してのことである。各家庭で新聞を購読していることが当たり前でなくなってきた状況の中で、クラス全体で新聞を活用して授業を展開しやすくする 1 つの材料になればと考えた。

生徒たちは最初のうちは新聞が教室にある環境に慣れないところがあったが、すぐに慣れ「今日の新聞は？」と生徒の方から催促する声も聞こえて来るようになった。

#### (2) 終礼時の新聞記事紹介

教室に新聞がある環境にも慣れてきた 10 月からは、終礼時に日直が新聞記事を発表する活動に取り組んだ。

(写真 1)



日直の生徒がそれぞれ自分の興味関心に沿って記事を選び、感想をまとめたシートをクラスで発表した。当初は1ヶ月ほど続け、さらに別の取組を行うことを考えていたが、回数を重ねるごとに新聞記事の紹介文や感想の書き方や発表の仕方などが上手になっていったことから、そのまま新聞記事紹介の活動を継続することにした。

1年生では生徒によっては、その日のうちに新聞に目を通し新聞記事を選んで発表の準備をする時間がなかなか確保できないという状況もあり、あらかじめ前日までに準備をして記事を紹介していた。またクラス担任によっては、生徒の紹介文や感想文に対して丁寧にコメントを寄せる取組を行い、生徒のモチベーションの向上につながったこともあった(写真1)。

### (3) 昇降口での新聞掲示

先述したように各クラスに新聞1紙を毎日配付したが、全国紙と地方紙の比較をすることで気がつくことも多い。そこで不定期ではあるが、生徒が毎日利用する昇降口に河北新報と朝日新聞の一面を掲示する取組を行った(教員室で購読している新聞を利用した。したがって生徒には前日の一面を次の日に掲示する形となった)。

2015年11月16日(月)の紙面のように、パリ同時多発テロについてどちらも取り上げた日(写真2)もあれば、2015年12月6日(日)のように、河北新報では仙台市の地下鉄東西線について、朝日新聞では戦後70年企画についてというように別な記事を取り上げた日(写真3)もある。地方紙と全国紙を読み比べることで、同じ出来事を多角的に考える目を養い、それぞれの新聞社の特徴に気がつくことを意図して記事を選び掲示した。

(写真2)



(写真3)



生徒たちがどの程度活用していたかはつかみきれないが、興味深く目を通して生徒の姿が報告されている。

### (4) 社会科授業での新聞記事の切り抜き活動

中学校3年生では、クラスに保管しておいた新聞を生徒に1部ずつ配付し、公民分野で学んだことに関係する記事を切り抜き、記事の紹介と感想や自分自身の考えを書き、それをグループごとに発表する授業を行った。

公民分野は地理分野や歴史分野と比べて実社会に直接つながる内容である。そのことを新聞記事との出会いを通して実感することが、知識としての理解にとどまらず、将来自分自身が社会に責任をもって主体的に関わっていくという自覚へつながるきっかけになればと考えている。

## 3 今後の課題

初年度は、教室に日常的に新聞がある環境に生徒が慣れることはもちろんのこと、教員も慣れるための1年であった。

2年目の2016年度は、学校行事との関係を考慮しながら年間計画の中で最大限に新聞活動を展開できるようにいろいろと工夫をしていきたい。

また学内だけの活動にとどまらず、新聞記事コンクールへの応募など学外の活動への積極的な参加や新聞スクラップなど家庭での実践につながるような働きかけにも取り組んでいきたい。

そのために教員集団の共通理解をさらに深めるための努力を継続していきたい。

(担当 教諭 丸山 仁)

## 高等学校における LHR、SHR での新聞の活用

～広い世界に自分を位置づけ、異なった意見を認め合い共に学び合う集団作りを目指して～

### 1. はじめに

平成 25、26 年度の 2 年間 N I E の研究協力校・実践校としての取り組みを受けて平成 27 年度の奨励校として、次の点をねらいとして実践を行った。

- (1) 高校へ進学したばかりの生徒に対して新聞の有用性を認知してもらい、有効に活用することで生徒たちの視野を広げ、社会と自分の関わりを明確にすることで、進路選択の幅を広げること
- (2) 新聞を活用する中で異なった互いの意見を認め合い、共に学び合う集団を作ること

昨年度までの 2 年間、協力校・実践校に指定していただき、高校 2、3 年生を対象とした新聞活用の方法を模索してきた。そこで、今年度は新入学の高校 1 年生を対象に、昨年度までの取り組みを踏襲する形で新聞を活用した取組の再スタートを切ることとした。

### 2. 奨励校としての取り組みについて

本校では新入学時は併設の中学から進級した生徒によるコースと、高校から入学した生徒によるコースの 2 コースに分けられる。ただし、新聞に対する親近感やその有用性への理解には大差はなく、高校 1 学年を大きな集団としてとらえた取組を展開することにした。一方で、高校 2 年生からは希望進路別にコースが編成され、生徒たちは職業観や勤労観を深めながら、志望大学・学部・学科をより明確にしていくなこととなる。そこで、高校 1 年生の間は、新聞に関して提供する話題も文理を横断するような内容を意識した。

#### (1) 新聞の配架

学年として、4 月当初より河北新報を各クラス 1 部ずつ配架した。最近では家庭で新聞を購読していない場合も多く、とにかく身近に新聞のある環境を整え、興味を持った段階で読んでもらう、ということ

を目的とした。河北新報は地元のニュースに厚く、例えば高校総体などの結果なども掲載されるため、生徒たちが手に取ってみようと思う可能性も高いと考えた。

9 月からは、N I E 奨励校として提供いただいた新聞各紙を、学年の廊下 3 ヶ所に設けた「N I E コーナー」に配架した。地方紙である河北新報と、提供いただいた全国紙の読み比べなどを掲示で推奨した。



#### (2) 朝自習での取り組み

4 月当初から各クラスに新聞を配架していたものの、与えたままになることは避けたいという思いがあった。そこで、学習との連動性を高めるために、小論文学習に向けた朝自習を始めることにした。これは、前年までの 2、3 年生に向けた取組 (小論文講習での使用) の前段階として、記事内容の要約や見出しを考えるなどの作業を、朝自習で取り組むこととしたものである。週に 1 回、毎週金曜日を「小論文の朝自習」の日と定め、新聞記事をもとにした課題に取り組んできた。課題選定の際に意識したのは、①記事が

どのような構成で書かれているか、②現代社会の課題を反映したものになっているか、という点である。復興に関するもの、地域格差を是正しようとする取組など、主に河北新報を使って可能な限り宮城、東北ならではの、という話題を提供してきた。実は、これは将来、県外の大学入試等で小論文を使うといった場合、その生徒のオリジナリティにつながるようなものを、という意識も働いている。

朝自習が定着してきたところで、12月以降は「リレーノート」の取組を始めた。これは、各クラスで6つのグループを組み、与えられた新聞記事に対して自身の意見を記入してグループ内を回す、という取組で、実施要領は以下の通りである。

### 高校1年生リレーノート

#### 【ねらい】

- 新聞記事を読むことで、社会に対して眼を開く。
- 自分なりの考え・意見を持ち、それを明確に表現する力を養う。
- 仲間の考え・意見を知ることで、物事を多角的に見る力を養う。
- 仲間の考え・意見を受け止め、建設的に議論を進める土台を養う。

#### 【実施手順】

※1クラスに6冊のノートを用意し、5~7人の1グループで1冊を使用。

1. 話題の元となる新聞記事を見開き左側のページに貼る。  
→はじめのうちは、教員が用意する。
2. 提示された新聞記事をよく読み、「記事選定者からの問い」に対する自分の考え・意見を右側のページに書く（サンプル参照）。  
→書く量は問わない。ただし、必ず記名すること。
3. グループ内でノートを回し、全員が必ず考え・意見を書くこと。毎週木曜日の朝までに組担任に提出。金曜日の朝に新しい記事が提示される。

※仲間の意見に対する意見や感想なども書いていきましょう。

→1人が1回しか書けないわけではありません。人の意見を見てどんどん書き込みをしよう。

この取組は、過去2年間の取組においても手応えのあったものである。新聞記事に対して単に自分の考えを述べるだけでなく、「他者の意見を読む」という作業が加わり、自論と比較することで、多角的な視

野を養うことができる。教員側の関わり方についても、原則はあるものの限定はしていない。ある教員は生徒各人の意見に対して疑問を投げかけて、考えを深めさせるようにしてみたり、またある教員は自身もリレーの中に参加することで、生徒とは違う視点や一歩先を見た考え方を提示したり、と各々の取り組み方で生徒に刺激を与えている。

### (3) 派生した取組

こうした単学年での取組のほか、個人的なものではあるが派生した取組が見られた。

まず、高校3年生理系コースの現代文において、小論文入試を見据え、新聞への投書をクラス全体で行う取組がなされた。実際に数名の生徒が掲載され、生徒にとっても自信になったようである。

また、将来医療関係の仕事に従事することを志望する生徒有志のグループでは、新聞記事から医療関係の記事をピックアップして、それをもとに議論を深める活動も行っている。

### 3. 今後の展望と課題

高校1年生を対象とした取組として、新聞への親近感を持たせること、記事から自分の主張を展開することについては、ある程度の到達が見られた。他方、今後の伸びしろとしては「課題発見能力」が挙げられるだろう。日々の記事に眼を通し、現在は教員から与えられるだけになっている「課題」を自ら考え、提案する能力が身につくよう、リレーノートの題となる記事やディスカッションのテーマの選定を生徒自身に任せてみたいと考えている。

### 4. まとめ

平成25年からの通算3年間の実践を通して、インターネットというツールが全盛の現代だからこそ、情報の出処を明確にしている新聞がいかに有用なものであるかが実感できた。スマートフォンをはじめとしたインターネットメディアの使用に長けた高校生こそ、新聞の有効な活用法を学ぶべきであるとも感じる。そうした点に気づき、その対策を考える機会を与えて頂き、また実践にお力添えを頂いた宮城県NIE事務局の方々に末筆ながら、この場をお借りして感謝申し上げます。

(担当 教諭 柴田隆一)



## 2 部会活動実践報告

### (1) 宮城県NIE推進委員会・小学校部会

## 平成 27 年度 小学校部会報告

仙台市立七北田小学校 教諭 今藤 正彦

### 1 NIE出前授業について

小学校部会では、5年国語「新聞記事を読み比べよう」の学習において、授業当日の新聞を児童全員に配り教材として活用することで、NIE活動の推進を図っている。

平成 25 年度に、小学校部会長の相澤経利校長が提案授業を行った。その指導案をもとに、平成 26 年度には、NIEアドバイザー 2 名が県内の部会運営委員を対象に示範授業を実施した。

### 2 今年度の取組

今年度は、県内 14 名の部会運営委員が、各勤務校で校内出前授業を実施した。授業者を支援するため、新聞代を小学校部会で負担した。また、指導案のデータや提案授業のDVD、「版」違いの新聞のカラーコピーを準備し、希望する授業者に提供した。

実施した学校は、下記のとおりである。

松ヶ浜小、吉岡小、入谷小、東四郎丸小、郡山小、松島第一小、多賀城東小、古川第二小、四郎丸小、片平丁小、高砂小、七北田小、上野山小、若林小

#### <成果> (事後アンケートから抜粋)

- ・一人一紙持たせることで、「自分だけの新聞」として自由に読んだり切り抜いたりすることができ、資料としてとても有効であった。
- ・児童全員が同じ新聞を使うことで、効果的に学習を進めることができた。
- ・版違いの新聞を提示したことで、児童の新聞への興味、関心がより向上した。
- ・「大人はどうして新聞を読むのか」について、児童は真剣に考えてノートに書くことができた。

#### <改善点> (第1回小学校部会の話し合いから)

- ・指導案の内容を吟味し、切り抜き2回のうち写真だけの切り抜きを割愛するなどして、時間に余裕を持たせるようにする。
- ・90分バージョンの他に、45分バージョンの指導案を作成し、各学校の実態に合わせてながら出前授業

を実施できるようにする。

- ・追加資料として、号外のカラーコピーと、板書の電子データ(投影用)を用意する。

### 3 次年度に向けて

今年度の出前授業の参観者は、合計 144 名となり、着実に実践の輪が広がっている。

次年度も、小学校部会として出前授業の取組を継続し、NIE活動のより一層の推進を図ってきたいと考える。

#### 【参考資料】「版」の違いは？

出前授業では、ソチ五輪開会を報じた一面を使い、時間を追って写真を差し替えていることに気付かせ、以下のように「版」の意味を説明している。

- ・13版…開会式会場の外の写真  
※宮城県以外の東北5県に届けるため、締め切りが早い。
- ・16版B…開会式開幕直前の写真
- ・16版C…開会式入場行進の写真  
※宮城県内や仙台市内は、配達時間から逆算して締め切りを遅くできる。



出前授業の様子(七北田小学校)



## 平成 27 年度中学校部会報告

仙台市立八木山中学校 教諭 石井 宜

### 1 長期休みはニュースを調べて感想を書く宿題

1年生の時から(夏・冬・春の)長期休みでは、社会科にふさわしいニュースを8~10個選んでその要旨を書き、そのうちの2~3個について感想を書くという宿題を課してきた。今年度の夏休みに3年生が選んだのは、1位:原爆の日(広島・長崎)、2位:川内原発再稼働、3位:戦後70周年談話の順だった。

### 2 新聞記事・特集・社説を取り入れて主権者を育てようとした公民的分野の実践

今夏の参議院議員選挙から18歳選挙権が実現する。そこで、3年後に主権者になる3年生が今まで以上に社会の出来事・問題(人権や政治、経済、国際など)に興味関心を持ち、自分で考えるようになってほしいと考え、様々なテーマについて新聞記事や特集・社説を取り上げながら、授業を進めた。

#### (1) 賛成派・反対派両方の主張を取り上げる

##### ①外国人参政権について

「民意のゲンバ『一票』に託せぬ外国人」(09年8月、河北)という特集と、「納得いかぬ地方参政権付与」(12年3月、産経)という投書を取り上げ、他国の例も参考にしながら考えさせた。

##### ②人権(環境権)と公共の福祉について

一審の横浜地裁と二審の東京高裁の判決結果を載せる一方で、「夜間飛行差し止め喜んでよいか疑問」(14年5月、読売)という投書も取り上げ人権と公共の福祉の関係の難しさに気付かせた。

##### ③川内原発の再稼働について

「電力安定供給へ重要な一歩だ」という見出しで再稼働を支持する読売の社説と、「展望なき回帰は許されない」という見出しで疑問を呈している河北の社説(ともに15年8月)を載せ、ワークシートを使ってその読み取りをさせたり、感想を書かせたりした。

#### 【生徒たちの感想】

・どちらの社説も同じ題材なのに、書き方によってこれほど賛成か反対かがはっきりと分かれ、書かれているのだなと思いました。この勉強で、私は、片方の文だけをそのまま何も考えずに読んでしま

うと「その意見が正しい。」という先入観を持ってしまったと思いました。だから、メディアリテラシーを身に付け、あまり先入観を持たないようにしたいです。

・自分の意見と新聞の意見が違っていると、「なるほど」と思うことがあるし、新聞によって違う意見があることによって、偏りがなくなるのかなと思いました。自分の意見を持つことも大事だけど、自分と違う意見を知ることも大事だと思いました。

#### (2) 1つの特集・社説から問題の本質に迫らせた

①「一人で100世帯もう限界 生活保護支援ケースワーカー悲鳴」(09年3月、読売)という記事から、受給者の孤独死に気付かなかつたり、不正受給を見逃してしまう原因を考えさせた。

②「若者よ選挙に行こう 投票しないと1人あたり4000万円損!?!」(09年8月、河北)という本の紹介記事を通して、若者が投票しないとなぜ損するのかということに気付かせた。

③「住民投票 議会制とどう折り合うか」という社説(01年7月、河北)を通して、住民投票権は重要な権利だが、その一方で議会軽視の方法だとの反対論もあることを紹介した。

#### 3 総合的な学習の時間などを使った労働法学習

3年計画で進めた労働法学習は、今年度は3時間しか実施できなかったが、そのうちの2時間は、新聞記事を使ってセクハラ・マタハラの問題について1時間ずつ考えさせた。

#### 【生徒たちの感想】

・今までセクハラだと思っていなかった発言も載っていて、基準が少し分からなくなった。しかし、新聞記事の資料から分かるように、誰かに相談することがまず大切で、その後もそれに対してしっかりと対応して、解決しなければならぬということがよく分かった。

・マタハラという言葉は知っていたが、意味を知らなかったの、知ることができて良かった。マタハラもセクハラと同じで、社会の問題になっているので、社会全体で取り組む必要があると思う。

## 平成 27 年度高等学校部会報告

宮城県水産高等学校 教諭 平居 高志

今年はいさだけ画期的な年になった。この数年、毎年、6月の総会と2月の実践報告会の時に、集まった数名の高校教員で、一度高校部会を開催したいという話をしていたが、ようやくそれが実現したのである。また、仙台市青陵中等教育学校の成果発表会である英語研修会も、高校部会の主催として行った。以下、その報告である。

### 1 高校部会研修会

11月27日(金)14:00から、河北新報社で開催した。

(内容)

・講話「新聞とネットと高校生」

(教育プロジェクト事務局長：砂金 慎 氏)

・河北新報社内見学

参加者は5名に止まったが、高校の職員室のような新聞製作の現場を見て歩くには、ほどよい人数だったようにも思う。微に入り細に入り質問しながら、役員室を除くほとんど全てを見せていただいた。はからずも、12月5日に行われた「第30回かほくN I E工房」では、泉区明通にある印刷所(河北新報印刷株式会社)で夕刊印刷の現場を見学したため、両方に参加すれば、約1週間の間に新聞製作の全課程を目の当たりに出来るという、貴重な機会となった。砂金氏による講話も、新聞作りの現場にいた人ならではの蘊蓄に満ちたもので、参加者一同得たものが大きかった。

ようやく実現した企画なので、内容を検討しながら何年か続けてみたい。

### 2 英語研修会

1月23日(土)13:00から、河北新報社で開催した。仙台青陵中等教育学校が2年間の実践校としての指定を終えるに当たり、2月の実践発表会(発表時間20分)では内容を尽くせないと、別枠で設定したものである。

(内容)

・実践報告「新聞を英語の授業に活用する」

(仙台中等教育学校英語科教諭：大槻 欣史 氏)

・講演「使える英語力を備えた人材の育成に向けて」  
(灘中・高等学校英語科教諭：木村 達哉 氏)

参加者は約30名。大槻先生の話は、英語科でのN I Eと言えば英字新聞という先入観を打ち壊すものであった。

木村先生のお話は、英会話が出来ようになるためには、正しい発音と単語の学習(瞬時に置き換え出来るレベル)が不可欠であると同時に、英語によって表現されるべき「自分の考え」の大切さを説くものだった。先生の生き様の面白さや、巧みな話術もあって、あっという間の2時間だった。

両先生の話ともに、英語科以外の教員にも聞いてほしい話だったと思う。

2回の研修会とも、終了後、場所を変えて懇親会を行った。高校部会研修会の方では、N I Eのあり方や推進委員会の果たすべき役割といったことも話題になった。

悲観的に聞こえるかも知れないが、その中で語られたことは、新聞を教育に取り入れる実践はたくさん行われているものの、それを組織的に行う必要性は感じられない、だから、推進委員会(高校部会)としてN I E活性化のために出来ることはないのではないか?ということだ。

確かに、その通りかも知れない。しかし、私はこの場があることによって、何人かの魅力的な先生に出会うことが出来た。教員だけではない。記者を始めとする、新聞関係者も含めてだ。新聞記事は内容的に幅が広く、それをネタに議論をすれば話も弾む。人と出会い、話をすれば、その中からN I Eに限らず、日々の教育実践のヒントと活力とが湧いてくる。

N I E推進委員会は不思議な組織だ。「官」であることによる保証と安心感がある一方で、河北新報社教育プロジェクト事務局が大きな役割を果たしていることに基づく、「民」の気楽さ、自由さを併せ持っている。そして、このことが推進委員会の魅力であると思う。そのような推進委員会(高校部会)の特長を知った上で、ぜひ、多くの方に参加し、利用してもらえれば、と思う。

### 3 大学からの報告

## 大学におけるN I E —驚きと発見を支援する—

東北福祉大学 特任准教授 堀江 謙一

#### 1 はじめに

今年度、東北福祉大学で「新聞の読み方」について毎月数回の講座を行いました。この講座はキャリアセンター主催で、これから就活していく学生に新聞の必要性を感じてもらうために開設しているものですが、この講座等から現在の大学生の新聞観というようなものが見えてきました。

#### 2 新聞を毎日読む学生はいない？！

年度当初にマネジメント学科3年の授業で「新聞についての調査」を実施したところ53名の回答を得ました。その調査で一番の驚いたのは、「過去1週間で新聞を読んだ日数は？」という問いに対して「毎日読む」と答えた学生は0名(!)だったことです。一番多く読んでいる学生の回答でさえ、「0~1日」の34名で「4日以上」は7名だけでした。また、「新聞を読む時間」で一番多かったのが「30分以内」の30名です。この調査から分かることは、今の大学生は1週間ほとんど新聞を読まないで過ごしているということになりそうです。それでは「何によってニュースを得ているか？」という問いでは、テレビとインターネットが多く、「今後、メディアの中で無いと生活できないものは？」という問いに一番多かったのは携帯スマホの45名でした。そして今後必要なメディアを3つあげてくださいという問いに対し新聞をあげた学生は残念ながら一人もおらず0名でした。小学校や中学校ではN I E教育がかなり認知され実践されてきたと思われませんが、この現状をみると大学生は大学に入るまでのどこかで新聞を置き去りにしてしまったような気がします。もしかしたら新聞そのものが近い将来に社会から見向きもされなくなるのでしょうか。しかし、各会社・企業では新聞は絶対的に必要な情報源として重要視され活用されています。そこで、大学生に新聞を読むことの大切さを理解してもらい、その活用を学ぶN I Eがより必要になっていると思います。

#### 3 新聞から驚きと発見を感じて学ぶ

「新聞の読み方講座」に集まった学生のほとんどは予想通り新聞を読んではいません。自宅から通っている学生でさえ、家で目の前に新聞があるのに手に取ることもないのです。そこで、この講座では新聞は面白く楽しいものだという感じてもらうことから始めます。最初に1枚の写真に写っている人物は誰か当ててもらいます。答えは27年4月夕刊に河北新報に掲載されたジョン万次郎の写真ですが、教科書で名前は知っていても写真で実物を見るのは初めてです。学生たちに少なからず驚きと興味が湧いてきているのを感じます。この驚きと興味・発見こそが学習の入り口に立つ最初の一步となり、次に万次郎がどんな人物でどんな生涯を送ったのかということは調査・学習になります。大学生はスマホを取り出しネットですぐに調べます。これであっという間に新聞活用の基本が出来上がりました。後は、自分で目ざとく大事な記事や興味のある記事を探せるかということになります。「新聞の読み方講座」では、ジョン万次郎から出発し、新聞について各ページの特色や記事の読み方等を丁寧に学びますが、最後に講座を受けた学生の誰もが「新聞が面白いということが良く分かりました。これから新聞を読みます！」と口を揃えて話してくれました。

#### 4 最後に

「講座」を開いて分かったことが一つあります。本当は学生たちは新聞の大切さを良く理解しているということです。新聞を読まないのは新聞への関心が全くないのではなく、きっかけがないのと時間に追われて余裕がないためです。少しでも新聞という知識の扉の前に立つように支援することが大切です。





## 4 その他の実践報告

### p4c による N I E 授業

仙台市立高森中学校 教諭 木下 晴子

#### 1 p4c とは何か。

philosophy for children 「子どもの哲学」の略で、アメリカで考案された教育手法である。生徒は毛糸のボールを作り、そのボールを回しながら円座になって対話する。話し合いのテーマも自分たちで決める。教師は、話し合いの方向を誘導したり正答を求めたりせず見守るだけである。対話にはいくつかのルールがあるが、重要なのは「ボールを持っている人だけが話せる」「ボールを持っている間は他の人はじっと待つ」そして「話されたことに否定しない」ことである。これにより安心感(セイフティ)が確立される。その教育的効果は、コミュニケーション力をつけるだけでなく、相互理解による学級づくりやアクティブラーニングの向上にもつながると期待されている。高森中学校では、宮城教育大学特任教授・庄子修先生、同堀越清治先生、東北福祉大学特任准教授・堀江謙一先生のご指導の下、1学年で授業を行った。指導案と新聞記事は堀江謙一先生から提供していただいたものである。

#### 2 N I E の授業と p4c の関わりについて

高森中学校の生徒は学習に対する向上心があり、やるべきことに真面目に取り組んでいる。しかし、思ったことを気軽に話したり、課題を深め発展させていこうとしたりする意欲はまだ十分ではないと感じられるため、「思考力」「表現力」を育てたいと考えている。p4c の理念である「セイフティ」は、安心して話すことができる雰囲気の中で、自分の考えをしっ

かり伝えることができ、お互いに理解し合い、生徒の実態や発達段階に応じた深め方ができるものと考えた。そしてN I E を p4c の手法で行うのは、これまでの新聞記事を読んで感想を述べ合うという授業から、自分から新聞記事よりテーマを決め、新たな展開の話合いによって、自由な思考力を引き出したいということである。また、ほとんどの家庭ではデリバリーで新聞を購入しているので、身近なところに新聞がある環境にある。授業では、道徳の時間で新聞記事の切り抜きや、国語で切り取った写真を説明することを行ってきた。

#### 3 授業実践(「ブーイング」)の内容

2015年10月19日、28日、30日に1時間ずつ、1学年全クラスで行った。

- 1時間目… p4c を説明した後に、自己紹介をしながら、コミュニティーボールづくりを行った。
- 2時間目… 「ブーイング」について〈資料①②〉の記事を読み、テーマ設定をして対話を行った。この日は大学の先生その他、N I E と p4c の授業ということで河北新報社の記者の方も来られた。以下が、各クラスのテーマである。

- |    |                        |
|----|------------------------|
| 1組 | された人、やった人の思い。          |
| 2組 | なぜブーイングは起きるのか。         |
| 3組 | なぜ記者はブーイングの記事をとりあげたのか。 |



生徒はブーイングを「されたら嫌な気持ちになる」「せっかく応援したのに負けて悔しいから言ったのだと思う」「悔しくても感情を抑えなければならない」「言った方も悔しい気持ちはなくなる」「プロの選手だから負けたときにブーイングをされても仕方がない」などの意見を出していた。対話では思い思いに考えを述べるので論理性はないが、総じて「ブーイングは見ていて気分の良いものではない」という視点からの発言・意見が多かった。

ブーイングは、相手チームにだけでなく自分が応援するチームにも向けられる。そこには好きだからこそ悔しさのあまり発露してしまう感情がある。チームを思うあまりの言葉ではあるがその品性に疑問を持たざるを得ない理由を考える1時間となった。3組では、その後に面白い展開を迎えた。3組の話し合いを参観した河北新報社の方が、この記事を書いた記者に問い合わせてくださった。そしてその記者から、手紙〈資料④〉をいただいた。「仙台市立高森中学校1年3組のみなさんへ」から始まる手紙に、生徒は非常に感動し、喜んでいて。このような交流はNIEならではのものであり、新聞と自分たちの距離が近くなったことを実感したできごとだった。

●3時間目… 〈資料③④〉の記事を読み、テーマを設定した。

- |    |                        |
|----|------------------------|
| 1組 | なぜ人は期間限定に弱いのか。         |
| 2組 | 言葉はどこまでが良くて、どこからが悪いのか。 |
| 3組 | なぜブーイングが悪いイメージなのか。     |

1組のテーマは思わぬ方向へ発展したが、2、3組では、ブーイングで使われる言葉の具体例、その言葉がかけられた人の心に与える影響などに対する意見が出た。④の記事は、堀江先生が授業日前々日に見つけてくださったものである。サポーターらの悔しさと今後への期待が述べられている。NIEの授業で



は、後追い記事により刻々と変化する状況をも授業に取り入れて考えや判断の材料にすることができると。今回もブーイングの記事から考えてきた人の気持ちの複雑さと共に、望ましい姿も最後に表れされていた。

#### 4 成果と今後の課題

p4cの授業後、アンケートを行った。結果は〈資料⑥〉のとおりである。

また、記述で多かったのは、

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・ボールを持っていると、なんとなく安心して、話しやすかった。</li><li>・(発表に)自信がないときは顔を上げられなくて発表しにくいけれど、ボールを持っていると顔を上げなくてすむので、発表しやすかった。</li><li>・何でも話していいと言われると逆に迷ったりしたけれど、みんなが話しているの、途中からは気持ちが楽になった。</li><li>・普段あまり発表しない人も、けっこう話していた。</li><li>・たくさん意見が聞けて、面白かった。</li><li>・みんないろいろ考えていてすごいと思った。</li><li>・楽しかった。時間があっという間だった。</li></ul> |
|--|

等であった。

1時間目のボールを作りながらの発表は、視線を定める必要もなく、一人言のような気持ちで話せるため、発表しやすかったようである。また、セーフティにより場の雰囲気が高く、今までより話したいという気持ちが強まったと思われる。しかし、グラフを見ると、意見を聞くことに躊躇しないが、話すことには積極的ではない。そこには、国語教育、学級づくりも含め、さまざまな要因があると思われる。今後の課題として、継続していきたいと考えている。

今回初めて行ったp4cの手法によるNIEの授業は、一つの新聞記事から様々な考え、発展につながることができた。自由な対話の必要性も痛感でき、NIEの授業の進化ともいえるものであった。また、NIEの授業において、アクティブラーニング的なp4cが有効に活用できることが分かった。

今後も継続して行い、生徒の変容を見ていきたいと考えている。

〈資料①〉



〈資料②〉



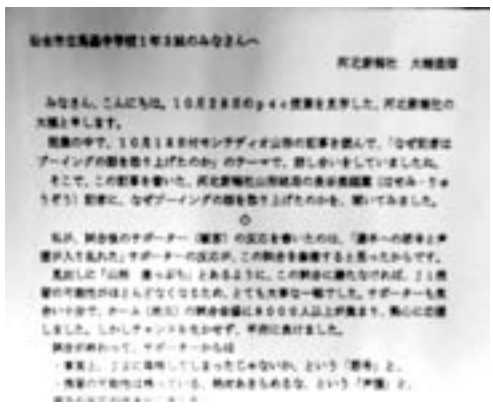
〈資料③〉



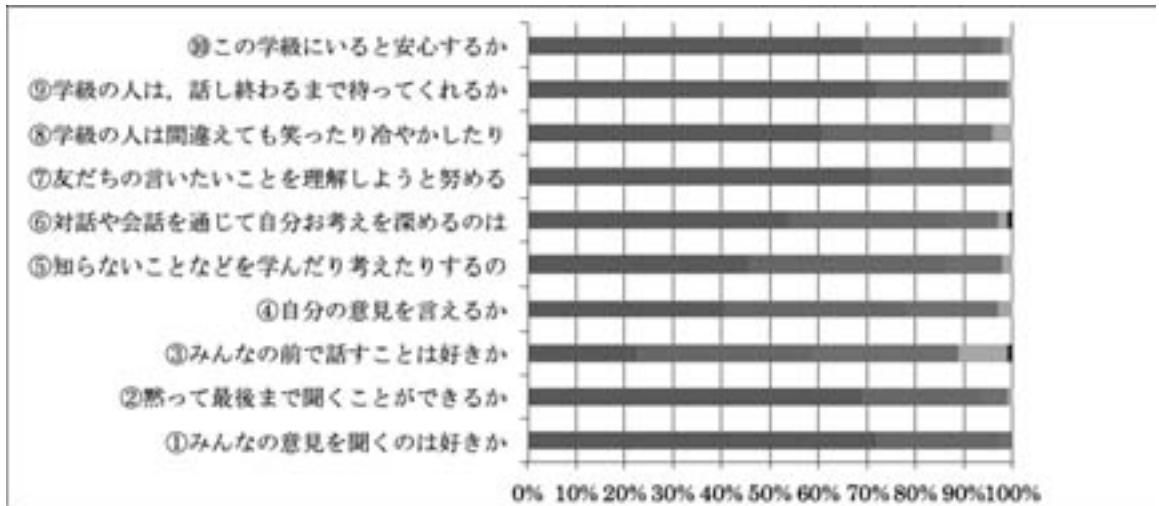
〈資料④〉



〈資料⑤〉



〈資料⑥〉



グラフ左から とてもそう思う → まあまあそう思う → あまりそう思わない → 全くそう思わない → 未記入



## p 4 c による N I E 授業

日 時 平成 27 年 10 月 19 日・28 日・30 日  
授業学校 仙台市立高森中学校 第 1 学年

- 1 主 題 名 「ブーイング」(他者への思いやり) 2 - (2)
- 2 資 料 河北新報 \* 「声の交差点」投稿より  
・「ブーイングは選手に失礼」② 「他者への思いやりを大切に」③  
\* 10 月 18 日朝刊「スポーツ面」 「山形崖っぷち」①  
\* 10 月 25 日朝刊「とうほく面」 「悔しい」④
- 3 ねらい (1) 「思いやり」の心は、自分が他者に能動的に接するときに必要な心の在り方である。昨今の「いじめ」問題により、子どもたちが他の人の立場を尊重し、親切心やいたわり励まず気持ちをしっかりと持つことの大切さが求められています。温かい人間関係とはどういうものかということ、中学 1 年生の時期にしっかりと身に着けるようにする。  
(2) p 4 c の授業により、生徒ひとりひとりが落ち着いて自分の意見を発表しあえる雰囲気では話し合えることができる。  
(3) 新聞の記事から大切だと思うことを読み取り、自分の考えを話すことができる。  
(4) 他の人の話をしっかりと受け入れて聞くことができる。  
(5) 新聞の投書内容から自分たちの学校生活を振り返り、友達とのかかわりや思いやりなどについて考えを深めることができる。
- 4 資料観 新聞の投書欄に掲載された小学生の意見②で、スポーツ観戦におけるブーイング①は失礼ではないかという疑問が寄せられた。プロスポーツでは応援するチームが負けた時などに時として観客のブーイングが起きるが、果たしてそれは選手への侮辱なのかどうか。そして、何のためにブーイングをするのかということをお互いに感想や意見を交換しながらブーイングの意味を考えてみたい。また、さらにブーイングは教室や部活、学校生活でも起きることがあるのだろうかということにも話題を広げ深く掘り下げたい。最後に③の意見を読み、思いやりを持った言動や行動はどうあればよいかということをお互いに分かり合えるような話し合いにしたい。
- 5 指導観 子どもたちにとっては p 4 c を使った授業は初めての経験となるので、対話による授業の基本をしっかりと学び、今後の様々な場面でも p 4 c 活用できるようにしたい。また、N I E の授業ということで新聞記事から何を読み取っていくかということの中 1 という発達段階も踏まえて目標設定し、できるだけ深く読み取って考え、そして自分の意見をまとめられることができるようにしたい。p 4 c の活用により N I E の授業でもアクティブラーニングがさらにスムーズに行えるようになるのではないかと期待をしたい。  
また、p 4 c における担任の役割は大変難しい面もあるが、子どもたちの意見をじれないうで待つということを担任自らが実践していくことが大事である。また、結論を見越して子どもたちの話し合いの方向性を誘導するようなことにも注意しなくてはならない。教師も子どもたちと一

緒に考え自分の考えを述べながら対話を深められるようにする。

- 6 指導計画 第1時 「コミュニテイボール」を作ろう  
 第2時 「ブーイング」とは何だろう？  
 第3時 「ブーイング」と「思いやり」

7 p 4 c p 4 cとは philosophy for children (子どもの哲学)の略です。哲学というと何かとても難しい印象がありますが、世の中のあらゆることに関していろいろな角度から考えて問題を明らかにしていこうということです。そこで、p 4 cでは「なぜ?」「どうして?」と不思議に思う気持ちを大切に、少しずつ掘り下げて考えていきます。そして、一番大切な事はp 4 cでは他者と疑問を共有しながら自分では気が付かなかった視点から物事を見て理解を深める「対話による探求」を行うことです。この授業では最初から結論は決まっていません。また、コミュニテイボールを持っている人しか話せないなど話し合いのルールがあります。それは安心して自分の意見を言えるセキュリティにもつながっています。

8 N I E N I E (エヌ・アイ・イー)は Newspaper in Education (教育に新聞を)の略です。教育の中で新聞を活用することによって、新しい発見や幅広い知識の獲得を目指すとともに、教材としての資料や話し合い活動の問題提起などにも活用されています。また、読解力や文章力を身に着ける学習にも大変効果的で、小・中・高はもちろん大学でも活用されています。

9 指導過程 第1時

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・評価
導入 10分	○今日の活動の説明 ・生徒は円になって座る。	○活動手順を全員が理解するようにする。
展開 30分	○コミュニテイボールを作る ・自己紹介等をしながら順番に制作する。	
終末 10分	○出来上がったコミュニテイボールについて確認	○コミュニテイボールについて理解する。

※ 第2時、第3時の指導過程については、誌面の都合上省略

## IV 研修会報告

### 1 宮城県N I E研究大会

#### (1) 大会の概要

事務局 齋藤 昭雄

平成27年12月2日(水)、仙台市立田子小学校を会場に宮城県N I E研究大会が開催された。例年より半月遅れの開催となったが、心配された寒さもそれほどではなく、約80名の参加者を得て盛会裡に終えることができた。

公開授業は、3年生「道徳」と5年生「国語」の2コマである。

3年生「道徳」では、導入時と終末時に新聞記事を活用した。3年生という発達段階をふまえ、主に新聞写真を使いながら、児童の興味・関心を高めていった。中心資料は副読本の資料「同じ仲間だから」であり、新聞記事は補助資料としての活用である。

5年生「国語」では、新聞を「言葉辞書」として活用した。新聞から切り抜き、集めてきた素敵な言葉(言葉貯金)の中から、「6年生に贈る自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉」を決める授業である。「オープンクエスチョン」という技を用い、どの児童も生き生きとペアトークを楽しむことができた。

授業後に行われた研究協議では、「授業のねらい」を明確にし、その達成のために新聞を効果的に使うことが大切であることが確認された。

公開講演では、宮城教育大学の児玉忠教授に、国語科におけるN I Eについて、分かりやすく解説していただいた。公開授業(5年:国語)を踏まえたお話は、これからの国語科のあり方を考える上で、大変参考になるものであった。



- |   |      |                                     |
|---|------|-------------------------------------|
| 1 | 日 時  | 平成27年12月2日(水)                       |
| 2 | 会 場  | 仙台市立田子小学校                           |
| 3 | 公開授業 | 14:00~                              |
|   | ○ 3年 | 道徳「同じ仲間だから」・・・・・・・・・・・・ 授業者 安倍 豊 教諭 |
|   | ○ 5年 | 国語「六年生におくる字をすいせんしよう」・・ 授業者 鈴木優太 教諭  |
| 4 | 全体会  | 15:00~                              |
|   |      | 公開授業についての研究協議                       |
|   |      | 全体講評(研究推進副委員長 相澤経利 氏)               |
| 5 | 公開講演 | 15:45~                              |
|   | 講師   | 児玉 忠 氏(宮城教育大学教授)                    |
|   | 演題   | 「新聞が育てることばの力」                       |
| 6 | 閉会行事 | 16:45~                              |
|   |      | 閉会の挨拶(仙台市立田子小学校 校長 佐々木友康 氏)         |

## (2) 3年道徳：学習指導案

# 第3学年 道徳学習指導案

日 時：平成27年12月2日（水）5校時

場 所：仙台市立田子小学校 生活科室

指導者：教諭 安倍 豊

- 1 主題名 「みんなで一緒に」 2-(3)信頼・友情  
2 資料名 「同じ仲間だから」 出典：文部科学省「わたしたちの道徳」小学校3・4年  
3 主題について

### (1) 指導内容と道徳的価値について

本題材は、小学校学習指導要領道徳の第3学年及び第4学年の内容2「主として他の人とのかかわりに関すること」の(3)「友達と互いに理解し、信頼し、助け合う」をねらいとしている。

中学年の発達段階においては、気の合う友達同士で仲間をつくり、友達と集団で活動することが盛んになる。自分の利害に基づいて衝突することも見られるようになる反面、相手の気持ちをより深く理解できるようになってくるため、温かい心を持つとともに、相手に対する思いやりの心を育てることが一層重要になる。相手の現在の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるように指導していくことが大切である。

友達同士が互いのことを理解し、助け合ったり、励まし合ったりしながら成長していくことができるような態度を育てたいと思い本主題を設定した。

### (2) 児童の実態について

本学級の児童は男子13名、女子17名、計30名である。明るく元気で、教室内の整理整頓や花壇の草花への水やりを進んでするなど素直で何事にも一生懸命に取り組んでいる。

日常生活では、外遊びをする児童が多く、休み時間になると校庭へ出てボール遊びや鬼ごっこ、縄跳び、竹馬、一輪車など体を動かして元気いっぱい遊んでいる。一方、遊び方やルール、言葉遣いなどが理由でトラブルになることがしばしば見られる。自分に都合悪くとも折り合いを付けて友達と関わるのが次第に見られるようになってきているが、自己中心的な言動をする児童がまだ見られる。友達についてのアンケート調査を実施したところ、次のような結果が得られた。

#### [友達についてのアンケート調査]

- |   |  |          |          |
|---|--|----------|----------|
| 1 | いつも友達と遊んでいますか<br>・ボール遊び ・鬼ごっこ ・遊具 ・お絵かき ・読書  | はい・・・28人 | いいえ・・・2人 |
| 2 | 友達といっしょにいと楽しいですか<br>・仲良く遊んでいるとき ・笑っているとき ・みんなで遊ぶとき   | はい・・・30人 | いいえ・・・0人 |
| 3 | 友達がいて良かったと思いますか<br>・一人で遊ぶより友達といっしょに遊んだ方が楽しい ・遊び相手がいないときさびしい  | はい・・・30人 | いいえ・・・0人 |
| 4 | 友達に助けてもらったことがありますか<br>・けがをした時に助けてくれた ・勉強を教えてもらった ・嫌なことがあったときに励ましてくれた                               | ある・・・20人 | ない・・・10人 |
| 5 | 友達を助けたことはありますか<br>・けがをした時に助けてあげた ・保健室に連れて行ってあげた ・忘れ物をした時に貸してあげた                                    | ある・・・15人 | ない・・・15人 |
| 6 | 友達の良いところを言えますか<br>・やさしい ・いろいろ教えてくれる ・楽しい ・そうじをがんばっている ・声を掛けてくれる<br>・正直なところ ・いっしょに遊んでくれる ・相談にのってくれる | はい・・・24人 | いいえ・・・6人 |

休み時間には、ほとんどの児童が友達と遊んで過ごしており、友達と一緒に過ごしていると楽しいと回答している。全ての児童が友達がいて良かったと考えており、友達の存在を認め、友達と関わることに抵抗が少ないことが分かった。友達に助けてもらった経験がある児童と友達を助けてあげたことがある児童とを比較すると、友達に助けてもらった意識の方が高いことが分かる。これは、友達を助けることは特別なことではなく、自然のこ

ととしてとらえているのではないかと考えられる。一方、友達の良いところを挙げさせる設問では、多数の児童が言えると答えた反面、答えられない児童も数名いた。これは友達の良いところを意識しながらの関わりが希薄なためではないかと考えられる。

### (3) 資料について

本資料は、文部科学省発行の「わたしたちの道徳（小学校3・4年）」に掲載されている読み物資料である。運動会の「台風の日」に取り組むことになったが、同じグループの光夫は運動が苦手である。ある日、教室に入ってきた光夫の指に包帯が巻いてあるのを見て、同じグループのひろしは光夫に体育を休んだ方がいいと主張する。そんなひろしの言葉を聞き、とも子は返事に困ってしまう。しかし、転校したよし子の手紙を思い出し、「光夫さんを外して勝とうとするなんておかしいと思うの。」と厳しく、はっきりと言う。このことをきっかけに、燎人が心一つにして練習に励むという内容である。友達の身になって考えることの大切さや、考えが違っていても友達のためだと思えることははっきりと伝えることで相手にもその思いが伝わり、信頼や友情が育まれることを深く考えさせ、道徳的実践力の育成を図りたい。

### (4) 指導の方向「指導に当たって」

主たる登場人物である「とも子」の気持ちに迫ることで、友達を大切にすることについて考えさせていく。

児童への資料の提示は、児童一人一人がじっくりと資料の内容をつかむことができるように教師が範読する。とも子の心の葛藤や心境の変化といった重要な場面では、間を開けるなど児童が話の流れや登場人物の心情の変化に気付くことができるようにする。児童一人一人が友達を理解し、信頼し、助け合うことの大切さに気付き、関わっていくことができるようにしていきたい。

## 4 NIEとの関連について

### (1) 新聞と児童とのかかわりについて

本学級において、新聞を購読している家庭は半数以下である。新聞に触れる機会が少ない児童にとっては新聞への関心が必ずしも高いとはいえない。しかし、教室内に新聞を置いておくなど、いつでも新聞が読めるようにしておくとし、休み時間に新聞を読んでいる児童が見られる。

### (2) 教育活動におけるこれまでの新聞活用について

学習指導に関して、国語で学習した作品の著者や作者に関する記事を取り上げ、関心を高めたり理解を深めたりすることなど間接的に新聞記事を活用した。

学級活動では、朝の会において担任が新聞記事を取り上げたり、スピーチタイムで新聞記事を紹介したりするなど、新聞に関わる時間を増やすように意識して取り組んでいる。特に新聞記事紹介のスピーチについては児童が意欲的に取り組んでいる。また、「ことばの貯金箱」に取り組み、新聞への興味・関心を高めた。新聞記事から心に残る言葉や印象に残った写真を自由に貼り、自分の思いを表した。

### (3) 本時における新聞記事資料の位置付け及びねらいについて

本時の学習では、新聞記事を活用し、道徳的価値への関心を更に高める。新聞記事、特に写真から写っている人たちの気持ちや思いを考えさせることで、友達との友情の大切さに気付き、互いに信頼する気持ちを持つことができるようにする。なお、新聞記事については、児童の発達段階を考慮すると、内容を全て読み取らせることは難しいため、写真を中心に写っている人の会話や気持ちを想像して吹き出しに書かせたり、記事中の言葉を取り上げたりしながら「友情、信頼」という価値に迫っていく。

## 5 ねらい

友達の身になって考え、互いに理解し合い、友達を大切にしようとする態度を育てる。

## 6 指導過程

階段	学習活動 ◇主な発問	○予想される児童の反応	※指導上の留意点
導入 (気付く)	<p><b>1 新聞記事(写真)を見て話し合う。</b></p> <p>◇これはどのような場面の写真ですか。</p> <p>◇写真の子供たちはどんな気持ちで走っているか想像する。</p>	<p>○運動会の写真。</p> <p>○みんな真剣に走っている。</p> <p>○がんばろう。</p> <p>○勝ちたい。</p> <p>○1位になりたい。</p>	<p><b>NIE</b></p> <p>導入時に本時の学習意欲(興味・関心)を高めるため、運動会に関する新聞記事を活用する。①写真→②写真+記事</p>



			※新聞記事（写真）を提示し、運動会では誰でも「勝ちたい」「1位になりたい」という気持ちを持っていることを確認して資料に入る。
展開（見つめる）	<p><b>2 資料「同じ仲間だから」を読んで話し合う。</b></p> <p>◇「ぼくたちのグループには、光夫君がいるんだものな。」ひろしに不満そうに言われたとき、とも子は、どのようなことを思ったか。</p> <p>「そうかい。でも休んだ方がいいんじゃないか。ともちゃん。」と言われたとき、とも子はどのようなことを思ったか。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>◇とも子が「光夫さんを外して勝とうとするなんてまちがっていると思うの。」とどんな思いで言ったのか</p> </div> <p>◇「台風の日」をしているとも子、光夫、ひろしはどんな気持ちなのでしょうか。</p>	<p>○光夫さんがいると二組は勝てないのかな。</p> <p>○勝ちたいな。</p> <p>○光夫さんも頑張っているのにかわいそう。</p> <p>○光夫さんが大丈夫だと言っているのに。</p> <p>○無理矢理休ませるのはいけない。</p> <p>○光夫さんが休めば勝てるかもしれない。</p> <p>○転校したよし子からの手紙を読んだときのことを思い出してはっとしたから。</p> <p>○少しぐらい違っていても仲間外れにするのはおかしい。</p> <p>○わたしたちも光夫さんに同じことをしているのかもしれない。</p> <p>○でも、運動会では勝ちたい。</p> <p>○光夫さんを仲間外れにしないで良かった。（ひろし）</p> <p>○仲間外れにしていたら光夫さんは悲しかったらろうな。（とも子）</p> <p>○みんなと一緒にできてうれしい。（光夫）</p>	<p>※教師が資料「同じ仲間だから」を読む。児童は挿絵を見ながら聞く。</p> <p>※資料中の登場人物（ひろし、とも子）も同じ気持ち（勝ちたい）であることを確認するとともに、これでいいのかという相反する気持ちにも気付かせる。</p> <p>※仲間外れはいけないという気持ちと、でも勝ちたいという気持ちについて意見交換しながら考えさせる。</p> <p>※相手の身になって考え、互いに理解し、信頼することが大切だということを考えさせる。仲間外れはいけない。</p> <p>※運動会で競技をする挿絵を見て、3人の気持ちを考える。</p>
終末（深める）	<p><b>3 新聞記事・写真を見て考える。（ワークシート）</b></p> <p>◇これはどのような場面の写真ですか。</p> <p>◇写真を見て感じたことを発表しましょう。</p>	<p>○運動会の写真。</p> <p>○大人もいっしょに走っている。</p> <p>○楽しそうに走っている。</p> <p>○閉校してしまうのになぜ楽しそうに走っているの</p>	<p>※中野小最後の運動会の記事を使用し、信頼・友情の大切さについて考えを深める。</p>

(高める)	<p>◇走っている人たちの写真を見て何と言っているのかワークシートに書きましょう。</p> <p>・田子小学校の運動会の写真を見る。</p>	<p>かな。</p> <p>○勝つことより大切なことがあるんだね。</p> <p>○運動会ができてよかったね。</p> <p>○みんなありがとう。</p> <p>○これからも仲良くしようね。</p> <p>○運動会の際の写真だ。</p> <p>○みんなで頑張ったね。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>N I E</b></p> <p>報道写真を見せることで、みんなでやりとげることの素晴らしさやできた時の喜びを感じ取り、今後の生活に夢や希望を持たせる。</p> </div> <p>※自分の経験を思い出したり学習内容と照らし合わせたりし、信頼・友情の大切さについての意識を更に高める。</p>
-------	--	---	---

## 7 評価

友達の身になって考え、互いに理解し合い、友達を大切にしようとする気持ちを持つことができたか。(発言、表情、ワークシート)

## 8 板書計画

写 真

中野小学校最後の運動会

「台風の目」をいっしょにやっているとときの気持ち。

「光夫さんを外して勝とうとするなんてまちがって勝ちたい」

・無理矢理休ませるのはいけない。  
光夫さんがかわいそう

・光夫さんが休めば勝てるかもしれない。

「そうかい。でも、休んだ方がいいんじゃないか。ともちゃんどう思う。」

「ぼくたちのグループには、光夫君がいるんだものな。」

写 真

見出し

見出し

ひろし

光夫

とも子

## 9 準備物

- ・ 新聞記事 (写真)
- ・ 挿絵
- ・ ワークシート

### (3) 5年国語：学習指導案

## 第5学年 国語科学習指導案

日 時：平成27年12月2日（水）5校時

場 所：仙台市立田子小学校 5年2組教室

指導者：教諭 鈴木 優太

### 1 単元名 「6年生に贈る言葉を推薦しよう」

### 2 単元の目標

- ・ 聞き手が納得するように、話の構成を工夫して推薦することができる。
- ・ 話し手の意図をとらえて、納得できるか考えながら聞くことができる。

### 3 評価規準

- 6年生に贈る言葉を推薦し合って決めることに関心を持ち、聞き手が納得するように構成を工夫して話そうとしている。 【関心・意欲・態度】
- 推薦する理由と言葉の知識や情報を関係づけて話すことができる。 【A話す・聞く（1）ア】
- ◎ 6年生に贈る言葉としてふさわしいことが伝わるよう、構成を工夫して話すことができる。 【A話す・聞く（1）イ】
- ◎ 友達が伝えようとしている言葉の良さを考えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめることができる。 【A話す・聞く（1）エ】
- 比喩や反復などの表現の工夫に気付き、自分の表現に活用できる。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（1）イ（ケ）】

### 4 単元について

#### (1) 教材観

本単元は、話す・聞く領域「話す」系統の単元である。「話す」系統では、相手や目的に応じた話の組み立てや話し方について学び、分かりやすく話して伝える力を身に付けることを目指している。これまでに児童は、聞き手に対して説得力のある理由を考えて話したり、理由に気をつけながら人の意見を聞いたりすることを学習してきた。

それを踏まえ、本単元では、自分が選んだ言葉(漢字・単語・文章)を推薦するスピーチをする活動を通して、聞き手が納得できるように構成を工夫して話すことと、話し手が伝えたい良さに納得できるか考えながら聞くことをねらいとしている。

最高学年になるという自覚が芽生え始めてきているこの時期の5年生にとって、卒業を控えた6年生に言葉をプレゼントする活動は、言語活動に意欲的に取り組むことが期待できる教材であると考えられる。

#### (2) 児童観

本学級は、男子15名、女子13名、計28名である。転入による児童数の増加に伴い、1学期末に2クラスから3クラスへクラス替えを行った。いちょう発表会、就学時健診のお世話といった学校行事の経験も経て、いよいよ最高学年になるという自覚が少しずつ芽生え始めてきている。

平成27年度仙台市標準学力検査および仙台市生活・学習状況調査の結果から、人前で発表することに苦手意識を持っている児童が少なくない傾向が見られた。経験や語彙が乏しく、自分の思っていることを上手く言い表す言葉がとっさに出てこないのが、ペアで対話する機会や、相互フィードバックし合う活動、少人数での意見の伝え合いを教科を問わず積み重ね、経験と自信と教室の仲間との信頼関係を育むように努めてきた。11月11日(水)仙小教研特別活動部会の研究授業において学級会を公開した。事前の活動では、ペアトークを経

て、学級会ノートに理由の根拠となるエピソードを書き出す活動を行った。当日、50名もの先生方が見守る中だったが、28名全員が、エピソードを交えながら自分の意見を発表することができた。学級会の一連の活動の中で、「エピソードまで語ると説得力が増す」というスピーチの技術にも気付くことができた。

### (3) 指導観

聞き手が納得できるように「エピソード」まで話すことと、話し手なりの「エピソード」に共感しながら聞くことをねらいとする。

経験や語彙が乏しい子供たちにとって、新聞は、素敵な言葉が散りばめられた言葉の宝箱と言い換えられるだろう。『言葉貯金』として新聞から切り抜き集めてきた素敵な言葉の中から、「6年生に贈る自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉」を選ぶ。そして、聞き手を意識して、私にしか語れない「エピソード」と関連づけた話ができるように支援したいと考える。

本時の導入では、6年生へ言葉（漢字・単語・文章）を推薦する目的を確認する。6年生が活躍している写真（1年生のお世話、運動会、委員会活動、いちよう発表会…）を示しながら教師が語り、意欲を高めたいと考える。

展開では、はじめに、6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から選び、カードに書く。「エピソード」を関連づけてスピーチできる言葉を選ぶことができるように声掛けし、6年生に贈る言葉を決める際の仲間との対話も奨励したい。また、二つの言葉を一つに合体させたものや、『言葉貯金』していなかった言葉を書き足しても良いことも伝え、児童が自由に表現できるように支援したい。

次に、パートナーから聴き出したことをミニホワイトボードにメモしながらペアトークを行う。「友達に質問されると話せた。」という児童も多く、教室で多用している手法である。「オープンクエスチョン」は、「はい、いいえ」などの回答範囲を設けずに、相手が自由に返答できる質問である。相手からより多くの情報を引き出したい場面で有効とされる質問の技である。「オープンクエスチョン」を提示することで、聞き手はまずは型に沿って聞いていけば良いという思いから質問することへのハードルが下がる。また、話し手も次にくるであろう質問への見通しを持てるので、話すことへのハードルが下がる。一つの型であるが、教室の全員が共有していることによって安心して聞く・話すことができるという手応えを感じている。ペアで行うため、聞く経験と話す経験も効率よく積み重ねることができる。

そして、ペアでのスピーチ練習を行う。ミニホワイトボードの「ペアトークメモ」を見ながら話しても良いことを伝える。最終的には何も見ないで話せるようになることを目指したい。「エピソード」を交えたスピーチがうまくできない児童が見られた場合には、ペアトークをもう1度行い、「ミニホワイトボードメモ」をパートナーに書き足してもらっても良いことを伝える。友達のエピソードを参考にしても良いことを伝えたり、必要であれば、教師がエピソードを聴き出したりしたいと考えている。ペアでのスピーチ練習では、聞き手は話し手へ必ずフィードバックを贈るようにさせる。また、そのフィードバックに対するフィードバックも返す。言いつ放し、言われっ放しにならないように、双方向性のコミュニケーションを大切にしながら指導に当たりたい。

終末では、振り返りを書く。次時でスピーチをブラッシュアップしていくことを伝え、本時を締めくくる。

## 5 NIEとの関連について

### (1) 新聞と児童とのかかわりについて

本学級において、新聞を家庭で購読している児童は9名である。新聞に触れる機会が少ない児童にとっては、新聞への関心が必ずしも高いとは言えない。しかし、『新聞読み取りワーク』や『言葉の貯金箱』といった学習活動にはとても意欲的に取り組んでいた。また、教室内に新聞を置いておくなど、いつでも新聞が読めるようにしておく、休み時間に手に取って読んでいる児童も見られた。

### (2) 教育活動におけるこれまでの新聞活用について

学習指導に関して、国語では、6月上旬に『新聞記事を読み比べよう』の学習を行った。河北新報、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞など、各社の同じ日の一面記事の読み比べや、同じ出来事の扱い方（見出し、写真、記事…）の比較を実際に新聞を手に取りながら行い、書き手の意図について話し合う学習を行った。また、『新聞読み取りワーク』を自作し、新聞記事を文章読解トレーニングの教材として活用する試みを行った。また、

新聞記事を読んで考えたことを書く作文指導の教材として活用したり、道徳の資料として活用したりもしてきた。図工では『言葉の貯金箱』に取り組んだ。新聞記事から、素敵だと思った言葉を自由に切り抜いてカードに貼り、自分の思いを表現し、交流を行った。

学級活動では、朝の会で、ペアトークの時間を毎日設けている。担任が新聞記事を紹介し、そのことについて自分が考えていることをペアで聴き合ったり、意見を交流し合ったりするなど、新聞に関わる時間を増やすように意識して取り組んでいる。また、新聞記事から考えたことをまとめるなどの家庭での自主学習に取り組んできた児童のノートを、教室の『価値モデルギャラリー』に掲示し、積極的に紹介した。おたよりに掲載したり、実物投影機でテレビ画面に映し出したりして共有し合い、それについてどう思うかと、ペアやグループや教室全体で話し合いを持つことも行ってきた。

### (3) 本時における新聞記事資料の位置付け及びねらいについて

新聞を「言葉辞書」として活用する。『言葉貯金』として、新聞から切り抜き集めてきた素敵な言葉の中から、「6年生に贈る自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉」を決める。

## 6 単元の指導と評価の計画（5時間扱い 本時2／5）

時	主な児童の活動	指導上の留意点	評価規準
1	1 学習の見通しを立てる	・卒業する6年生にふさわしい言葉をスピーチで推薦し合う学習課題をつかむ。	【関】6年生に贈る言葉をスピーチで推薦し合うことに意欲を持って取り組もうとしている。(行動観察・発言)
2 ・ 3	2 ※本時 3 スピーチの準備をする	・6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決める。 ・推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をする。	【話聞】6年生に贈るのにふさわしい言葉であることが伝わるように、エピソードを関連づけ、話の構成を工夫している。(行動観察・メモ・スピーチ原稿)
4 ・ 5	4 言葉を推薦するスピーチをして、互いに聴き合う。 5 単元のねらいが達成できたか振り返る。	・推薦する言葉の良さが伝わるように話せたか、聞けたかを振り返る。	【話聞】良さが伝わるように構成を工夫して話したり、友達の考えに納得できるか考えながら聞いたりしている。(スピーチ・行動観察・ノート) 【言】表現の工夫に気付き、自分の表現に活用している。(スピーチ原稿・スピーチ)

## 7 本時の指導計画

### (1) 本時のねらい

・6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決め、推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をする。

### (2) 準備物

言葉貯金 カード ミニホワイトボード ホワイトボード用マーカー 6年生の写真  
めあて掲示物 オープンクエスチョン掲示物 推薦する時の決めゼリフ掲示物

### (3) 指導過程 → 次頁参照



(3) 指導過程

主な学習活動	予想される児童の反応	・指導上の留意点◆評価規準（方法）
<p>1 めあての確認(5分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決め、推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をする。</p> </div>		<p>・6年生へ言葉(漢字・単語・文章)を推薦する目的を写真を示しながら教師が語り、意欲を一層高める。</p>
<p>2 6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決めて、カードに書く。(10分)</p>		<p>・「エピソード」を関連づけてスピーチでできる言葉を選ぶことができるように声掛けする。</p> <p>・6年生に贈る言葉を決める際の仲間との対話を奨励する。</p> <p>・『言葉貯金』以外の言葉をカードに書き足しても良いことを伝える。</p>
<p>3 パートナーから聴き出したことをミニホワイトボードにメモしながらペアトークを行う。(10分)</p>	<p>A「選んだ言葉を教えてください。」</p> <p>B「感動のサポートです。」</p> <p>A「というと？」</p> <p>B「6年生は、この田子小を支えてくれるサポーターだと思っています。」</p> <p>A「エピソードを教えてください。」</p> <p>B「私はいちょう発表会で6年生といっしょに照明係の仕事に取り組みました。その時、ライトが付かないというハプニングがあったのですが…」</p>	<p>・質問の技「オープンクエスチョン」を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>質問の技 ～オープンクエスチョン～</p> <p>①～というと？</p> <p>②どんな感じ？</p> <p>③もう少し詳しく教えてください</p> <p>4たとえば？</p> <p>5具体的にどんな感じ？</p> <p>6どんなイメージ？</p> <p>⑦エピソードを教えてください</p> <p>8なんでもいいですよ</p> <p>9ほかには？</p> </div> <p>・教師が指名した児童がモデルとなり、はじめにやり方を示す。</p>
<p>4 スピーチ練習を行う。(15分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>～推薦する時の決めゼリフ～</p> <p>①ぴったり</p> <p>②まさに</p> <p>③しかありません</p> </div>	<p>B「私が推薦するのは、感動のサポートです。田子小を支えてくれた6年生にぴったりの言葉だと思います。いちょう発表会で…慌てる私とは違い、6年生の〇〇さんは落ち着いていました。電球を交換し何事もなかったように1年生の演技が終わりました。大きな拍手に包まれた体育館。〇〇さんはまさに感動のサポートをやり遂げていました。推薦する言葉はこれしかありません。」</p>	<p>・ミニホワイトボードの「ペアトークメモ」を見ながら話しても良いことを伝える。</p> <p>・「エピソード」を交えたスピーチがうまくできない児童は、ペアトークをもう1度行い、「ミニホワイトボードメモ」をパートナーに書き足してもらっても良いことを伝える。</p> <p>・聞き手は話し手へ必ずフィードバックを贈る。また、そのフィードバックに対するフィードバックも返す。言いつ放し、言われっ放しにならないようにさせる。</p> <p>◆6年生に贈る自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉であることが伝わるように、エピソードを関連づけた話の構成を工夫している。(行動観察・スピーチ)【話す・聞く】</p>

5 振り返りを書く(5分)		
6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決め、推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をすることができましたか。		

(4) 評価

本時の評価規準	○6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決め、推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をしている。(行動観察・スピーチ)
十分満足できると判断される児童の姿	○6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決め、推薦理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチを、スピーチメモを見ないでできている。(行動観察・スピーチ)
支援が必要と判断される児童	友達のエピソードを参考にしても良いことを伝えたり、教師がエピソードを児童への手立てき出したりする。

(5) 板書計画

スピーチ練習をペアで行う。(15分)

すいせんする時の決めゼリフ

①すいせんするのは です。

② にぴったりです。

③まさに です。

ミニホワイトボードにメモしながらペアトークを行う。(10分)

質問の技 オープンクエスチョン

① というと

② どんな感じ

③ もう少し詳しく教えてください

たとえば

具体的にどんな感じ

どんなイメージ

④ エピソードを教えてください

なんでもいいですよ

ほかには

② すいせん理由の根拠となる「エピソード」を交えたスピーチ練習をする。

① 6年生に贈る言葉を『言葉貯金』の中から決めてカードに書く。(10分)

6年生におくる言葉をすいせんしよう

#### (4) 公開授業の様子

##### 第3学年道徳「同じ仲間だから」



##### 第5学年国語「六年生におくる字をすいせんしよう」



## (5) 全体会の記録



### 1 開会のあいさつ

宮城県NIE推進委員長 佐藤一浩 氏

### 2 授業検討会

#### <自評>

#### ① 阿部 豊 教諭 (3年)

- ・本時の授業は、「信頼・友情」をテーマにしたものである。
- ・新聞については、「導入時」と「終末時」に活用を図った。補助資料として扱い、道徳的価値の深化をねらった。
- ・新聞記事のインタビューにある子どもの「ことば」を大切に、信頼・友情を深く感じられるようにしたかった。

#### ② 鈴木優太 教諭 (5年)

- ・5年生とはいえ、子供たちは経験が乏しくボキャブラリーも少ない。そうした実態を踏まえ、ペア学習を通して、いい考えを広げていこうと思った。新聞は、辞書(ことば辞典)がわりに活用した。
- ・子供たちは、新聞からいろいろなことばを選んだ。そして、エピソードと結びつけて話を進めることができた。
- ・アクティブラーニング(主体的な学び)にも新聞が役立てられそうだと感じた。

#### <質疑>

- ・3年道徳の授業では、「導入」と「終末」で新聞を活用していたが、参加者の中で同様の授業を実践した人は？

- ・バンクーバーオリンピックでスノボの選手記事を使って、服装について考える授業をしたことがある。
- ・河北データベースを使い、白鳥を大切にしている記事を「導入」で扱ったことがある。
- ・授業で新聞記事を扱うのは、カリキュラムを考えるとハードルが高い。「導入時」に利用するのは有効ではないか。
- ・本時は、中野小と戸倉小という被災校の写真を使ったが、地震(津波)のことに触れてもよかったのではないか。
- ・5年国語の授業では、新聞を「ことば辞典」的な活用をしていた。
- ・教室後方にあった「記事集め」と本時のつながりは？今後の予定は？
- ・カードに書きためて発表に生かしていく活動は、これからもやっていきたい。
- ・子供たちはエピソードをはさんでうまく話していた。普段どのような指導をしているのか。
- ・ホワイトボードの活用、ペアトーク、オープンクエスチョンなどを生かした発表を工夫させてきた。

#### <指導講評>

仙台市立郡山小学校 校長 相澤経利 氏

- ・「新聞に親しむことは、ニュースに親しむということ～自分はどうすればよいかを考えることは、よき市民を育てるというNIEの目標でもある。(故大風先生のことば)
- ・5年生国語の授業：日頃の取り組みのすばらしさを感じた。
- ・「ことばの貯金箱」の活動を、国語の授業で効果的に扱った
- ・オープンクエスチョン～子どもへの投げかけがすばらしい。
- ・本時の成功は新聞活用に支えられていた。
- ・3年生道徳の授業：指導案に新聞活用の苦勞が感じられる。新聞を効果的に活用するため、「導入」と「終末」に写真を使った授業の構成がすばらしい。
- ・「報道写真」を扱う時は、カメラマンや編集者のメッセージを確認して授業に使いたいものである。

## 新聞が育てることばの力

宮城教育大学 教授 児玉 忠氏



### はじめに

この3月までの14年半、弘前大学教育学部で教員養成の仕事をして参りました。研究者としての残りの人生、宮城教育大学で新しい気持ちで進めたいと思いま

す。よろしくお願い申し上げます。

2011年に青森県で開かれたNIE全国大会をきっかけにNIEに関わるようになりました。ただNIEそのものが専門ではなく、私の一番のフィールドは国語科教育です。

NIEというのは教科の枠組みには入らず、領域でもない。だからこそ各教科がそれぞれに関わることができる一方で、なかなか本格的に取り組んでもらえないという悩みがある。逆に様々な領域や教科からアプローチができる良い面もあるという解釈もできます。

### 1. NIEの目的

日本NIE学会という組織がございます。日本NIE学会は、大学の研究者と実践家の先生方の組織で年に一回大会を開いています。そこで『情報読解力を育てる NIEハンドブック』という本を出しています。今日はこの中からNIEの目的を抜粋してきました。

NIEには目標が5つあり、その中の一つ目が読解力の育成です。多くの場合、読解力とは、正しく読みなさいというニュアンスで言っていると思いますが、最近、もう少し広がった意味で使われるようになりました。PISA型読解力の登場で「正しく読む」+「テキストに対して自分の考えを持つように読む」。違う言い方では「テキストを評価的に読む」という読み方も含めて読解力になっています。昔は、深く読むとか豊かに読む力が重要な学力と言われていましたが、この考え方が大きく変化しました。NIEの目標である読解力を「正しく読む力」+「評価的に読む力」という意味でとらえてみたいと思います。学会が掲げる二つ目の目的は、「情報活用能力」です。これは新聞を読んで活用するという事です。国語科的な言い方ですと目的を持って読む、何かのためにテキストを読む、これは国語の学習においてはあ

まりされて来なかった恨みがあります。学習者は、何のために読むのかという目的意識がないままに実は読み教材の学習は始まっていたのです。国語科において情報活用能力を発揮しながら読むというのは、課題を解決するために読む、目的を達成するために読む能力をつけろと言われていたのですが、まさに、NIEとは最新の情報を知るために読む。それで何かを解決する。ということに大変適した読解力がつく。国語にとって新しい学力との親和性が高いということになります。

それから三つめ、メディアリテラシーの育成についてですが、国語科からいうと二つの側面があって一つは文字以外のものも読みの対象にするということです。写真や図表、イラスト、グラフ、これらも国語科の読みの対象にしましょうということなのです。昔は、説明文とは写真も図表も無くても言葉だけで何かを説明する、そういう役目だと教えてきました。だから写真なんて邪魔だと言ってきたわけです。実物がそこにはないのに、行ったことが無いのに説明文を読んだら行った気になる。見た気になる。これが優れた説明文である。しかし、最近、写真は、映像もある、グラフもある、分かりやすくてリアリティもある、言葉とプラスアルファの相乗効果でメディアが構成されている。そういう時代を生きる子供たちに、写真も何もいらぬ。言葉だけで勝負しろ。という説明文の学習は、時代遅れもかも知れません。もう一つ、メディアリテラシーの問題としてぜひ取り上げておきたい点は、全てのメディアには、送り手と受け手がいることです。現代社会を生きる子供達は、いつも、清く正しく美しいテキストとだけ向き合えるわけにはいかないのは皆さんもうお分かりですよ。情報を吟味する力、本当かな？と思う力が必要になってきます。そうすると、この送り手は一体誰なのか、それは信頼される場所に出されているのか、ヤフーニュースのトップニュースだけでいいのか、ということです。それを考えさせてくれるのがこのメディアリテラシーです。逆に言えば教科書も評価的、批判的に読むのはクリティカルリーディングと呼ばれています。そのように教科書を扱うことも、このメディアリテラシーでは大事なことになります。そして、教科書でそれをやらずとも新聞はそれにぴったり、先ほどの情報活用能力も新聞はピッタリだということになります。



以上が主として国語科に非常に関連性のあるNIEの目標になります。

## 2. NIEの内容と方法

NIEが、新聞とどのように関わるかという、読むとつくる、書くというのがあります。

「比べ読み」を学習活動として取り上げているのは小、中学校の国語科の教科書です。なぜ比べ読みの活動が読む中でも取り上げられているのかは、メディアリテラシーと関係があります。つまり、いったい誰が、どういう立場の人でどんなメッセージを伝えようとこの記事を書いたのか、AとBの新聞を比べると？…やっぱり宮城県の河北新報は楽天のニュースはでかでかと載っている。大阪では楽天のニュースは小さい。これは、誰がどういう立場で、何の目的でつくるのかによって違う。それがまさにメディアリテラシーと連結するので比べ読みっていうのを我々はやるわけです。更には、内容が正しいかどうかを吟味、評価しながら読むというのが、新聞ではやれることなのだと思います。

新聞をつくる・新聞を読む、どちらが学習者から見てレベルの高いことだと思いますか？一般的には新聞をつくる方が圧倒的に難しいと思いますよね。ところが学習指導要領はそうになってないのです。ご承知のように、新聞をつくるのは3・4年生です。比べ読みは5・6年生です。我々からすると新聞との親しみ方は、つくるところから始める方がカリキュラム特性としての親和性が高い。生き物新聞で理科、お米新聞で社会科、クジラ新聞で国語…など。

クジラを題材とした説明文を学ぶにあたり、説明文に載ってない情報も自分で調べて、クジラ新聞をつくる。こんなふうに自分の教科のまとめとして新聞づくりをさせる。今もあちこちで行われているように思います。学習のまとめをしたり、学んだことに対する自分の想いを述べたりする一つのフレームとしてこの新聞が活用されている訳です。平成10年版の指導要領から、パソコンでローマ字入力ができるように、5・6年生から3・4年生に下りました。できるだけ早い時期にパソコンと親和性を持たせたいということも我々の国語科としては思うところでもあります。

皆さんにぜひ注目していただきたいことは、文章カタログとして新聞を見る目です。一般的に新聞には、客観的な事実が書かれているという理解がほとんどではないでしょうか。しかし全国的な学力調査・中学校のB問題で新聞の1面下の天声人語のようなもの、そこにはどのようなものが載っていますかという質問に対して5割しか、「意見」が載っていると答えられなかった。つまり、コラム記事だから個人の意見がエッセイ風に載っていることを、中学生でも半分しか分からなかった。我々は新聞には様々な文種があることに教材性があると考えています。例えば記事文、これは一番客観性が高い、そして次は

解説文、それ以外にはコラムやエッセイ、社説とか個人の投書が出てきます。客観性が高いものからどんどん主観性が高いものに並べました。

究極はなんだとお思いですか？そう、個人の短歌や俳句です。マンガも入れてもいいかも知れませんが、いわゆる創作系列、そんな風に事実の系列から意見や創作の系列まで様々な文章が並んでいるのです。それと、学習指導要領でも様々な文章を書けと小学校の時に言っています。記録文、紹介文、説明文、感想文、意見文、それか創作。ですから文章カタログとして新聞をみると、お手本になる文章が新聞にはあることから、新聞の教材性について注目していきたいところです。

## 3. 新聞が育てる言葉の力

今日の話のメインの「新聞が育てる言葉の力」にいきます。今まではNIEを国語科の立場から見るというお話でしたが、さらに国語科の中身に入り込んでお話をしたいと思います。

「記事を読む・記事で学ぶ」聞き慣れた言い方ですと教材を学ぶ・教材で学んでやってやりますね。

私たちは、国語科以外の他の教科も基本的に教材で学びます。学習指導要領における指導事項を学ぶわけです。記事を読むのではなく記事で学ぶ、つまり記事は目的ではなく手段なのだと、そこにどう意識をもち続けられるかがNIEを教室に取り込む初期の段階で極めて大事な要素です。面白い記事を教室に持ち込むとき、多くの場合、内容を子供たちに知らせています。社会科だったらそれでいいのかも知れませんが、国語科の場合、それでは不十分です。その内容をどんな伝え方で伝えているかということのセットで行きたい。

例えば、見出しという問題がある。今日、一例を持って来ました。梨田監督とオコエ選手の記事です。写真はどう読み、私だったらこの記事に添える見出しはこれがいいと思うか…ここで学力が動いています。学力を動かしたいのです。写真と記事に関連させてぴったり合う見出しは何でしょう？という学力です。授業でやるときには、なんで？とやってほしいのです。当たり外れは問題じゃなくて、そこにつないだ理由が大事なのです。今日の鈴木先生の授業は、本当にいい授業だった。「根拠」「事実」「理由」が大事。学力ポイントがはっきりわかっているので「理由」をつけている。

新聞を教室の中に持ち込むっていうことは国語科の場合、先生は楽天ファンだからこんな記事に目が留まったよ。ではなくて、内容はこう書いてある。表現はこうなっているから、こういうタイトルが付けられている。だからこの記事はいい記事だと思うよ。こういう風な記事への注目度で授業をすることになるのかなと思います。

記事をとらえるための基礎知識と教材化の視点。言葉は実物ではなく、実物を指し示すだけの記号で

す。ですから文章の中から事実と意見を分けましようと言っても実は無理なのです。全ての言葉は意図を持って誰かに選ばれ、組み立てられている。同じ記事、同じ事実を見ているのに違う言葉で組み立てられている。これが言葉の本質。ここを国語科としてしっかり学んでほしい。

「写真や図表」も読みの対象となる。言葉と同様に事実そのものではありません。いくら客観的な温度変化を表すグラフであったとしてもそれは既に記号化されたものにすぎません。縦軸横軸をどう取るかによって、すごく増えているようにもあんまり増えていないようにも見えるよう意図的に操作が可能です。すべての写真や図表に撮影者や作成者の意図がある。

新聞は伝達説明のツールで、必ずその記事には発信者なる人物がいて、ある意図を持ち、新聞という媒体・メディアによって伝え、それを受信者が読み取る。その読み方については、特に今まで学習してこなかった。メディアリテラシーの学者が共通していることがある。「私たちの日常にすっかり溶け込んでいるテレビ・電話・新聞だが、誰も読み方を教えてくれなかった。自然と身に付くと思っていた。作法についても誰も学ばない。自然とできると思っていた」と。

#### 4. 本日の公開授業（5年生）を拝見して

今日の5年の授業は、卒業間近の6年生に贈る言葉を新聞の見出しの切り抜きから選び、その選んだ理由をエピソードを交えてスピーチするという内容でした。記者が何か別なことを伝えるために使った新聞の文脈の中の言葉を、5年生が6年生に向ける。送り手と受け手がチェンジされるわけですね。新聞の書き手と読み手じゃなく、どういう文脈をつけるのかが学力だったのです。まさに文脈変換です。ここでの学習のポイントは、新聞に使われていた言葉の主体が変わり、受け手も変わりますが言葉は変わらないことです。この言葉にぴったり合い、5年生から6年生に渡すのにぴったりする文脈をつくれますかという論理的思考力を働かせる。まさに、そこが新聞で学べるところなのです。

最近の子供たちは語彙力が少ないと言われますが、ではどうすればいいのか。今回、集団コミュニケーションのなかで使わせようとしたのです。使う言葉も自分の知っている語彙ではなく、新聞に載っていた語彙を使わせる。ここに非常に複雑なからくりがある。読んで意味が分かる理解語彙に対して、表現語彙がある。圧倒的に理解語彙の方が先に進んで、使えるのはその後、1・2年後にくる。意味は分かるけど使えない。というのがほとんどです。その理解語彙をどういう風に表現語彙に変えていくかことに、私たちの指導の核がある。理解語彙を増やすために、今回の言葉の貯金箱があった。図工の時間に言葉の貯金箱でたくさんの言葉を集めさせて、今度は、あの

集団コミュニケーションの場で表現語彙に変えさせる授業なのです。ここがうまくいくと語彙力が増える。語彙力がないというのは、単なる語彙力の量の問題ではなくて、相手とのコミュニケーションの問題も絡んでいるのです。今回は表現語彙を集団コミュニケーションの場で実際に使わせた非常に優れた授業で、理解語彙に新聞の見出しが機能している。新聞の見出しという理解語彙が集団コミュニケーションの場で表現語彙に変わる、ここが今日の授業で感心したところ。もう一つは文脈変換です。言葉には必ず、送り手と受け手がいてコミュニケーションが起るのですが、そこで今日、使われたのが何だったかということ、三角ロジックでした。送り手と受け手のコミュニケーションのクオリティを上げるうえで、今日はそれがすごく生きていたんです。今回は事実と主張と理由づけの三角形を丁寧に作っていました。主張に相当する送る言葉を成り立たせていたのは、1つがエピソード。6年生にこんなことをしてもらった。6年生はこうだったという事実。事実がこうだったからこの言葉を贈りますと。でも今日の先生はそれでは許してくれなかった。そこに必要だったのは理由づけなのです。このエピソードからこういうことが言えるので6年生にこの言葉を贈りますと。ここは、例えばという言葉でつながって、だからという言葉でつながっていきます。そして、この事実と理由をつなぐことによって贈る言葉っていうのが、より確かなものになっていく。ここで論理的な思考力が働いた。論理的な思考力と語彙力という点から極めて優れた国語の授業だったと僕はみています。

次のキーワードはアクティブラーニングになります。アクティブラーニングの要件の1つ目は深い学びかどうか。2つ目は対話的な学びかどうか。3つ目は主体的な学びかどうかです。深い学びかどうかの最初の要件は、例えば課題解決的な展開があるかどうか。今日の場合は完全に6年生に贈る言葉を考える課題解決、ミッション型の授業でした。

対話型の学びの要件でみると、ペア学習していました。とても工夫されていて、相手の言ったことをちゃんとメモして、そのメモを使っていました。つまり二人いないと今日の授業の後半は展開できないように仕組まれていました。役割をもったそれぞれが力を合わせて解決する学習をつくる、二人がいないと、メモが無いと後半にいけなかったというところでコラボレーションの学びと言ってもいいと思います。更に主体的な学び、見通しと振り返りがあること。これまでは先生だけが単元計画をもっていた。何時間やって、最後はこういう風に終わるのだということの子供たちが分かって授業を受けるというのが主体的な学びというのだそうです。その意味で今日は主体的な学びの事例ですとっていいと思います。

PISA 型読解力について。B問題のような問題が解

けないと国際的な学力として認められない。正しく読む。詳しく読むだけでなく、自分はどう思うかと評価的に読む。何かの目的を解決するために読む。という読解の姿を総合して読解力と呼ぶ方法がとられました。従来の国語科読解力にプラスアルファとして評価と活用が入ったものをこれからの読解力という。もはやPISA型読解力という言葉は消えて、ただの読解力になるでしょう。

## 5. 教科書教材と新聞

小学校の国語科では新聞がどのように使われているのか実例を東京書籍にもって参りました。新しい国語の4年の上。皆で新聞をつくろうというのがあります。他教科でもお米新聞とかなんとか新聞で活かそうということになりました。そのときに国語科として譲れないポイントが3つあります。それは書くべき要素です。分かりやすい記事が書けたか、興味を引くような見出しを考えられたか、それらを分かりやすい割り付けで配置できたかです。教科書では、一つ目のわかりやすい記事を書くために、いつ、どこで、誰が、どうしたということを網羅することを示しています。

補足ながら、伝えたいことを分かりやすくするために写真や図、絵などを取り入れているか、テキストなどが入っているか、それによって分かりやすさをあげているかという点も国語科として外せないところでは。

2つ目は、読む人の興味を引く見出しです。見出しはなるべく短い言葉でまとめることが示されています。

3つ目は割り付け。記事の分量や置き場所を考える、では優先順位や重要度を考えて記事が作れるかどうか学力になる。これを使って理科や社会で活用していただきたい。理科や社会は教科内容をまとめたりするのに新聞を使いたい、これがうまく合体したときに学習効果がぐんとあがる。

教科書は、それぞれの教科特性に応じてある程度作り込まれています。教科書を読み込んでいただいて肝になることをしっかり押さえるといいと思います。新聞に関してもここが肝になると思います。国語の5年生の教科書ですがポイントは比べ読みです。A社とB社の記事があります。しぶきを上げる「江戸前アユ」と、よみがえった「アユの川」。これは、今を伝えるのか、よみがえった経緯を伝えるのか、注目するポイントの違いから見出しが違ってくる。関連してその記事文も違っている。その違いをしっかりと学ばせることになります。伝えたいことの見出しも写真も本文も連動しているんだということ。そのことをしっかり理解したうえで、新聞をつくる場になった時に発揮される力になっていくのだらうなあとと思います。次に学習キーワードが明確に示されています。それが書き手の意図です。この言葉は学習用語として何度も繰り返し使っておきたい。

これまでは教科書教材を書き手と読み手との関係で考えることができていませんでした。日本の教科書は誰が書いたか分からず、文科省が作ったことになっていました。誰が、どんな意図で書いたのか、誰に送られているのか、こういう学習は教科書さえちゃんとやれてこなかった。

理科や社会の教科書のあの文章、本当は誰かが書いているのですが、個人の名前は出ていなかった。最近はずっと筆者が出るようになりました。誰かが私たちにに向けて書いている。そういうコミュニケーション的に言語をとらえる力、コミュニケーションの過程として言語をとらえる力、これが国語科の要なのです。新聞は、そのような学習に有効性が高いと考えられます。

## 6. 新聞を用いた教材開発

私が作った新聞の記事を使ったワークシートの紹介をさせていただきます。

新聞表現の方法や工夫を理解するためのワークシートです。ものすごく大きな蔭の下を幼稚園の子が見上げながら歩いている写真があります。この写真の工夫は何だろうということで、問題にしてみました。見上げるようなアングルで臨場感を与えるのが意図ですね。このように写真にも意図がある。

ライター規制の記事では、子供が簡単に火遊びできないようにライターのレバーが重くなったが、規制をかけるのはいかがなものか、という投書記事で比べ読みをさせて、どう思うかを考える。タイガーマスク現象では、最初は非常に好意的な報道が多かったが、その後、批判的な報道も出てくるようになったことについて、みんなはどう思うか。他社の新聞記事と比べ読みしながら考えてみようという問題を作りました。ただ単にスクラップして感想をまとめるだけの直球勝負では持続しづらい面もあるが、ちゃんと本文を読むステップ、いわゆる旧国語科の読解力に加え、自分はどう思いますか？を問う、新しいタイプの読解力を一つのワークシートの中に入れてみました。余裕が無いと中々できませんので、一人が作ったら皆で使い回すという工夫も要ると思います。こういったところには新聞社の力も借りてできたらな…とっております。

### おわりに

国語科の新しい読解力、アクティブラーニングへの対応、様々な方向を求められる状況がまだまだ続きます。新聞などを積極的に取り入れることで、授業がぐっとグレードアップしたり、質が高まったりということが、経験的に立証済みです。どうぞみなさん、様々な新聞を活用した授業をしていただけたらなと思いました。ご清聴ありがとうございました。

(記録：事務局 佐々木可奈子)

## 2 宮城県N I E地区研修会

### 研修会の概要

### <テーマ> ～たのしく学ぶN I E～

事務局 齋藤 昭雄



平成 27 年度の宮城県 N I E 地区研修会は、8 月 20 日（木）、塩竈市立第一小学校を会場にして開催された。参加者は 44 名。

研修会は午前 9 時に開会。第 1 部は、時事通信社仙台支社長の山田恵資氏による講話だった。「政治ニュースをより身近に～主権者教育を考える～」という演題で、昨今の政治ニュースを分かりやすく解説していただいた。ラジオでニュース解説をしている講師ということもあり、参加者は、親しみをもって話を聴くことができたようである。そのことは、事後のアンケートからも見て取れる。「いつもラジオを聞いて、今日お話を聴くのを楽しみにしていました。政治に関する話題は扱いが難しくなっていますが、気をつけながら取り上げたいと思います。」など好意的な意見が多く寄せられた。

18 歳からの選挙権という話題は、学校関係者にとって非常に関心の高いものであるが、同時に「主権者教育」に対する不安のようなものを感じている先生方も多いのだろう。今回の研修が、そうしたことの解決のきっかけになれば幸いである。

第 2 部のワークショップでは、大阪から観光家の陸奥賢氏を招き、「まわしよみ新聞作り」を体験した。グループ内での自己紹介もなくスタートしたので、始めは皆固い表情だったが、作業を進めるうちに笑顔が見られるようになり、どのグループも楽しく新聞作りに取り組むことができた。このワークで大事なものは、どこの誰と一緒に作るのかということは大した問題ではなく、「新聞記事」を仲立ちにして自然にコミュニケーションをはかるといふことなのだろう。「まわしよみ新聞」の効果は参加者の次の言葉に表れている。「テーマではなく、一人一人が自由に記事を選び意見を言い合えたので、楽しい時間を過ごせました。」

参加した先生方の多くは授業でも実践してみたいと話していたが、教科（領域）のねらいに照らして考えると難しいところもある。「まわしよみ新聞」の授業実践に向けた工夫を大いに期待したい。



### < H27 年度地区研修会の日程 >

時 程	内 容
9 : 10～10 : 10	講話「政治ニュースをより身近に～主権者教育を考える～」 講師 時事通信社仙台支社長 山田 恵資 氏
10 : 15～12 : 00	ワークショップ 「まわしよみ新聞」を作ろう 講師 観光家/コモンズ・デザイナー 陸奥 賢 氏

### 3 東北・北海道ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議

宮城県N I E委員会事務局長 砂金 慎

10月3日、札幌市の北海道新聞社会議室で、「北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議」が開催されました。会議は、北海道新聞社寺沢純取締役と北海道N I E推進協議会高辻清敏会長の挨拶の後、吉成N I Eコーディネーターの報告がありました。

次にN I E全国大会秋田大会を振り返るというテーマで、秋田魁新報社の大石卓見読者局N I E推進部次長が、N I E全国大会を開催する苦勞と成功させた喜びを述べた後、この燃え上がったN I Eの炎を消さないために、各社の分担金を増やして対応したいと話しました。全国大会までは盛り上がっていますが、終了後、新聞の配置問題だけではなく教員や社の担当者の異動などでN I Eが下火になっていくのは、どの協議会にとっても課題になっています。また、大石次長は、今回、宮城県が貸切バスで多くの先生を大会に参加させたことを参考に、2018年の盛岡大会では、大型バスいっぱい先生を盛岡に連れて行きたいと話しました。

事務局長報告では、各県の現状と課題が報告され、福島県からは、今年度初めてN I Eアドバイザーを認定し、今後、アドバイザー中心に展開をしていきたい。また、秋田県からは、横手市が、全28校にN I E担当を置くなどN I Eへの取り組みが広がっている。

北海道からは、広大なエリアのために苦勞しているが、各地での取り組みの強化、教員によるN I E研究会との連携による地区セミナーなどを報告しました。青森県からは、N I Eセミナーの復活、岩手県からは、18年の盛岡大会へ向けた取り組み、山形県は、発足20年を迎えた山形県の現状を報告しました。

宮城県からは、小学校部会による「新聞の読み比べ」師範授業と日販協の「すべ教」とのタイアップによる実践校への対応などについて報告しました。また、副教材としての新聞をどのように使うべきか、複



数紙をどのようにして入手するかなど悩んでいる学校現場の様子を報告しました。

各県アドバイザーからの報告では、当日の新聞にこだわる必要はなく、校内や教員の自宅で読み終わった前日の新聞を活用している。教員による新聞夜塾を火曜日の夜に開催している。高校のN I Eでは、教科が違くと取り組み方が違うので、校内ではなく地域の教科単位で取り組むほうがいい。前任校で教頭としてN I Eに取り組んできたが、転任したらN I Eの火が消えてしまった。など、たくさんのアイデアと課題が報告されました。

宮城県からは、大槻欣史アドバイザーが参加し、アドバイザーとしての役割についての悩みについて話しました。各県3名までではありますが、この会議に参加するアドバイザーの交通費と宿泊代が支給されます。来年は、多くのアドバイザーの皆様が参加し、アイデアや悩みを共有できることを期待します。



## V みんなの広場

### 新聞から広がる学び

宮城教育大学 初等教育教員養成課程

佐々木菜摘

12月2日に行われた宮城県NIE研究大会では、新聞を活用した授業の在り方や、新聞がもつ教材性について改めて深く考えさせられました。

5年生の国語の授業を参観させていただき、児童たちが楽しそうに活動をしている様子を見ることができました。私が小学生だった頃は新聞に対して親しみにくい印象をもっていたので、生き生きと話し合っている児童の姿がとても新鮮に感じました。私が新聞に親しめなかったのは、毎日、新聞が家にあるような環境にあったにも関わらず手に取って読むことが少なかったことと、学校の宿題として課されたときに読まされていたことが原因だったのではないかと思います。ですから、今回の「言葉貯金」のような活動を通して、まずは児童たちが新聞に触れたり目を通したりする機会を増やすことがより大切なのだと実感しました。いきなり記事の内容を一つずつ読んでいくのではなく、自分の好きな言葉を見つける活動に取り組みせることで、記事を読むことに対する抵抗を児童に感じさせずに新聞に親しませることもできると思います。

また、国語科の「話す」という単元の中で新聞を扱っているという明確な認識の下、ペア学習を積極的に取り入れたり、聞き手にメモを取らせたりすることで、児童たちが自然と相手の話を注意して聞くことができるような工夫が見られました。普段の学習の成果も大いにあるとは思いますが、自分の言葉で相手に分かりやすく伝えようとする姿勢や意欲が、児童たちの姿からたくさん伝わってきました。新聞はあくまでもねらいを達成するための手立てであり、目的ではないという授業のスタイルを拝見することができ、とても参考になりました。

本日の研究大会に参加したことで、「新聞」は児童の学びを深めるために有効な手段であること、学びの宝庫であることを実感することができました。教員になる前から、このような貴重な場に参加することができて大変光栄に思います。今後は、児童たちが新聞から多くの学びを広げることができるよう、様々な領域や教科における活用の仕方を今後も勉強していきたいです。ありがとうございました。

### 宮城県NIE研究大会に参加して

宮城教育大学 初等教育教員養成課程

三浦 晴信

今回の「宮城県NIE研究大会」の全体会ではNIEについて今までよりも深く知ることができました。全体会の中で印象に残っていることが二つあります。

一つ目はNIEの考えの下、新聞を使って授業を行う際には、あくまでもねらいを達成するための手段として新聞を使うようにするというお話です。NIEの実践をする際に、指導の中に、いかに自然な形で新聞を使うかということが大切なのだ学びました。「あくまでもねらいを達成するために新聞を使うということが大切」という言葉が印象的でした。

二つ目は、児玉先生の講演の中での「NIEの考えの下、国語科で授業を行う際には、新聞の内容を読むだけでなく、書き手が読み手にどのような方法で情報を伝えているかということ意識することが重要だ」というお話です。新聞を使うことだけで満足するのではなく、科目ごとに科目ごとの特性や指導内容に合わせた形で新聞を利用することが大切であるということを知りました。

また、今回NIEの考えの下、新聞を使った授業を実際に参観させていただき、NIEを噛み砕いて授業の中に取り入れる方法の例を学ぶことができました。私は今回、五年生の国語の話すこと聴くことの領域の授業を見させていただきました。

今回観察させていただいた授業では、『言葉の貯金箱』という活動をしていました。『言葉の貯金箱』は、児童が新聞の中の好きな言葉を切り取ったものを保存しておき、その言葉たちを辞書のように使うという活動です。新聞に使われている言葉には児童が日常でなかなか触れないような豊かな表現の言葉が多く、語彙を増やすことに非常に役立つと感じました。また、児童の新聞に触れる機会が増えるという効果もあり、すばらしい活動だと思いました。とても勉強になりました。

私は今回の「宮城県NIE研究大会」で初めてNIEに触れました。NIEとはどのようなもので現場で先生方はどのような取り組みをしているのか知ることができ、とても勉強になりました。

# VI 研究組織

## 1 宮城県N I E委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はN I E (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

- ①実施目的及び計画に関すること。
- ②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者	宮城県連合小学校特別活動研究会会長
仙台市教育委員会代表者	宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県小学校長会会長	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市小学校長会会長	仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県中学校長会会長	宮城県連合小学校国語研究会会長
仙台市中学校長会会長	宮城県連合中学校国語研究会会長
宮城県高等学校長協会会長	仙台市中学校国語研究会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長	宮城県内の大学の代表者
宮城県連合中学校教育研究会会長	在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

- 第6条
- 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。
  - 2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。
  - 3 副会長は会長が指名する。
  - 4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
  - 5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長          仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県N I E推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

- 第10条
- 1 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。
  - 2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成 5 年 7 月 1 日	改正 平成 22 年 6 月 1 日
改正 平成 6 年 6 月 9 日	改正 平成 23 年 7 月 5 日
改正 平成 16 年 2 月 27 日	改正 平成 24 年 6 月 5 日
改正 平成 18 年 2 月 15 日	改正 平成 25 年 6 月 20 日
改正 平成 22 年 2 月 26 日	

## 2 宮城県N I E推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E推進委員会と称する。

(目的)

第2条 本会は、宮城県N I E委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①N I E研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なこと

(組織)

- 第4条
- 1 本会は、N I Eに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。
  - 2 本会の構成は次の通りとする。  
委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局
  - 3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

- 第6条
- 1 委員長は副委員長の互選により定める。
  - 2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

- 第7条
- 1 副委員長は、次に掲げるものとする。  
宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長
  - 2 副委員長は、会長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

- 第8条
- 1 運営委員は、会員の互選により定める。
  - 2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する。

(専門委員)

- 第9条
- 1 専門委員は、会員の互選により定める。
  - 2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する。

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県N I E委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。

(補則)

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

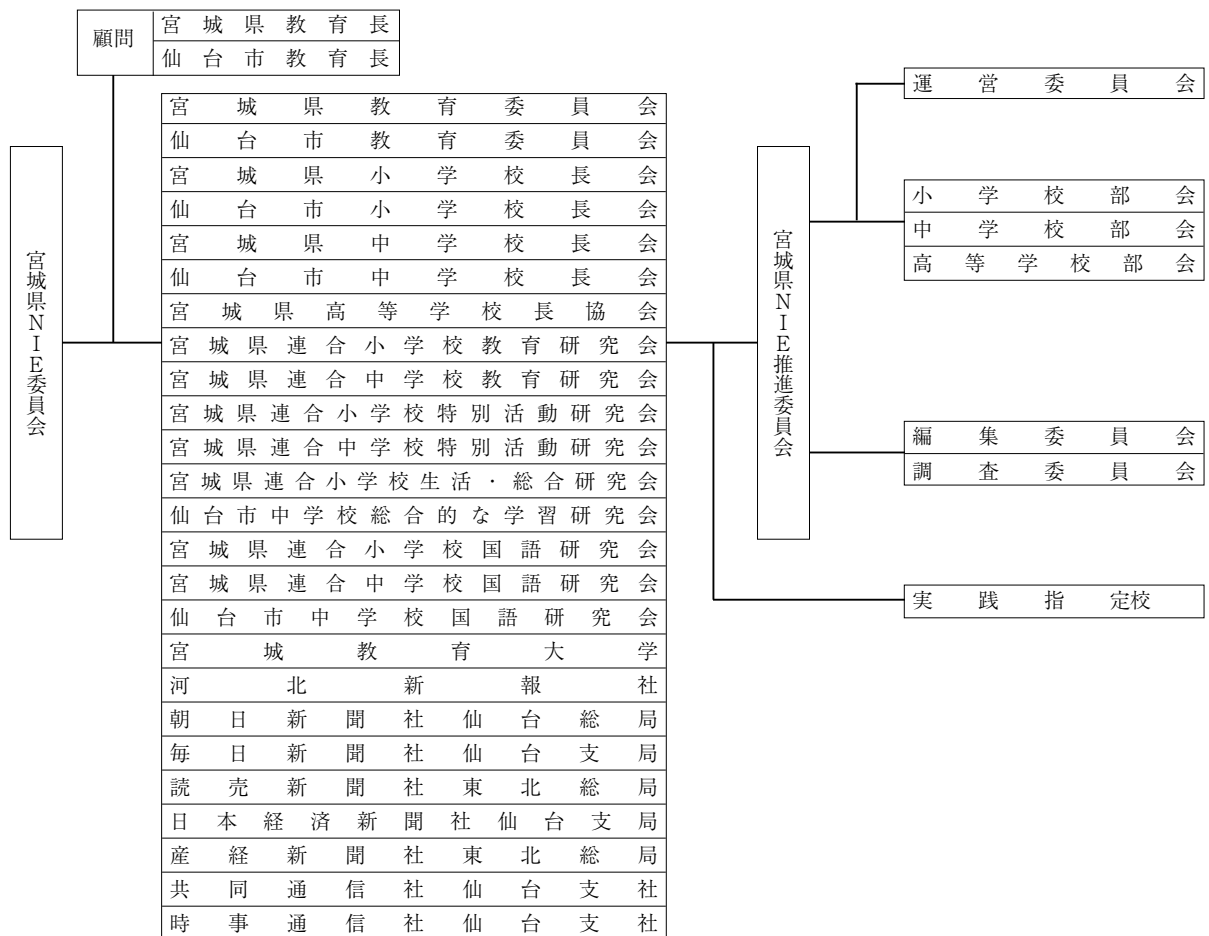
付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

- 改正 平成 5年6月25日  
改正 平成16年2月27日  
改正 平成20年1月16日  
改正 平成23年2月25日  
改正 平成24年6月5日

◆内規 \*追加

- 1 宮城県N I E実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

### 3 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



#### 平成27年度宮城県NIE委員会役員

<敬称略>

役職	氏名	所属役職
顧問	高橋 仁	宮城県教育委員会教育長
顧問	大越 裕光	仙台市教育委員会教育長
会長	星 豪	宮城県中学校長会長（古川中学校）
副会長	渡邊 幸雄	宮城県高等学校長協会会長（仙台二高校長）
副会長	八巻 賢一	仙台市中学校長会長（広瀬中学校）
副会長	莊司 貴喜	宮城県小学校長会長（多賀城小校長）
副会長	古澤 康夫	仙台市小学校長会長（上杉山通小校長）
副会長	小野木 克之	河北新報社取締役総務局長
委員	山内 明樹	宮城県教育庁高校教育課長
委員	桂 鳥 晃	宮城県教育庁義務教育課長
委員	坂本 憲昭	仙台市教育局教育指導課長
委員	早坂 俊一郎	宮城県連合小学校教育研究会会長（古川二小校長）
委員	佐藤 新一	宮城県連合中学校教育研究会会長（築館中学校）
委員	大江 広夫	宮城県連合小学校特別活動研究会会長（大野田小校長）

役職	氏名	所属役職
委員	佐藤 一浩	宮城県連合中学校特別活動研究会会長（根白石中学校）
委員	狩野 一男	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長（東長町小校長）
委員	高橋 教義	仙台市中学校総合的な学習研究会会長（郡山中校長）
委員	森屋 勝治	宮城県連合小学校国語研究会会長（七北田小校長）
委員	小野寺 正一	宮城県連合中学校国語研究会会長（新月中校長）
委員	岡崎 徹	仙台市中学校国語研究会会長（将監東中学校）
委員	菅野 仁	宮城教育大学（教授）
委員	坪井 ゆづる	朝日新聞社仙台総局長
委員	須山 勉	毎日新聞社仙台支局長
委員	菊池 嘉晃	読売新聞社東北総局長
委員	類・監事 山本 朗生	日本経済新聞社仙台支局長
委員	白浜 正三	産経新聞社東北総局長
委員	影井 広美	共同通信社仙台支社長
委員	山田 恵資	時事通信社仙台支社長

#### 平成27年度教育委員会担当者

宮城県	二階堂 浩一郎	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
宮城県	三宅 裕之	宮城県教育庁高校教育課主幹
仙台市	猪股 亮文	仙台市教育局教育指導課主幹兼教育課程係長

## 平成27年度 宮城県N I E推進委員会 運営委員会

<敬称略>

役 職	氏 名	学 校 名 (職名)
委員 長	佐 藤 一 浩	仙台市立根白石中学校 (校長)
副委員 長	大 江 広 夫	仙台市立大野田小学校 (校長)
副委員 長	狩 野 一 男	仙台市立東長町小学校 (校長)
副委員 長	高 橋 教 義	仙台市立郡山中学校 (校長)
副委員 長	森 屋 勝 治	仙台市立七北田小学校 (校長)
副委員 長	小野寺 正 一	気仙沼市立新月中学校 (校長)
副委員 長	岡 崎 徹	仙台市立将監東中学校 (校長)
副委員長・小部会長	相 澤 経 利	仙台市立郡山小学校 (校長)
運委・小副部会長	高 橋 淳	仙台市立北仙台小学校 (校長)
運委・小副部会長	鍵 頼 信	南三陸町立入谷小学校 (校長)
運委・会計	大 友 浩 美	仙台市立上野山小学校
運 委	伊 藤 公 一	柴田町立柴田小学校 (校長)
運 委	中 辻 正 樹	仙台市立七郷小学校 (教頭)
運 委	阿 部 謙	仙台市立若林小学校 (教頭)
運 委	大 場 陽 子	川崎町立前川小学校 (教頭)
運 委	千 葉 久美子	仙台市立北六番丁小学校
運委実践指定校	今 藤 正 彦	仙台市立七北田小学校
運 委	加 勢 徳 寿	涌谷町立涌谷第一小学校
運 委	山 本 十和子	仙台市立片平丁小学校
運 委	青 木 茂	仙台市立高砂小学校
運 委	高 橋 和歌子	仙台市立北仙台小学校
運 委	鈴 木 誠	多賀城市立多賀城東小学校
運 委	齋 田 淳 一	仙台市立東四郎丸小学校
運 委	松 本 瑞 雅	仙台市立四郎丸小学校
運 委	三 塚 理 恵	美里町立小牛田小学校
運 委	秋 場 文 東	松島町立松島第一小学校
運 委	福 田 英 明	大和町立吉岡小学校
運 委	小 山 順 一	登米市立北方小学校
運 委	千 葉 修	大崎市立古川第二小学校
運 委	行 本 忠 司	仙台市立大野田小学校
運委実践指定校	藤 澤 雪 彦	七ヶ浜町立松ヶ浜小学校
運委実践指定校	鈴 木 優 太	仙台市立田子小学校
運委実践指定校	阿 部 恵	塩竈市立第一小学校
運委実践指定校	佐 藤 秀 明	登米市立上沼小学校
運委実践指定校	根 岸 健 太	仙台市立中野栄小学校
副委員長・中部会長	石 井 宜	仙台市立八木山中学校
運委・中副部会長	清 野 和 俊	仙台市立加茂中学校
運委・中副部会長	進 藤 千 枝	仙台市立長町中学校
運委・会計	菅 原 久 美	仙台市立八乙女中学校
運 委	佐々木 成 行	仙台市立第一中学校 (校長)
運 委	相 澤 和 男	石巻市立蛇田中学校
運 委	須 藤 浩 司	仙台市立八木山中学校
運 委	音喜多 玲 子	仙台市立台原中学校
運 委	木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
運 委	齋 藤 美 佳	大崎市立岩出山中学校
運委実践指定校	村 檉 雅 恵	蔵王町立宮中学校
運委実践指定校	菅 原 恵	利府町立利府西中学校
運委実践指定校	丸 山 仁	宮城学院中学校
副委員長・高部会長	平 居 高 志	宮城県水産高等学校
運委・高副部会長 会計・実践指定校	大 槻 欣 史	仙台市立仙台青陵中等教育学校

運 委	山 上 隆 司	宮城県泉高等学校
運 委	木 村 誠	宮城県仙台南高等学校
運委・奨励校	柴 田 隆 一	東北学院高等学校
運委実践指定校	桜 井 直 至	宮城県多賀城高等学校

## N I Eアドバイザー

<敬称略>

氏 名	学 校 名
阿 部 謙	仙台市立若林小学校 (教頭)
中 辻 正 樹	仙台市立七郷小学校 (教頭)
今 藤 正 彦	仙台市立七北田小学校
木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
菅 原 久 美	仙台市立八乙女中学校
大 槻 欣 史	仙台市立仙台青陵中等教育学校

## 宮城県N I E事務局

氏 名	所 属 役 職
砂 金 慎	河北新報社教育プロジェクト事務局長
佐々木 可奈子	河北新報社教育プロジェクト事務局
大 槻 俊 順	河北新報社教育プロジェクト事務局
相 田 麻砂美	河北新報社教育プロジェクト事務局
齋 藤 昭 雄	宮城県N I E委員会コーディネーター
笠 原 奈緒子	河北新報社教育プロジェクト事務局
佐 藤 麻 美	河北新報社教育プロジェクト事務局

## Ⅶ 宮城県NIEの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成元年度	県NIE委員会・推進委員会設立事務局河北	小 9 中 17	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡中 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践事例集 小グループ1号
平成4年度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校NIE研修会	○県研究集録4号 ○実践事例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践事例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (パイロット校) ○八軒中 ○向陽台中 (パイロット校) ○泉高 (パイロット校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践事例集 小グループ4号 中NIE部1号 ○みやぎNIEだより 1・2・3号
平成7年度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (パイロット校) ○向陽台中 (パイロット校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (パイロット校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県NIE研修会 ○地区研修会(古川) ○地区研修会(七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践事例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎNIEだより 4・5号
平成8年度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県NIE研修会 (仙台市) ○宮城県NIE白石研修会 (白石二小) ○宮城県NIE石巻研修会 (住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践事例集 小学校部会6号 ○みやぎNIEだより 6・7・8・9号



	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成9年度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県NIE研修会 (常盤木学園高) ○宮城県NIE白石研修会 (大鷹沢小) ○宮城県NIE石巻研修会 (石巻中) ○中・高部会研修会 (田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎNIEだより 10・11・12・13号
平成10年度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 (授業公開) H10・5 ○桂小 (授業公開) H10・11 ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 (授業公開) H11・1	○第3回NIE全国大会 (メルパルク SENDAI) ○宮城県NIE石巻研修会 (稲井小) ○中・高部会研修会 (七郷中) ○小部会研修会 (桂小)	○県研究集録10号 ○NIE実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎNIEだより 14・15・16・17号
平成11年度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの研 究)	○常盤木学園高 (授業公開) H11・11 ○しらかし台小 (授業公開) H11・11・26 ○女川四小 (授業公開) H11・11・29 ○七郷中 (授業公開) H11・12・1	○宮城県NIE研修会 H11・6・16(明成高) ○小部会プロジェクト提案 H11・8・24(東六小) ○宮城県NIE石巻研修会 H11・11・22(蛇田小) ○宮城県NIE大河原研 修会 H11・12・1(金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会 H11・12・1(七郷中) ○小部会実践発表会 H11・1・12(東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号
平成12年度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○しらかし台小 ○大沢小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台南高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの研 究)	○しらかし台小 (授業公開) H12・11・28 ○秋保中 (授業公開) H12・11・30 ○東長町小 (授業公開) H13・1・31	○小部会研修会 (データベース活用) H12・9・13(大沢小) ○宮城県NIE研修会 H12・10・4(八木山小) ○宮城県NIE仙台地区 研修会 H12・11・6 (しらかし台小) ○宮城県NIE石巻地区 研修会 H12・11・8(蛇田小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号

	組 織	推 進 委 員 (人)	協 力 校 実 践 校	研 究 グ ル ー プ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成13年度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 (授業公開) H13・10・2 ○明成高 (授業公開) H13・12・12	○宮城県NIE研修会 H13・11・28(明成高) ○宮城県NIE石巻地区 研修会 H13・11・5(蛇田小) ○宮城県NIE仙台地区 研修会 H13・12・7(塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎNIEだより 26・27・28・29号
平成14年度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○仙台函南萩陵高 ○女川高	○小・中・高部会の 研究活動 (小部会「NIEお しゃべり広場」 H14・8・19 「インターネット の活用」 H14・8・20 中・高部会「公開 講演会」 H14・12・3)		○宮城県NIE研修会 H14・11・7(河北新報社) ○宮城県NIE仙台大河 原地区研修会 H14・11・28(逢隈小) ○宮城県NIE石巻古川 地区研修会 H15・1・24 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録14号 ○みやぎNIEだより 30・31・32・33号
平成15年度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台白百合 学園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県NIE研究大会 H15・8・20(青葉体育館) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H15・8・22(逢隈小) ○宮城県NIE石巻・古 川地区研修会 H16・1・23 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎNIEだより 34・35・36・37号
平成16年度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台白百合 学園中・高 ○越河小 ○広測小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県NIE研究大会 H16・11・2(五橋中) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H16・8・20 (白石市中央公民館) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H16・8・24(田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎNIEだより 38・39・40・41号
平成17年度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広測小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業研 究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台白百合 学園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県NIE研究大会 H17・11・9 (仙台白百合学園) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H17・8・23(田尻中) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H17・8・24(大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎNIEだより 42・43・44・45号

	組 織	推 進 委 員 (人)	協 力 校 実 践 校	研 究 グ ル ー プ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成18年度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校 ○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動  ○小学校部会授業研究 H18・12・6 (原町小)	○仙台市立南中山中学校 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中)  ○宮城県NIE本吉地区研修会 H18・8・3 (大谷小)  ○宮城県NIE大河原地区研修会 H18・8・22 (大河原中)	○県研究集録18号  ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号
平成19年度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院女子中・高	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立黒松小学校 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小)  ○宮城県NIE本吉地区研修会 H19・8・2 (大谷小)  ○宮城県NIE大崎地区研修会 H19・8・23 (涌谷町立涌谷第一小)	○県研究集録19号  ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成20年度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立大沢中学校 (授業公開) H20・11・17  ○涌谷町立涌谷第一小学校 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中)  ○宮城県NIE仙台北地区研修会 H20・8・11 (富谷町立成田中)  ○宮城県NIE仙台南地区研修会 H20・8・21 (亘理町立図書館)	○県研究集録20号  ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号
平成21年度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立榴岡小学校 (授業公開) H21・11・25  ○仙台市立旭丘小学校 (授業公開) H21・12・10	○宮城県NIE研究大会 H21・11・25 (仙台市立榴岡小)  ○宮城県NIE地区研修会 H21・8・20 (石巻市立河南東中)  ○小部会研究交流会 H21・12・10 (仙台市立旭丘小)	○県研究集録21号  ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成22年度	宮教大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○横山小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立南 小泉中学校 (授業公開) H22・11・11 ○仙台市立蒲 町小学校 (授業公開) H22・11・26	○宮城県N I E 研究大会 H22・11・11 (仙台市若林区文化センター) ○宮城県N I E 地区研修会 H22・8・18 (塩竈市立塩竈第三小) ○小部会研究交流会 H22・11・26 (仙台市立蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎN I E だより 62・63・64・65・66号
平成23年度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院榴 ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○榴岡小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立榴 岡小学校 (授業公開) H23・10・18 ○仙台市立東宮 城野小学校 (授業公開) H23・12・7 ○大河原町立大 河原小学校 (授業公開) H24・1・24 ○大崎市立古川 第三小学校 (授業公開) H24・2・23	○宮城県N I E 研究大会 H23・12・7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県N I E 地区研修会 H23・8・17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎN I E だより 67・68・69・70号
平成24年度	宮城県中学 校国語研究 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○美里小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院榴 ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○北中山小 ○大和町吉岡小 ○登米東郷小 ○大崎古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立八 乙女中学校 (授業公開) H24・11・9 ○美里小牛田小 (授業公開) H24・11・28 ○北六番丁小 (授業公開) H25・1・16	○宮城県N I E 研究大会 H24・11・9 (仙台市立八乙女中学校) ○宮城県N I E 地区研修会 H24・8・20 (大和町立吉岡小学校) ○小部会研究交流会 H25・1・16 (仙台市立北六番丁小学校) ○公開実践発表会 (協力校) H25・2・15 (河北新報社)	○東北・北海道地区N I Eアドバイザー会議 H24・9・22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎN I E だより 71・72・73・74号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 25 年 度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○大和吉岡小 ○登米東郷小 ○大崎古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○大崎古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学 院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○美里小牛田小 (奨励校) ○八乙女中 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立八 乙女中学校 (自主公開) H25・11・8 ○美里小牛田小 (自主公開) H25・11・14 ○登米東郷小 (自主公開) H26・2・13	○宮城県N I E 研究大会 H25・11・22 (仙台市立北中山小学校) ○宮城県N I E 地区研修会 H25・8・20 (吉野作造記念館) ○小部会研究交流会 H26・2・25 (仙台市立郡山小学校) ○公開実践発表会 H26・2・20 (河北新報社)	○東北・北海道地区N I Eアドバイザー会議 H25・9・21 (岩手県一関市) ○県研究集録 25 号 ○みやぎN I E だより 75・76・77・78 号
平成 26 年 度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○大崎古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学 院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○大和吉岡小 (奨励校) ○登米東郷小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動  ※小学校部会：5年 国語科の提案授業 実践	○仙台市立富 沢中学校 (授業公開)	○宮城県N I E 研究大会 H26・11・18 (仙台市立富沢中学校) ○宮城県N I E 地区研修会 H26・8・18 (七ヶ浜国際村) ○小部会提案授業① H26・6・24 (仙台市立泉松陵小) ○小部会提案授業② H26・6・30 (仙台市立七北田小)	○東北・北海道地区N I Eアドバイザー会議 H26・9・20 (秋田魁新報社) ○実践報告集 26 号 ○みやぎN I E だより 79・80・81・82 号 ○日本N I E 学会 H26.12.6・7 (東北福祉大学)
平成 27 年 度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○東北学院高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動  ・小学校部会 5年国語科の 提案授業実践  ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○仙台市立田 子小学校 (授業公開) ○5年国語科 提案授業の 公開 (運営委員 在籍校) ○仙台青陵中 等 教育学校の 実践発表会	○宮城県N I E 研究大会 H27.12.2 (仙台市立田子小学校) ○宮城県N I E 地区研修会 H27.8.18 (塩竈市立第一小学校) ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会 H28.1.23	○東北・北海道地区 N I Eアドバイザー会議 H27.10.3 (北海道新聞社) ○実践報告集 27 号 ○みやぎN I E だより 83・84・85・86 号

## Ⅷ 編集後記

「宮城県N I E委員会実践報告書第27号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様にご心から感謝申し上げます。

さて私自身、昨年の12月に仙台市立田子小学校で行われたN I E研究大会に参加する機会を得て、2つの学年実践授業を参観させていただきました。5年生の国語では、新聞の見出しの中から「6年生に贈る、自分の気持ちを言い表すぴったりの言葉」を選び、エピソードを交えてスピーチしていました。

3年生の道徳では、運動会のグループ分けで運動が苦手な子を外しても勝ちたい思いと、仲間外れは良くないという気持ちで揺れながら、友情の大切さを考えていました。「ことばの貯金箱」で記事から心に残る言葉に出会えるように新聞を利用したり、運動会の様子を伝える2つの新聞記事や写真を導入とまとめに使用したりしました。両授業とも、考えを深めあい意見を発表し合えるような工夫がきめ細やかにされているということを実感しました。

記念講演で児玉忠氏（宮城教育大学教授）からは、「新聞は目的を持って資料を集める情報活用能力を高め、情報が正しいかどうかを吟味するメディアリテラシーを育成するのに適切なメディアであること」や、「写真と記事を読んでふさわしい見出しを考え、理由を説明する方法」など具体的な例を紹介いただき、多くのエッセンスをいただくことができました。詳しくは本書の各報告のページをご覧ください。日々の実践に生かしていただけることでしょう。12の実践指定校で取り組まれた実践報告はもちろんのこと、大会や地区研修会報告、N I E工房の投稿、また最近注目されている「アクティブラーニング」や「主権者教育」でのN I Eの活用についても、各所に紹介されています。

これらの玉稿は、授業でN I Eに取り組む際の具体的な方法を示すものであり、各学校における実践のナビゲーターになるものと確信しております。

「生きる力」を育成する理念の下、今後のN I E活動がさらに深められ発展することを祈念し、あいさついたします。

（仙台市立高砂小学校 青木 茂）

### <編集委員>

委員長 青木 茂（高砂小）  
委員 秋場 文東（松島一小）  
〃 木下 晴子（高森中）  
〃 進藤 千枝（長町中）  
〃 木村 誠（仙台南高）

### <事務局>

事務局長 砂金 慎  
（河北新報社教育プロジェクト事務局長）  
事務局 佐々木 可奈子  
（河北新報社教育プロジェクト事務局）  
大槻 俊順  
（河北新報社教育プロジェクト事務局）  
相田 麻砂美  
（河北新報社教育プロジェクト事務局）  
笠原 奈緒子  
（河北新報社教育プロジェクト事務局）  
佐藤 麻美  
（河北新報社教育プロジェクト事務局）  
齋藤 昭雄  
（宮城県N I E委員会コーディネーター）

## N I E実践報告書〈第27号〉

平成28年3月発行

編集 宮城県N I E推進委員会  
発行 宮城県N I E委員会  
事務局 宮城県N I E委員会事務局  
仙台市青葉区五橋一丁目2-28  
（河北新報社内）  
TEL. 022-211-1331  
FAX. 022-211-1339  
印刷 株式会社東北堂  
仙台市太白区鉤取1-2-12  
TEL. 022-245-0229